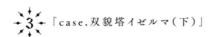


Lord El-Melloi Bl Case Files

ロード・ エルメロイ II 世の 事件簿



目次 Contents

『序章』 005

『第一章』 017

『第二章』 085

『第三章』 171

『終章』 267

『解説』 296

『あとがき』 300

ロード・エルメロイII世の

事件簿

3 「case.双貌塔イゼルマ(下)」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時 に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次 Contents

序章

第一章

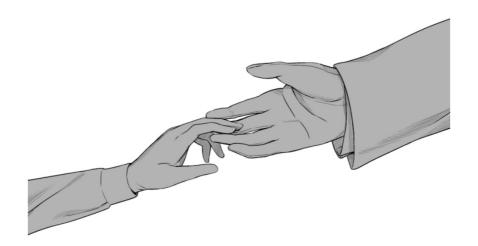
第二章

第三章

終章

解説

あとがき



「……君は、人間は成長すると思うか?」

まるで、それは祈りのような言葉だった。

字面だけならばむしろ傲慢な──凡人はどこまでいっても凡人なのだとか──よくある突き放した意味合いにとれるのに、口にした相手はどこまでも真摯で、掛け替えのない願いを託してる風にさえ聞こえた。

当時の舞台には、ふさわしかったかもしれない。

古く寂れた教会で、黒く塗られたマリア像が自分たちを見下ろしていた。実際のところマリア像などという大人しい代物ではないのだけれど、少なくとも周囲の民衆にはそのように伝えられていた。

そして、彼は問う。

「勉強を繰り返した結果計算が得意になった。歴史を暗記できた。確かにそういった意味での伸長はありえるだろう。私の生徒にも、個性と性質にあった些細なアドバイスをした途端、目覚ましい発展を示した者は何人もいる。だけど、本質的なところで、そんなものを人間の成長といっていいのか?」

ここまで真まっ直すぐに問いかけられたのは、自分の人生で初めてのことであった。

ああ。普通は違うのかもしれない。思えば、誰かにまじまじと見つめられること自体、物心ついてからはほぼ記憶になかった。自分は集団の中でいつも特別コドクで、いつも大切ノケモノにされていて、おかげでまともに話せるのは人格付与された魔術礼装のみであった。

無闇に広い教会の敷地で、ずっと自分はうずくまっていた。周囲の多くの人々に期待されながら、何ひとつ成しえずに視線を逸そらしつづけるばかりの人生だった。

―この世界には、どうして色がないんだろう。

いつも、自分はそんな風に思っていた。

いや、本当の原因は世界なんかじゃないって知っている。世界を 映す自分の瞳こそが曇っていて、だからこそどこに行っても、自分 は白黒の世界から逃げられない。

灰色グレイで。

陰鬱グレイな。

どっちつかずグレイ。

どこまで逃げたところで、自分はそういう存在なのだと、最初から知っていた。比べれば、土の下に埋もれている人々はどれだけ誠実だろう。もはや嘘うそなどつかず、あらゆる虚栄や欲望から解き放たれて、彼らはどこまでも自由だ。こんなにも惨めで無様な自分とは雲泥の比喩にもほど遠い。

......はたしてあの人が来たのは、もはや諦めて、諦めきって、うずくまることにさえ疲れ果てた頃合いだった。

いつものように、葉巻を吸っていたのを覚えている。

漆黒のスーツを纏まとい、ステンドグラスから斜めに差し込む光 に背を向けていた。逆光になった表情は硬く、立派な大人のはずな のにどこか少年のようにも映った。

「ですけど……」

と、声が出た。

「あなたは……時計塔で最も成功したひとりじゃないんですか?」

当時の自分からすると、かなり稀き少しょうな──他人の事情に踏み込んだ台詞せりふだった。どうしてかは分からない。だけど、その相手には尋ねてみる気になったのだ。普段の自分のやり方をほんの少し曲げても、彼のことを訊きいてみたかった。

すると、彼は渋々といった感じで認めた。

「……ああ、私はこの九年と少しである程度の地位を得た」

地位を得たなどという言葉には似合わぬ、嘆きと無念さに満ちた 声だった。

古びた歯車が軋きしみをあげるかのように、低い呻うめきととも に手を開く。それから、黒い手袋の指を組み合わせ、再び話し出 す。

「以前よりはまともな魔術を使えるようにはなった。つまらない策略や交渉のやり方も覚えた。魔術についての造詣もいささかはまともになったと言っていいだろう。……だが、それがなんだというんだ?」

必死に積み重ねてきた時間なのだろうと、自分にも察せられた。

おそらくは肉をすり潰し、骨を嚙かみ砕くような時間だったはずだ。自分は頭が良くないし彼の所属する時計塔というのもよく分かってないが、それでも彼がいかに研けん鑽さんし、克己して、今の地位に達したのかは十分想像できた。

今、そのすべてを彼は否定しているのだった。

「……昔、極東でとある戦いに参加した」

と、彼は口にした。

突然の話題変更についていけなかった自分をおきざりにして、言葉を続ける。

「その戦いにいたのは幾多の英霊とマスターたち。英霊はもちろん、契約したマスターたちもまた、今の私など比較にもならないような達人や殺し屋ばかりだった。そんな中で、今よりずっと未熟だった頃の私がどうして生き延びられたのかといえば、幸運だったからという以上の答えがない。あまりにも未熟すぎてほかの誰もろくに注目しなかったんだ。ああ、今の私なら警戒されて、逆にあっさり殺されていただろうな」

彼の言葉には、一切の予断がない。

だろうとは付けているが、その裏側には何百回も何千回も緻密な シミュレーションを脳裏に思い描いたのだろうという重みがあっ た。一体そのシミュレーションの中で、彼は何回死んだのだろうか。

冷え冷えとした教会の空気の中で、彼は口を開く。

「だったら、今の私より昔の私の方が優れているんじゃないのか?」

「……それは、あなたが言った通り、幸運によるものでは」

口ごもりつつ、自分も反論した。

そうしなければならないような気がしたからだ。

だけど、

「ああ、その通りだ。だが、そんな幸運や偶然で覆るものを成長といっていいのか?」

Г......

最初の問いに、戻った。

別に、彼が誘導したわけではない。最初から同じことしか話してないだけだ。言葉は多くとも弁舌巧みではなく、ただ愚直なまでにひとつの問いを突き詰めていくのが、彼のやり方らしかった。

あまりに不器用で、いっそ苦笑してしまうぐらいに真面目な態 度。

ほかの誰も、そんな風には受け止めないかもしれないけれど。

「人生の岐路なんて、小さな幸運や偶然で決まってしまう。だとすれば、真の意味で人間が成長することなんてあるのか? 本当は誰だって小さな子供のままで、誰かもっとずっと立派な......生まれながらの王様にでも従いたいと思っているんじゃないのか?」

世界なんてそんなものだと諦めているようで、しかしそんなままでいいわけないだろうと、誰かに嚙みついているような物言いだった。

一体誰にだろう。

地獄に住まう何かを睨にらみつけるみたいにして、彼は言い募 る。

「私は、何も成長なんかしていない。あの頃から何も変わってなど いない。なりたかった自分になど、まるで近づけていない」

Г.....

その言葉には、血が滲にじんでいる。

魂の傷はけして癒えることなく、今も赤い血を流している。いいや、傷よ癒えるなとばかりに、彼自身が爪を突き立てている。魂を疼うずかせる痛みこそが、初期衝動を思い起こさせるのだから。

「私は、変わりたい」

彼の歳は、もう三十近いだろう。

そんな年齢で、しかも同じ業界の者ならば目を剝むくほどの立身 出世を果たした者が、どうして変わりたいなどと口にするのか。し かも、そのきっかけはけしてきらきらしたものではない。星を摑つ かんだ天才が口にするような、果てなき向上心などではあり得な い。

(.....嫌悪)

と、自分は思った。

ひどく馴な染じみ深い感情だった。自分の肌の内側で、泥のよう に詰まったもの。

(.....ああ.....)

そのとき、分かったのだ。

故郷の人々は、自分はもっと変わるべきだと言う。せっかくの資質を活いかすべきだと。才ある者が世界に貢献しないのはそれ自体が許し難い罪悪だと。

あるいは、こんな田舎でもたまに流通してくる書籍では、そのま まの自分を受け入れるべきなどとしたり顔で言ってたりする。くだ らない自分でも情けない自分でもそのままでいいとか、無責任な甘 い言葉を吹き込んでいるのに、眉をひそめたことがある。

そのどれとも、この人は違った。

眉間に刻まれた皺しわを見ずとも、きつく引き結ばれた唇を確かめずとも、はっきり伝わった。安易に変わることも、怠惰に変わらないことも、彼は拒絶していた。

「だけど……いや、だから、君に来てほしい」

彼が言う。

「これは、ただの我わが儘ままだ。君の納得するような報酬や未来を用意できるとは限らない。むしろ、君を危険に晒さらすだろう。 私が守るなどとは口が裂けても言えない。君に守られたあげく、私 だけが生き残る可能性だって十分にありえる」

ひとつずつ、誠実に彼は語る。

何も不利なことから口にしなくてもと思うのだが、そういう性質なのだろう。

Г......

その誠実さゆえに、もうひとつの事実も垣間見えてしまった。

言葉に滲んだ血と同じく、魂を抉えぐった傷と同じく、この人は今も苦しんでいるのだと。過去の選択に、現在の在り方に、未来訪れるかもしれない可能性に懊おう悩のうし、肺はい腑ふを串刺しにされるかのごとく苦しんでいるのだと。

だから、理屈でなく、その言葉は自分にしみとおった。

「それでも……私は君に来てほしい」

۲ ي

だったら、いいだろうと思えた。

- 一緒に悩んでくれるのなら。
- 一緒に苦しんでくれるのなら。

一緒に傷ついてくれるのなら。

きっと、どんな素晴らしい賢者の答えよりも自分の道しるべになってくれると......そんな風に思えたのだ。

「……ひとつだけ、約束してくれますか」

と、口にした。

「拙せつの顔のことは……嫌ったままでいてください」

狼狽えた彼の表情は、いまだに忘れていない。

いい人なのだろう、と思った。最初に自分の顔を見たときに、恐れおののいたことを恥じているぐらいには。

それでも、数秒の間をおいて、口元の葉巻を押さえて重々しくうなずいた。

「約束しよう」

ロード・エルメロイII世―自分の師匠は、そう告げたのであった。



(......あれから......何か変わった......?)

ふと想起された記憶に、自分はかすかに目を細めていた。

思い出してしまった理由は大したことではない。夕焼けを背景に、深くうつむいた師匠の姿があのときと少しだけ似ていたからだ。

何かができるようになったからといって、成長したとは限らない。

なのに、師匠はそんなことだけを積み上げていて、だからこそこの人の生き方はずっと苦しいのだろう。苦しいのに逃げることもせず、自分みたいにうずくまることもせず、どうしてそんな風にいられるのかはいまだに分からないけれど。

丘である。

先に、イゼルマの陽ようの塔・月の塔を眺めていたあたりから、ちょうど反対側にあたる場所だ。濃密に立ち上る草いきれで、時々むせかえりそうになる。また、土と草むらの間にはいくつかの兎うさぎの穴が見え隠れしていて、なるほど名作の舞台となった土地だとも思わせた。愛くるしいピーターラビットとその家族たちの物語は、自分の故郷でも何冊か見かけたものであった。

こちら側から見下ろすと、血の色に似た夕光ゆうかげと濃い霧は 一帯の草原を塗り上げていき、世界を遥はるかな幻想郷のごとく置 換していく。

Г......

師匠はただ黙ったまま、手元の手帳に何事かを筆記している。

あんな勇ましいことを言った後、再び調査作業へと舞い戻ってい たのだ。

それでも、スヴィンから受け取った紙片や続いての調査によって何らかの進展はあったらしく、師匠は時々思い出したように、自分やライネスに事件の経緯を確認していた。

「……最初に、亡命を切り出したのは黄おう金ごん姫きでよかったんだな?」

「もちろん、そうだとも我が兄よ。あんなの見間違いようがないからね」

「で、その翌朝に黄金姫の部屋で死体が見つかった。部屋には魔術 錠ミスティック・ロックがかかったままだった」

「ああ。その通りだ」

こんな感じで、ひとつずつ整理していく。

イゼルマの社交会の直後、黄金姫からライネスに、エルメロイ家 ──貴族主義派閥への亡命を打診されたこと。

その後、翌朝に黄金姫の部屋に向かうと、彼女がバラバラ死体になっており、第一発見者であり、亡命を打診されていたライネスが犯人として疑われたこと。続いて、メイドのカリーナまでが死体で見つかり、トリムマウの手が彼女の血に染まっていたためにイゼルマに拘束されたところまでを、すらすらと師匠はメモしていった。

使っているのは、鷲獅子グリフォンの意匠が凝らされた漆軸の万年筆である。確かその万年筆は先々代からの愛用品で、ほとんどエルメロイの遺産を拒絶した師匠が、珍しく受け取ったぐらいには気に入っている品だったはずだ。

ほのかに空気に混じったインクの香りが、自分は好きだった。

葉巻のそれと同じで、いつも師匠のどこかにこびりついている匂い。それを嗅ぐたびに、なぜか不思議と落ち着いている自分を見つ

けるのだった。理由は分からない。ひょっとしたら、師匠は魔術の 補助に精神安定を促す香料でも使っているのかもしれないが、それ を尋ねる気にもなれなかった。

その横合いで、騒がしい声が巻き起こる。

「だからさー、真犯人はバリツの使い手なんだって! バリツは本当に無敵で素敵なんだよ! 崖から落ちても大丈夫だし、秘孔をついて人間を爆発させるし! 壁抜けや透明化だってお茶の子さいさいだよ!」

「なんだそのふざけた魔術は。そもそも武術なのか魔術なのかはっ きりしろ」

「バリツはバリツだよ! シャーロック・ホームズからの伝統だし、きっと先生も使えるって! 探偵ならみんな使えて当然なんだ!」

「フラット。君は先生を探偵なんて下げ賤せんな職業と一緒にする のか!」

「えええ! 正式なバリツではステッキも使うんだよ! きっとそのステッキは魔術の触媒なんだ! だから魔術師のために作られた武術なんだよ!! 今伝わってないのは、きっと誰かが自分の一族だけで秘匿してるんだと思う!」

ともに金髪碧へき眼がんながら、互いの印象は正反対だ。前者の 素っ頓狂な発言はいかにものほほんとしたお坊ちゃまで、後者はど こか野性味を宿した端整な美少年。

フラット・エスカルドスと、スヴィン・グラシュエート。

エルメロイ教室でも、現役では双璧と謳うたわれているふたりだった。

「それに、シャーロック・ホームズはロマンでしょ! 切り裂き ジャックだって怖いし被害者の人には悪いけれど、倫敦ロンドン史 を彩るスーパースターだよ?!」

「先生を殺人鬼なんかと一緒にするな。だいたいシャーロック・ホームズだろうがナポレオンだろうが、少々文学や歴史上で目立った程度の相手を、先生と比較するなんてありえない!」

うん。まあスヴィンの受け答えも相当にズレている。新世代 ニューエイジの中には師匠を英雄視している者もいるのだけど、実 のところその最右翼というか急きゅう先せん鋒ぽうがこのふたりで もあった。できたら放っておきたいのだが、そうするとエスカレー トして施設破壊まで至りかねないというのが、現在のエルメロイ教 室最大の悩みの種だ。

ただ、自分はどうしてもスヴィンに近寄りたくないのだけど。

というか、いつもあんなに息を荒らげて攻撃的に接近してくるあたり、よほど拙せつのことが嫌いなのだろう。他人に好かれないのは慣れているのだが、これほど強烈に拒絶されるのは少しだけ悲しい。

今も、フラットと話しつつちらちらこちらを見つめてくるのは、 やはり牽けん制せいしているのだろう。

「いやいや、そんなわけはないぞ」

突然、隣に座っていたライネスが口を開いた。

三角座りで、膝のあたりに頭をもたせかけ、いかにも愉たのしそうにこちらを横目で見つめている。にやにやと口元がゆるんでいて、こちらとしてはつい虐いじめられるのではないかとスイッチが入ってしまう。

「.....な、なんです?」

「いやだって、スヴィンが君のことを嫌ってるんじゃないか、とか 思ってたんだろう?」

お見通しとばかりに顎をしゃくられて、自分の呼吸が止まってしまった。

「……ライネスさん、読心は……」

そこまで言うと、くくく、と口元に拳をあてて、帽子の少女は肩 を震わせる。

「そんなもの必要ないね。顔を見れば分かるさ。厳密には瞳の動き

方と、指と手の配置が肝でね。君は自分が寡黙と思ってるかもしれないが、いやいや相当に雄弁な方だよ? アッドと五分のおしゃべりといってもいいぐらいだ」

「そ、それは……」

ちょっと衝撃的な評価に、思わず口ごもってしまう。

「イヒヒヒヒ! おいおいこのアッド様がおしゃべりだなんてひ どいな! こんなに寡黙で知的で優雅な匣はこだろう!」

右手あたりであがった声は極力無視する。

そうしていると、フラットがぐるりと振り返った。

「あ、グレイちゃん! 今日はアッドと話してもいいの! 見せて見せて良かったら俺とも話させてできたら分解させて!」

「だ、だから、お前がグレイたん……グレイさんに軽々しく声をかけるな!」

ふたりがよってたかって近づいてきて、びくっと肩を震わせてしまう。

「……お前ら、少し静かにしろ。後、スヴィンは非常時以外グレイの半径五メートル内に入るな」

師匠が苦々しく口にした。

それから、

「お客様だ」

と、万年筆のキャップを閉めたのだ。

「一何か、分かりましたか?」

耳にしただけで、陶然と意識を霞かすませるような声が、草原に響く。

葉巻の香りも夕暮れの色も断ち切って、その女ひ性とは佇たたずんでいた。長く伸びた影さえも彼女からこぼれ落ちることで、まったく別の何かに見えた。

死神の影、かもしれなかった。

「白はく銀ぎん姫き」

ヴェールをかぶった女の名を、師匠が呼ぶ。

そして、その一歩後ろには、物静かなメイドが付き従っていた。

「レジーナさん.....」

Г......

白銀姫に従う双子の一双子だったメイドの片割れは、視線を伏せたまま何も話さなかった。

代わりに、主あるじが口を開いた。

「初めまして、ロード・エルメロイII世。お噂うわさは存じており ます」

「あまりいい噂をされたことはないと思うが」

苦笑した師匠を前に、白銀姫が顔を上げる。

風が止まったかと思われた。耳に入る音はことごとく絶え、草原の花々さえも彼女の素顔に酔いしれるかのようだった。ヴェールの内側から覗のぞいたそれは、黄金姫とはいささかの趣の違いを孕はらみつつ―しかし、やはり隔絶した美貌。

「姉のディアドラ──黄金姫とカリーナの死について、あなたが何を 分かったというのですか」

その声音は、まっすぐ師匠の身体からだを打った。

美しさゆえの凄みは、こちらの芯までも貫くようだった。

「亡くなられたおふたりについて、衷心より哀悼の意を表します」 腰を屈かがめ、師匠は丁寧に口にする。 その声音には、偽らざる本音がこもっていた。多くのものをなくしてきた人だからかもしれない。かつての戦いで、師匠が失ってきたものはどれほどになるのだろう。以後に多くのものを得たとしても、それは天てん秤びんにかけられるようなものなのだろうか。

「ですが、だからこそ真犯人をつきとめる必要があると考えます」

「ご自分の義妹いもうとは、犯人でないと信用されていると?」

「ええ」

きっぱりと、師匠が言う。

一瞬、自分はきょとんと瞬まばたきしてしまった。

ほんの少し、白銀姫の雰囲気が和らいだように思われたのだ。

「.....いい兄をもたれましたわね」

「ええ。もちろん、そのつもりです」

しれっとライネスが受けて、意味ありげにうなずいた。

こういうときのライネスは、とりあえずハッタリを利かせて立ち 振る舞えばいいだろうと思っている節がある......気がする。

ついで、彼女はこう尋ねた。

「トリムマウはどうしてるかな?」

「月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムでしたら、父上が大切に 保管させていただいてます」

「うむ。その点はイゼルマを信用させてもらうさ」

尊大に、ライネスがうなずく。

もっとも、彼女にしてもけして安穏としているわけではない。トリムマウがエルメロイにとって最も重大な魔術礼装のひとつであり、それをカタにとられているという状況は変わりないのだから。

見えないナイフを突きつけあってるかのような、異様な緊張感が 世界に張りつめていく。魔術が意思によって組み上げられるものだ としたら、これもまたひとつの魔術かもしれなかった。魔術基盤や 術式によらずとも、太古から人々が知っていた呪のろい。言葉も意 思も見えないからこそ神秘であり、魔術師ならざる人々に幾多の伝 説を語らせてきた原動力でもあった。

不意に、師匠が動いた。

「......ところで、こちらは君のお姉さんの持ち物だったみたいだが」

と言って、ポケットにいれてあった品を、メイドのレジーナへと 見せたのだ。

渦巻き紋様を刻まれた石の、ネックレスだった。

血に染まったその装身具に、レジーナがかすかに目を剝く。

「.....ありがとうございます。確かに、姉のものです」

「ケルトらしい紋様だが」

「はい。生まれたときに.....おばばさまに.....」

懐かしさにかられてか、メイドが過去をひもときかけたときであった。

r——э!л

ざく、と全身を突き刺すかのような悪寒が、自分を襲ったのだ。

思わず両肩を抱きしめ、おこりのように震えながら、呼びかけていた。

「師、匠……っ」

「一む?」

「ああ。私も感じたぞ。兄の鈍い感覚ではせいぜいちょっと気持ち 悪いぐらいしか分からなかったろうが」

ライネスが片目をつむったまま相づちを打つ。おそらく魔眼が反応しているのか。

「好き勝手言うなお前!」

「ふん。今更事実を語られたぐらいでごたごた文句つけないでほしいな。それより白銀姫殿、今のはイゼルマの結界ではないのかな?」

基本的に、結界とは『あちらとこちらを隔てるもの』だ。秘することを目的とするのなら、最上の結界とはそもそも気づかれないものだろう。どんな強大な魔術師であっても、最初から存在を知らない結界は解除しようがない。ゆえに最上であるという、極めて分かりやすい理屈だ。

しかし、同時に、もうひとつの意味も結界には存在する。

つまり、護まもることだ。

内側に存在する誰かを護り、あらゆる外敵から遠ざけるための防壁。敵対する魔術師に反応する結界もそうしたひとつだ。ある種の警報として、敵対者の襲来を告げるよう、魔術師の管理する土地には多く仕掛けられている類のものであった。

もっとも、内心までつまびらかにするような結界はほぼ存在しない。そんなものが容易に使えるならば、そもそも殺人事件など起こりようがあるまい。

つまり今回の場合、相手は隠す気も見せず、敵対的な魔力を露あらわにしていたのだ。

「失礼します」

そそくさと一礼して、白銀姫が踵きびすを返した。

足早に双貌塔へ戻っていく背中を見送ってから、

「……教授」

「フラット?」

「多分、あっちですよ」

名を呼ばれた少年が、丘から見える森の方角を指さした。

「うーん、これ十人以上いるんじゃないですか? いや二十......あれ、三十以上いる?」

おおよその分野に優れた成績を残しているが、とりわけ魔力探知に関してはずば抜けた才能を持つ少年だった。だからこそ、普段いかにいい加減な態度であっても、発言の重みは間違いなく、師匠がますます眉間の皺をきつくしたのだ。

「それほどの数で、こんなタイミングにイゼルマの襲撃を?」

ライネスが瞬きする。

偶然とは到底思えなかった。

連続殺人事件が起きたばかりのイゼルマへ、魔術師の軍勢が襲来する。これが偶然ですむのなら、それこそ魔術など必要あるまい。世界を騙だましてある種の超常現象を再現するのが魔術だが、こんな負の奇き蹟せきが乱発されるなら世界はとっくに魔術に侵されてる。

「ああ。もちろん偶然じゃない」

と、師匠が口にする。

「スヴィン。お前の調べていたヤツだ」

「ですが先生。それなら僕らは一」

スヴィンの言葉が途中で詰まる。

そもそも、イゼルマから犯人扱いされているのは自分たちだったからだ。襲撃はこちらにとって有利に働くのか。それとも何もかもをぶち壊しにしてしまうのか。混迷した状況でどのような手を打つのが最善なのか。

誰しもが考えあぐねていたときだった。

突然、夕陽が陰った。

雲であった。東の方から流れてきた黒雲が、あっと言う間にイゼルマの土地を覆っていったのだ。不自然極まりない速度と規模に、自分たちが息を吞のんでいると、それはたちまち頭上にも広がって

いった。

低く、雷鳴が轟とどろく。

「一師匠っ!」

思わず、自分は師匠を抱きしめて、跳んでいた。

ほぼ同時、強烈な衝撃が背中から全身を叩たたいた。

まさに、それは爆撃だった。どれほどの魔力を溜ため込んでいたのか、一撃が大地を震わせ、その場の全員を硬直させた。ほとんどの電流は地下へと流れていったが、その余波だけで全員を震撼させるに足りた。

「っ、グレイたん!」

「……グレイ」

「大丈夫、です」

小さく、うなずく。

やたらにおろおろしたスヴィンが、師匠の言いつけを守ってぴたりと五メートル向こうで右往左往しているのが、少しだけ可お笑かしかった。

「今の、雷は--!」

「……どうやら、丁寧に挨拶ということらしい」

師匠が、低く囁ささやく。

雷の後の──確かイオン化したとかいうのだったか──きなくさい 臭いの中、師匠は舌を鳴らして、天を見上げた。

「夕暮れを狙っての天候魔術とは、古い定石通りにやってくれる。 ……狙いは、土地の守護をイゼルマから引き剝がすというところか」

土地が傷つけられれば、自然と普段通りの魔力は動きにくくなる。魔術師が土地を管理している場合、そこに防衛魔術を仕掛けているのは当然で、逆に襲撃する側がそれを無効化するところから始

めるのも定石ということだった。

今回の襲撃者たちは規模こそ派手だが、手段としては堅実ということだろう。

遅からず、イゼルマの塔からも魔力が動いたのを、自分は感じた。

月の塔からである。イゼルマの工房がそちらに用意されていたの は言うまでもない。何らかの魔術を発動させたのであろう。それが いかなる形を取るかは定かではないが、少なくとも自分たちにとっ て歓迎すべき結果を生むとは思えなかった。

「....... 師匠」

「ひとまず、こちらは被害を受けないように待避しておきたいところだな」

待避と言えば聞こえはよいが、流れ弾を喰くらうのは嫌なので、 ひたすら逃げ隠れしておきたいということだ。もちろん師匠の腕か らすれば、襲ってきた魔術師のいずれとも伍ごし得ないことは明ら かだ。

ライネスが、ふふんと鼻を鳴らした。

「一目散に逃げたい、と言わないのかな」

「もちろん逃げたいさ。できたら頭を抱えて、二度とこの土地には 入りたくない。誰かさんが担保を押さえられてなければな」

「おお。まさか兄上から嫌みを言っていただけるとは。屈辱で総身が震えて、顔が火照ってしまうぞ。そちらの趣味があるなら、是非開拓に勤いそしんでいただきたい」

「妹相手にくだらん接待をするヤツがいるか。さっさと安全地帯を 見つけて、落ち着くまで隠れてるぞ」

嫌みたらしく言って、師匠が踵を返そうとしたときだった。

「……いや」

と、前言を翻したのだ。

「もうやらかされたか」

「.....え?」

苦々しげに言った師匠の言葉の意味を、自分もすぐに悟った。

「.....フラット!」

振り返り、思わず名を呼んだ。

あの少年が、忽こつ然ぜんと消えていたのである。いくら鼓膜を つんざくような雷鳴の最中とはいえ、師匠やライネスはともかく自 分が気づかなかったというのは、よほど巧みに姿を晦くらましたの だろうが……こと、そういう類は得意としている魔術師ではあっ た。

「追いかけます!」

「っ、待てスヴィン!」

止める間もなく、今度はスヴィンが駆け出す。

それこそ、自分がアッドを解放してもこれほどはというほどの疾 走だった。嗅覚で追っているのか、一切の手がかりがないと思われ るのに、癖っ毛の少年は一直線に森の方へと消えていった。

「ああもう! だから、現地には来るなと言ったんだ!」

胃のあたりをさすりつつ、眉間の皺をますます深くして、師匠が 長いため息をついたのであった。 「.....うん。悪くない」

自分が成した爆撃の跡を、褐色の青年──アトラムは残酷な微笑と ともに見つめていた。

近くの、高地である。

山の中腹で、数キロほどはあるがイゼルマの土地を見下ろせる格好だった。そちらに建設されたホテルのロビーから、彼は古く優美な遠眼鏡オペラグラスを使っていたのだ。

近くに座った肌も露わな侍女を抱き寄せて、青年は囁きかける。

「どうだい? 自分の恋敵ごと城を焼き払ったという魔女の火にも 匹敵すると自負しているのだけどね」

かつて、メディアと呼ばれた英霊が為した鏖おう殺さつの術式に たとえて、青年は自らの業績を誇る。

無論、それには遠く及ばない。

西暦以前。人間が遥かに魔術と近しかった時代のそれは、たかだか一小節ワンカウントの術式で現代の爆撃機にすら匹敵する。現代の魔術師ではいかに研鑽を重ね、儀式を連ねたところで、その足下に辿たどり着けるかどうか。

だが、だとしても、この術式は見事と言わざるを得なかった。

天候へ働きかける魔術というのは、極めて大規模だがけして珍しいものではない。むしろ、世界のほぼ全土で雨乞いやそれに準じる儀式があるほどだ。ただし、現実の魔術師ですら成功例は少なく、多くの神秘が劣化した現代ではなおさらのこと。今回の場合、もともと天気の変わりやすい湖水地方で、雷雲の発生しやすい状況が揃そろっていたところを後押ししただけなのだが、賞賛に値する結果ではあった。

一族に連なる数十人からの魔術師が、今もこのために儀式を捧さ さげている。

昼と夜の間、防御に仕掛けられる魔術の多くが弱まる時間も、この急襲に拍車をかけていた。

「さあ略奪だ! 簒さん奪だつだ! 効率よく始めようじゃないか!」

爽やかに、青年は笑う。

アトラムの家―ガリアスタは、そうやって成り上がった一族だ。

欲しければ奪えばよい。

その手に刃やいばを持ち、振るえばよい。

アトラムはそう教わってきた。一族の長おさを決めるため、父親は彼を含む兄弟に権力闘争を主眼としたさまざまな試練を与えてきたが、青年はそのすべてを最も効率的に処したのである。そして、協会での爵位を継承しつつも、魔術世界に踏み込まなかった父とは異なり、アトラムは意気揚々と魔術を取り入れた。

時代遅れと目されている魔術を、現代ではかえって有益と考えた のだ。

受け継いだ魔術刻印をねじふせる苦痛さえ、彼にとっては悦楽だった。自分が勝ち取ったものの価値を嚙みしめる、最高の機会なのだから。

「さあ」

と、ワインの入った杯とともに、彼は立ち上がる。

「僕から極上の獲物を奪った罪、ゆっくり後悔していただこうか」

*

はたして魔術による爆撃を、土地の管理者オーナーは把握してい

た。

月の塔である。

一水盤。

部屋の中央。古びた陶器の水盤に、この土地から湧き出た水が張られている。その波紋が、敵対的な魔術の威力や規模をまざまざと映し出していたのだった。似た魔術はいくらもあるが、この精度となれば自らの管理している土地でしか不可能だろう。とりわけ創造科バリュエはこうした魔術礼装の扱いに長たけた派閥であった。

「宣戦布告か」

と、魔術師は憎々しげに呟つぶやいた。

水盤を見下ろしたまま、口元のパイプを強く嚙みしめる。

バイロン卿きょうだった。イゼルマの主は異変を感知してすぐに 水盤を起動して、襲撃者たちの様子を観察していたのだ。

だからこそ、宣戦布告と断じた。でなければ、それこそ愛まな娘むすめたる黄金姫とメイドを殺した犯人のように、密ひそやかに迫ることもできたはずだ。むしろ魔術師の性質からすれば、そちらが正道と言ってもよい。多くの王や貴族が魔術師に呪いを願ってきたように、触れずとも殺せるということが魔術師の戦いにとって最大の強みである。なのに、そうした基本を無視して、これだけの規模で攻め寄ってくるのは宣戦布告にほかならない。

ああ、いずれは攻めてくるかもしれぬと思っていた。

ガリアスタの噂は聞いていたし、その不興を買うだけのことは やった。中東から出てきたばかりの新興の一族だが、それだけに勢 いと野蛮さは特筆すべきものがある。時計塔でも一部の魔術師がそ うであるように、得られる報酬があるならいかなる強引な手段も躊 ちゅう躇ちょしないだろう。

だが、よりにもよってこんなタイミングでやってくるとは--。

しばし悩んだ後、バイロン卿は工房を出た。

すぐ外の廊下で待っていたふたりの魔術師へと話しかける。

「マイオ、イスロー」

「はっ、はい」

「.....はい」

薬師は慌て気味に、ドレスの織り手は陰気にうなずいた。

「お前たちはエステラについていてくれ」

「……戦いには」

尋ねた織り手─イスローに、イゼルマの主はかぶりを振った。

「お前たちの魔術向きではないだろう」

それきりで離れ、バイロン卿は杖つえをつきつつも、かなう限り 足早に歩を進める。

その途中、廊下で別の召使いを呼び止めた。

「イノライ様はどうしてる?」

「ロード・バリュエレータでしたら、ご自分の部屋にこもりきりです。今こ宵よいの夕食はいらないとのことでした」

「そうか」

答えた召使いに、小さくうなずく。

この異変に、仮にもあの女傑が気づいてないはずはないだろう。 つまりそれは自分は関わらないという意思表示だ。あくまでこれは イゼルマの諍いさかいであり、本家であるバリュエレータが介入す る案件ではないということ。

「イノライ様が関わらぬつもりならそれでよい」

バイロン卿が言う。

だが、気がかりはある。指先に刺さった棘とげのように、じくじくとこちらの精神を波立たせる可能性が。

Г......

最初は、黄金姫やメイドの死について、敵対的な派閥によるものかと思っていた。

イゼルマは本家のバリュエレータと同じく、民主主義の派閥に属している。バルトメロイ率いる貴族主義派、また日和見を気取っている中立主義派が何らかの妨害工作を働いていても何もおかしくない。時計塔における権力抗争で、人の命など塵じん芥かいほどの意味もないのだから。

だが、今彼の中に芽生えたのは、まったく別の──遥かに恐るべき 可能性だった。

(.....ロード・バリュエレータ御自らが、あの一族と結託している?)

否定したかった。

しかし、同時に魔術師としての冷ややかな部分が彼に訴えていた。

十分にありえることだと。魔術の発展のために必要なら、分家から問答無用に秘宝や人材を奪う程度は日常茶飯事。抵抗しそうであれば、血族ごと取りつぶすことも魔術師の歴史では珍しいことではない。派閥に属するということは、庇ひ護ごのメリットとともにそうしたデメリットも引き受けることである。

いいや。

(ひょっとしたら......黄金姫を殺したのも.....)

凄絶な可能性が、バイロン卿の頭をよぎった。

けして否定はできなかった。魔術師である以上、いかに好感の持てる相手だろうが、けして信用はできない。そこにいるのは魔術のためにすべてを売り渡した怪物であり、もしも障害になるとしたら相手が肉親だろうと平然と引き裂く方向性ベクトルであった。

でなければ、誰が魔術師になどなるものか。

「.....ああ」

と、歯車が軋きしみをあげるかのような声で、彼はうなずいた。

「……イノライ様ならば、成り上がりも受け入れるかもしれん。時計塔の民主主義とはそういうことだろう。勢いがあらば認めるべきだし、魔術師だとしても新たな変化は受け入れるべきだと放言するかもしれん」

廊下を歩きながら呻いた声音には、拭いがたい嫌悪が潜んでいた。

イゼルマもまた、時計塔における民主主義──血統によらず優秀な人材は登用すべきという派閥に属してはいる。だが、そのすべてを受け入れているわけではないのだ。魔術師としての本能はどうしても過去へと邁まい進しんする。積み重ねてきた血統こそが重要なのだと、その本能が訴えかける。

― 『美しいということは素晴らしい。たとえほんの瞬きであっても、存在したというだけで価値がある。オレたちはただこの刹那を走り抜ける以外にやることなどありはしない。──同様に、今の時代は今の人間が過去の血統になどかかわらずに運営すべきだ、というのがオレたちの信念なのさ』

あの社交会で、イノライは言っていた。

その通りだ。創造科バリュエの永遠とこしえなる理想はここにある。だが、同時に理想とは触れることのかなわぬ幻であり、我らはこの現実で生きていき地歩を固めていかねばならぬ。

まして、新たな人材の登用で、見切られようとしているのが自分 の血族ならば?

あの若者──現ノ代ー魔リ術ッ科ジを率いる君主ロードならば、どのように答える?

۲......

ぎり、と歯ぎしりがこぼれた。

雷が鳴った。広い窓を染めた白光は、杖持つ紳士の横顔を一時照らし出し──別のものも露わにした。

「……ああ。ならば、このバイロン・バリュエレータ・イゼルマが 直々に見てくれよう」

その影は、あたかも悪魔のようにべったりと壁に張りついている のだった。

一フラット・エスカルドス。

地中海周辺の国に生まれ、嘱望を集めてきた少年の名である。

エスカルドス家は魔術師として古い家系でありながら、目立った 業績をあげたことのない一族だった。代々の当主の魔術回路にせよ 鍛えてきた魔術にせよ、凡庸以外の評価は下されず―しかし、そん な中で生まれたフラットは、もはや異常としか言いようのない逸材 であったのだ。

傑出した数の魔術回路と、それを制御しうる圧倒的な才能。

まさしく期待の神童として洋々と時計塔へと送り出された彼は、しかしその時計塔でさえ手に余るほどの逸材でもあった。最初は降霊科の副学部―召喚科の学部長であるロッコ・ベルフェバンに預けられていたのだが、数ヶ月ともたずに別学部へと移籍。そのただならぬ才能によって次々新しい学部からラブコールを受けるものの、どんどん記録更新する速度で講師たちの胃を痛めつけ、放逐されていくこととなった。

理由は簡単。

魔術師として理想的なほどに才能に満ちていた彼だが、しかし才 能以外の部分についてはまったく魔術師に向いてなかったからであ る。

気性のゆるさなどと、周りには言われている。

実のところ、現代において魔術師を魔術師たらしめているのは、 その異能や超人性以上に、いくつもの世代で増幅され続けてきた執 念だ。何百年、時には千年以上歴史の闇にしがみついていた強烈な 思想は、それ自体が一種の凄絶な『力』を持つ。科学がいくつかの 面において魔術を上回ることになろうとも、これらの思想が根絶さ れぬ限り、魔術が死に絶えることはない。 だが、彼はその点でまったくの落ちこぼれだったのだ。

あるいは、ただならぬ才能のゆえかもしれぬ。周囲にも理由は判然としなかったが、少なくともフラット・エスカルドスという少年は魔術師らしい執着を垣間見せることがなかった。どこまでもゆるいままでお節介に他人へとちょっかいを出し、そのくせ授業の内容はスポンジのように吸収してほぼ満点を記録し続ける。ひどいときは講師の授業内容ににことことしを出して、いくつかの術式の効率を瞬く間に改善させるという離れ業さえやってのけた。

講師にしてみれば、これ以上の屈辱はない。

最高のダイアモンドを前にしながら、カットひとついれられないようなものだ。これほどの才能を手にしながらろくに開花させられないのかと、常に無言の指弾を受け続ける格好となる。時計塔にしても、魔術の発展のためとあらばこの才能を捨て置く選択肢はありえず、しかし彼に近づけばたちまち講師たちの胃がノックダウンされ続けるという繰り返しは、おおよそ一年ほども続いたろうか。

結果、いくつもの学部や派閥が宝物を手放すようにして、ついに エルメロイ教室へ預けられることとなったのだ。当時、すでに多く の問題児を抱えてきたエルメロイ教室はここでもその能力を遺憾な く発揮。少年の才覚をめきめき伸ばすことに成功したのは、衆目の 一致するところだろう。なお、成長に比例してロード・エルメロイ II世の胃も壊滅的な被害を受けることとなったのだが、これはまた 別の話である。

ともあれ。

今、フラットは襲撃者たちの魔力を追っていた。

森である。

さきほどの丘で感知した魔力を追い、そのまま草原から森まで駆け込んだものだ。不整備な道を考えずとも、プロのマラソン選手でもかくやという速度なのだが、このあたりは『強化』の魔術のなせる業だった。

途中で、ちらりと、木の葉の間から覗く黒雲を仰いだ。

「ううーん。これはすごい! 天候操作は副作用が強いからって時 計塔でもほとんど実践されてない項目だもんね! ああでもこの人 ちょっと効率悪いよね。多分三十一……三十二人で成立させてるけれど、七番目と二十番目の人は交換した方がいいよ。忠告してあげなきゃ!」

実にきらきらとした口調で、ふざけた台詞を言い募る。

それでいて、声音だけを聞いていると善意百%としか思えないのが、なんとも居たたまれない。何人もの時計塔講師を破壊してきた善意ではある。ここまで来ると、新種の呪いと位置づけても誰も怒らないのではあるまいか。

ただ今回の場合、別の意味でとがめる声は生まれた。

「.....フラット」

「うわ、もう見つかった!」

ぐるりと振り返って、フラットは目を見開く。

頭上の枝に、癖っ毛の少年が佇んでいたのだ。幹にもたれかかったまま、自らの鼻の頭に触れて、さも穢らわしいとばかりに同級生を見下ろしていた。

スヴィン・グラシュエート。

エルメロイ教室に入ったのはフラットよりほんの一ヶ月ほど先で、現役最古参の生徒である。といっても、ロード・エルメロイII世は長く生徒の面倒など見ていたくないということで、一定基準に達した者は次から次へと卒業させる方針なのだが。

「もうも何もあるか。お前のふわふわして軽薄で真っ黄色な匂いをいまさら間違えるはずがないだろう。──さあ、先生のところに戻るぞ」

「えええー!」

玩具おもちゃ売場から出ようと言われた子供みたいに、フラットが抗議の声をあげたのだ。

「……力ずくで引き戻されるのが好みか?」

「いやいやいや! だって考えてよル・シアンくん! あの教授が

困ってるんだよ!」

「そんなタイミングで、困りごとを上乗せしそうだから言ってるん だろうが」

「とんでもない!」

ぶんぶんと手を振って、にっこりフラットは笑ったのであった。

「だって、きっと教授は喜んでくれるよ!」

「.....な、に?」

スヴィンの眉が寄った。

「だってさ! イゼルマの家にトリムちゃん捕まってるんでしょ! だったら、そのイゼルマを襲ってる悪いやつらをぶっとばしたら、感謝してトリムちゃん返してくれるかもしれない! 教授だって俺たちに感謝感激雨あられ! ね、完璧なプランでしょ、ル・シアンくん!」

本来、完璧どころか一蹴しなければならないプランである。どう 聞いても穴しかなく、落ちた先には丁寧に毒塗りの刃でも敷き詰め られていそうだ。

しかし、

「とりあえず、ル・シアン犬と言うな」

と、スヴィンは口にした。

しばし、沈黙が落ちた。もしも場にロード・エルメロイII世がいたら腹部のあたりをさすらずにはいられないタイプの沈黙だった。つまり、事態の沈静化どころか、さらなる悪化を予感させるタイプの。

「グレイた……グレイさんをひどい目に遭わせたやつらだしな」

と、呟いた。

やがて、癖っ毛をぐりぐりと搔かき回し、少年は舌なめずりした のだ。 *

森の、ただ中だった。

鬱うっ蒼そうと茂った草むらを、複数の影が走っていた。

人の腰ほどもある草むらを、半ば掻き分けるようにして、彼らはイゼルマの双貌塔へと突き進んでいる。迷いのない経路に、不安定な地形や絡みつく蔦つたをものともしない足取りは、少し時代を遡れば悪魔の行軍とでも思われたかもしれない。彼らが例外なく緑のフードとマントで身体を覆っていたことも、そうした想像に拍車をかけた。

雷に少し遅れて、雨が降り始めている。

まるで地面を殴りつけるような、重い雨だった。もっとも打たれる襲撃者たちは、むしろにんまりと笑みを唇に焼きつけた。彼らには、これが自分たちへの援護だと分かっていたからだ。後方支援の力強さは、魔術師たる彼らを鼓舞し、今もイゼルマの加護を引き剝がしているのであった。

ひとりが、顔をあげた。

先の開けた空間で、杖をついたひとりの紳士が立っていた。

「……バイロン卿」

「大したものだ。天候を味方につけたか。もともと気候の変わりやすい地方だが、こうも鮮やかにやってのけた相手はいなかったぞ」

紳士は、正しく襲撃者の力量を評価していた。

現代の魔術師にとってこれだけの魔術がどれだけ難しいかを一あるいは困難であっても十分に可能なことであるかを、見極めている。魔術戦において最も重要なのは互いの得意とする術式を看破することだ。基本に忠実に、歴史に揺るぎなく、バイロン卿は正道に

佇んでいる。

「……分かるなら、我らの希望を叶かなえたらいかがかな」

襲撃者のひとりが、弄いらうように言った。内容は今更口にせず とも分かっているだろうとふんぞりかえる。

しかし。

紳士もまた、不敵な笑みを浮かべたのだ。

「だが、イゼルマを無力と思ったのは間違いぞ」

その杖で、地面をつく。

途端、バイロン卿の周囲で、球形の何かが浮かび上がったのだ。

木の葉の間からこぼれた夕陽を照り返す、憧憬を喚起させるシャボン玉。

しかし、その実態はけして和やかなものではない。バイロン卿の 魔力がこもったシャボン玉はたちまち空気の流れを無視して不自然 に動き、魔術師たちを取り囲んだ。ふるふると石せっ鹼けん水すい の表面を回転させながら、シャボン玉は構える襲撃者たちを映し出 す。

۲.....

声もなく、襲撃者たちはそのシャボン玉を見やった。

迂う闊かつにシャボン玉を割ろうとする者は、ひとりもいなかった。魔術師としての最低限のたしなみを、誰もが心得ている。

しかし、無数のシャボン玉はゆるゆると円周を狭め、彼らの逃げ 場を塞いでいく。

「イゼルマの虹こう玉ぎょく。いかがかな?」

バイロン卿が囁いたのは、術式の名であったろうか。

ぱん、とそのシャボン玉が弾はじけたのだ。

内側から、得体の知れぬ魔獣や何かが飛び出すことはなかった──

少なくとも、そのようには見えなかった。なのに、何人かの襲撃者 たちがたちまち喉を押さえ、倒れ伏したのである。

「一っ、バイロン!」

怒りに燃えた襲撃者から、幾多の雷撃が射出される。

これもまたバイロン卿の身体に寄り集まったシャボン玉が防御するが、しかしすべてを受け止めるには至らなかった。おおよそ三割ほどの雷撃はシャボン玉を貫通してバイロン卿を傷つけ、壮漢の紳士を跪ひざまずかせたのだ。

「は! 所詮は田舎にひきこもった蒐しゅう集しゅう家か崩れが!」

倒れた襲撃者もゆっくりと回復し、怒り狂った仲間とともに新たな術式を組み上げる。

焼かれた肩口を押さえ、バイロン卿もまた杖をついた。さらに倍増したシャボン玉が、襲撃者たちの前に虹色の砦とりでをつくりあげる。彼もまた、創造科バリュエの一員であることを考えれば、これはバイロン卿のつくりあげた芸術がいかに襲撃者たちを阻むことがかなうかという戦いでもあった。

だが、

「うわ! もう戦ってる!」

と、森の中に、素っ頓狂な声がこだましたのだ。

続いて、襲撃者の反対側の草むらへ向かって、自動的に反応した シャボン玉の群れが雪な崩だれ落ちたのである。

本来ならば、周囲の酸素を破壊するとともに相手の呼吸器を阻害して、窒息に陥れるはずのシャボン玉が、一切の効果を現さず平凡に弾けたことこそ、バイロン卿にとって最大の驚きだった。

「なんだ?!」

「イゼルマの飼い犬か!」

襲撃者たちが、緊張を漲みなぎらせる。

しかし、草むらからひょっこり突き出た少年の顔は、あまりにも 無邪気だった。

露骨な殺し合いのただ中で、くるくると周囲を見やり、

「バイロン卿ですよね! イゼルマの!」

と、にこにこ尋ねたのである。

かろうじて動揺を表に出さず、尋ね返したのは、バイロン卿の意 地と言えたろう。

「......君は?」

「エルメロイ教室、フラット・エスカルドス! 参戦します!」 びしっと敬礼して、金髪の少年が襲撃者たちを振り返る。

腕を組み、得意げに鼻を鳴らして、樹上へと呼ばわった。

「さあ、やっちゃえル・シアンくん!」

「ル・シアンって呼ぶな!」

怒鳴って、まだ樹上にいたスヴィンも地表へと降りたった。

せっかく隠れてたのにとぶつくさ言いながら、軽く鼻の頭を擦こすったのだ。

「お前等らの臭いは、尖とがってて鉄臭くてイガイガしてるな。どいつもこいつも見苦しくて汚い殺気ばかり目立ってやがる」

Г......

そのときまで、襲撃者たちは少年たちを侮っていた。

無論、この状況でやってくるような相手ならば、それなりの危険性があると承知している。外見が実力に比例すると限らないのは、魔術師においてはなおさら鉄則だ。だからこそ、彼らは嘲るのと同時に、油断なく魔術を行使しようとしていた。

だが、その発動よりも早く、



「おおおっ!」

スヴィンが吼ほえた。

その音圧だけで、襲撃者の魔力がひきずられたのだ。

アジアの多くの地域では、犬の声は魔を被はらうとされる。少年 の声も似た効用を持つのか、魔術回路で変換したはずの魔力が、ま るで魔術を覚えたての末子フレームのごとく、ことごとく雲散霧消 したのである。

「まさか、お前……」

「一エルメロイ教室、スヴィン・グラシュエート」

目を剝いた襲撃者たちの目の前で、名乗りと咆ほう哮こうは別の 形へと変じた。

「Pallida mors青ざめた死よ」

それが、少年の呪文だったか。

ざあ、とスヴィンの髪がざわついた。あたかも髪自体が別の生き物と化したかのように蠢うごめいたのである。みるみる内にそれは背中を覆うほど伸びて、少年の八重歯もまた刃と紛うほどの巨大で鋭い牙と化した。美しさのほどは変わらず、在り方ベクトルが置き換わる。

跳ぶ。

それでも、襲撃者たちは正しく反応した。

すなわち、待機させていた魔術を解き放ったのだ。たった一小節 ワンカウントの詠唱で雷を発生させる魔術は、後方支援の天候魔術 によって大きく増幅され、哀れな相手を焼き払うはずだった。

伸ばした手が、消えた。

牙と同様に、鋭く伸びたスヴィンの爪によって断ち切られたのだと、はたして気づいたかどうか。大量の出血とともに魔術師が意識を失い、草むらへと倒れ伏す。

そのまま、スヴィンの影が木々の間を跳ね跳ぶ。幹から枝。枝から幹へ。一切の重さを感じさせない、無重力めいた異常な多角的跳躍であった。

「一くっ!」

なんとか対応しようとした襲撃者のひとりが、目を剝いた。

雷光で浮かび上がった姿に、息を吞のんだのだ。スヴィン・グラシュエートの姿は変貌していた。伝説の幻想種──人じん狼ろうにも紛まがうほど身体中の筋肉が盛り上がり、一本一本が金属の針にも等しい硬度を持った体毛を生やしていた。いや、実際に質量を変じさせているわけではない。よくよく見れば服や靴が千切れた跡もない。少年の身体を纏った異常なほどの密度の魔力が、彼を人狼に見せかけているのだ。

幻狼、とでも言うべきか。

獣性魔術。

多くの土地において、魔術は獣の能力を取り込むことに血道を上げた。

いや、魔術だけではない。たとえば中国武術では形意拳や白はっ 鶴かく拳けんなど獣の動きにヒントを得たものは枚挙にいとまがな いし、西洋のダンスや芸術でも白鳥や獅し子しのモチーフは頻繁に 取り入れられる。そもそも人が獣と袂たもとを分かったときから、 彼らは神秘を見いだされる側となったのだ。

スヴィン・グラシュエートの扱う魔術は、まさにそれだった。

本来バーサーカーという言葉が熊の皮を纏う者の意であったように、彼はとある秘法によって自らの内側から絶大なる獣性を引き出す。獣の神秘を得た五体は、単なる『強化』の枠を大きく超えて、 圧倒的な速度と腕力によって蹂じゅう躙りんする。

たとえ魔術師であろうとも、認識できないほどの速度には対応できぬのが道理だ。

たちまち、藁わらくずのように魔術師たちが弾け飛んだ。

森のただなかであることも、スヴィンの優位に拍車をかけていた

だろう。視認性の落ちる夕暮れで森の中と重なっては、いかに視力を『強化』しようと、スヴィンの動きには追いつけない。それでいて、轟ごう然ぜんと振るわれる爪にかすかでも触れようものなら、肉ごと持って行かれるのは必定だった。

「なら.....!」

残った魔術師たちは、方策を変えた。

密集していた陣形から、ばらばらに離散しつつ術式を起動する。 近距離でかなわぬなら、遠距離で始末をつければよい。すぐ切り替 えられる程度には彼らは戦い慣れており──同時に、こんな異能には 慣れていなかった。

「うんうん、そっちはこう、ぐるぐるっとしちゃおうよ!」

フラットが、くるりと手を回す。

ある種のスポーツを嗜たしなんだ者であれば、手を回す直前のフラットが魔術師とまったく同じ姿勢を取っていたことに気づいたかもしれない。心理学用語では、相手を安心させるために相手と同じ仕草を取り込むことをミラーリングと呼ぶが、この場合まったく別の意味を伴った。

「干渉開始プレイボール」

ぐるり、と願力のベクトルが入れ違ったのだ。

彼らの手から放たれる雷は、放たれた途端ぐるりと方向を変えた。たちまち自らの雷に焼かれた魔術師が絶叫をあげる。相手に似せた人形を使って呪いをかける―ある種の類感魔術と同じ効用を、フラットの動きはもたらしたのである。

ある種の外法や、東南アジア周辺で時々見られるような呪い。

......伝統的な欧州の魔術基盤に則のっとっている時計塔が、通常 教える魔術には存在しない。

しかし、フラットにとっては同じことだった。

少年の魔術は特殊である。

属性も稀少な空属性な上、扱う技術も極めつきの異端。世界各地の魔術のいいとこどりは、現代魔術では混こん沌とん魔術などとカテゴライズされているが、ロード・エルメロイII世の口からは「あんなものはゲテモノ魔術だ」と評されており、本人も「教授が俺の魔術に命名してくれた!」と喜び勇んでまわりに喧けん伝でんしている始末だった。

だが、通常そんな術式は通らない。

実際、混沌魔術の魔術基盤は極めて脆ぜい弱じゃくなものだ。使える魔術のバリエーションなどたかが知れており、いいとこどりと言われて考えるような万能性どころか、まともに術式を成立させることすら難しい。なのに、「なぜだかそれを通してしまう」という点において、フラット・エスカルドスは間違いなく異端児であった。

とりわけ、他人の魔術に干渉するという分野において、フラット は異常な才覚をあらわしていた。

「……エルメロイ教室……だと」

襲撃者たちのひとりが、呻くように言った。

エルメロイ教室の双璧。それはすなわち、時計塔における新興勢力の看板といってもよい。どちらも古い血統に属しており新世代ニューエイジとは到底呼べぬ彼らだが、それゆえに双方の長所を受け継ぎ、十全に実力を発揮していた。

古い魔術ゆえの強大さと、新しい講師ゆえの柔軟性。

意識してのことかどうか、彼らの動きはスムーズに協調していた。

「ようし、ル・シアンくんペースあげよう! エルメロイ無双いってみよう!」

「だからお前が指示を出すな!」

濁った声で反論したスヴィンだが、その言葉面と裏腹に、フラットが魔術を妨害した先からスヴィンは襲撃者たちを打ちのめしていく。たいていは異常なほどエゴが強く、同じ魔術の流派でもない限りチームワークなど望むべくもない魔術師だが、彼らの動きはまる

で生まれたときから一緒の双子じみた連係ぶりを見せていた。

そのふたりが、同時に動きを止めたのだ。

ふたりだけでなく、襲撃者たちも振り返っていた。その表情に刻みつけられたのは、フラットたちに対するものとはまったく異なる 種類の怖おそれであった。

「……この不愉快な状況は、どういうことかな?」

褐色の肌の青年だった。

アトラム・ガリアスタが唇を歪ゆがめたのであった。

──師匠と自分は、ライネスとともに近くの大樹へ寄りかかってい た。

雨を避けてのことだ。

魔術師の管理する土地は霊脈レイラインが豊潤かつ都市部を避けていることが多いため、たいてい鬱蒼と茂った森が周辺に存在する。この樹木もそうした恩恵を受けてきたのか、かなりの樹齢と見えるのにいまだ若々しい葉を茂らせていた。

どれほど長く、この光景を眺めてきたのだろうか。

雷鳴はやみそうな様子すらない。

イゼルマの土地全体を黒雲が覆い、逃げる夕陽を追うかのようだ。神話によれば、蠍さそりに殺されたオリオンは、星座になってからも蠍座から逃げ回っているということだが、そんな逸話を想起させる光景ではあった。

厳しい瞳で雨を見つめている師匠に、ふと自分は尋ねていた。

「……フラットたちは、いいんですか?」

「……ああ。どうせあいつらは勝手に戦闘に加わってるだろうしな。まともな魔術師相手なら、早そう々そうひけをとることはあるまい。問題児だがそういう実力は確かだ」

いかにも機嫌悪そうに、葉巻の煙とともに師匠が吐き出す。

問題児というところに力を込めたのは、本心の吐露だろう。おおよそ他ほかの学科や教室から見れば規格外や異端児ばかりのエルメロイ教室だが、その中でもあのふたりは傑出していた。魔術の力量はもちろんのこと、何よりその在り方が違う。あんなにも魔術に適

応しながら、どこかふつうの魔術師と離れた性質が、時計塔の生徒 たちの中でも一際目立っていたふたりである。

ひょっとすると、魔術師らしからぬくせに誰よりも魔術師らしい 師匠に似たのかもしれない。

「もっとも、相手にもまともじゃないのが交じっているが」

「.....まともじゃ、ない?」

師匠のその言い方に、自分の背筋がびくんと震えるのを感じた。 情けないと思いつつも、こらえることが難しい。

「アトラム・ガリアスタ。スヴィンに調べてもらっていた相手だよ。まあ、よっぽどのことがあっても、あいつらなら逃げ切るぐらいはやってのけるだろうが......」

と、その名を告げる。

「……ガリアスタ」

あまり聞かない響きだった。

もちろん、時計塔は自分の知らない相手ばかりなのだが、どこか しら異なる土地の臭いを感じさせた。乾いた砂。肌を焼く熱い空 気。三日月のごとく湾曲した肉厚の刃。そういったもの。

すると、肯定するように師匠も続けたのである。

「古い中東の血を引く一族だ。時計塔に属したのがこの数世代なことと、扱う魔術が半ば呪術の域に踏み込んでいるせいで、実力よりも低く扱われているが相当厄介な相手だよ。なにしろ、その特異な魔術によって近隣の組織を従わせて、石油の採掘権まで押さえたそうでね。表社会の権力なら時計塔でも指折りといっていいほどだ。……それが、とある呪体のオークションで、イゼルマと最後まで争っていたと」

「ほほう。イゼルマが例の呪体を買い上げたとかいうヤツだな?」

「.....つ」

口を挟んできたライネスに、自分はとある男を思い返していた。

―「実はひとつ、手に入れたい呪物があるんだよ」

ミック・グラジリエ。

実はスパイなんだと、ふざけた自己紹介をしていた男。そういえば、今朝から彼の姿は見ていなかった。ガリアスタの襲撃に際して、彼はいかなる行動を取っているのだろう。もしもあの告白が本当なのだとしたら、彼はひょっとしてガリアスタの―

Г......

「さて」

ごくり、と唾を飲み込んだ。

ライネスが、口を開く。

「では、そのガリアスタたちが黄金姫を殺したというのかな?」

と、師匠の言葉は明瞭ではなかった。

口寂しそうに唇を撫なでて、その目を細めつつ情報を整理する。

「目当ての呪体を奪われた腹いせや脅迫という可能性はあるが…… だったら、普通は誘拐などの手を使うんじゃないかね。まして、そ んな事件を起こした後に改めて襲撃する必要などあるか?」

「たとえば、密かに潜入して呪体を探していたところで、黄金姫に 見つかって殺してしまったとか?」

ライネスが推理を披露する。

しかし、こちらは師匠がかぶりを振ったのだ。

「殺した後、丁寧に黄金姫の部屋まで死体を戻したのか? 血をこぼさなかったのは何らかの魔術を使ったとして、魔術錠ミスティック・ロックはどうする?」

「む。……ええと、ううーん」

ぐるぐると人差し指で空気を掻きまわして、ライネスが黙り込んだ。

自分は残念ながら、どちらにもついていけない。目の前の人間の 気持ちも分からないのに、二、三度しか会ったことのない魔術師た ちが引き起こした殺人事件の推理などかなうはずもない。

結果として、ふたりが話しているのを傍観して、指を組み合わせているきりだった。

「イヒヒヒヒヒ! どうしたどうした、お前もちょっとぐらい口を出したらどうだ! せっかくの推理大会なんだから、ひとつふたつや三つや十ぐらいは適当な推理を披露してみたらいいんじゃないか! 助手ワトソンならいくら見当違いの推理をやらかしても恥にはならんだろうよ!」

右手のあたりから、アッドの笑い声が聞こえた。

「……拙は……頭が良くないから……」

「それも怠慢なだけだと思うがな! できないできない何にもできないって言っててすむんだったら、そりゃあ人生楽だろうさ!」

Г......

辛辣な台詞に、返す言葉はない。

自分もその通りだと思うからだ。正直考えるのはしんどい。目を閉じて耳を塞いでずっと生きていられたら、どれだけ楽だろうかと思う。自殺するだけの勇気もなく―いいや、そんなことをして、自分もあれの一員になってしまったらと思うだけで、今も歯の根が嚙み合わぬほど怖くなってしまう。大地の下で素直に眠れたら良いけれど、死にきれず地表を彷徨さまようようなあれになってしまったならば……。

どうしようもない臆病者で、怠け者で、卑ひ怯きょう者ものなのが自分だ。

だったら変わるべきだと言われても、最初の一歩を踏み出せない。あの故郷から出てきても、自分は結局何も変わっていない。

どうしてだろう。

......苦しい。

吐き気がする。足から頽くずおれてしまいそうだ。

この事件は、ひどく自分の心に迫ってくる。剝離城アドラのときよりも遥かに胸に迫る何かが宿っていて、なのに自分の目だけには映らない。

「──しかし、その仮説だと今度はメイドの死体が説明できないぞ」

「ぐ。だが、それは二重犯人説とかでだな……」

師匠とライネスの会話も遠く、自分は胸の痛みに囚とらわれていた。

きっと、それはとても身近だからだ。

自分にとって見逃せないほど大事で、見過ごしてしまうほど身近なこと。

降りしきる雨の中に、透明な針が交じっているようなもの。刺されば痛いし、考えただけでも恐ろしいが、目を凝らしたところで見つかるようなものではない。自分の身体に刺さって、血にまみれて初めて浮かび上がる。

それが針だと気づくのは、ひょっとしたら無数の針に埋め尽くされて死んだ後。

雨が止やんだら、針に埋め尽くされた自分の死体を見て、どうしてこの人は逃げなかったのだろうと、誰か首を傾かしげてくれるだろうか。

「むう。だけど我が兄の話なら、黄金姫だってつくりだされたわけ で……」

「いいや、黄金姫は確かにつくりあげられた美だが、あそこまでに 達していれば自然と非自然は関係ない。そもそも人工的なんて概念 が自然に反している。流水に磨かれようが人の手で磨かれようが、 石ころは石ころだ。つまり......」

(.....ああ、そうか)

意識の外から漏れ聞こえる言葉に、ふと思った。

黄金姫と、白銀姫だ。

だって、彼女たちの在り方はあまりにも似ている。師匠が話してくれた化粧の魔術やその歴史も、自分の身体に刺さった透明な針だった。

フードの下に、そっと触れる。

透明な針とはこれだ。いつまで経たっても、心臓から溶け消えることのない氷。硝子ガラスの針ならそんなことは当たり前で、今まで気づかなかった自分だけが間抜けだという話。どこまでいっても自分の愚かさだけが胸をつく。心臓を刺す。血を噴き出す。

(─死んでしまえればいいのに)

想像の血が喉を塞げばいい。

首元を掻きむしり、この顔を紫に腫らして、誰よりも惨めで無様に倒れ伏せばいい。きっと自分にふさわしい死に様はそれだ。せめて、残ざん滓し情報が幽霊になってしまうような醜態だけは晒さないでほしいが、それより先の望みはなくて──

「一グレイ」

そこで、やっと名を呼ばれていたことに気づいた。

「......あ、師匠」

「どうした? さっきから顔色が悪いぞ」

こちらを見下ろして、師匠はいつものように眉間へ皺を寄せていた。一見すると不機嫌なのかと見紛うその表情が、確かにこちらを気遣っていると分かるぐらいには、師匠との付き合いも長くなっていた。

「その、拙は.....」

数秒、逡しゅん巡じゅんした。

しどろもどろになりつつ、だけど自分の考えていたことは覚えていた。

だから、言葉よりも確かな手段として、フードの内側を少しだけ 晒した。

師匠が、大きく目を見開く。

「グレイ! お前、顔は出すなと―」

「.....いえ」

かつて自分の願った通りの叱責を受けながら、かぶりを振る。

晒せた内側はほんの少しだけど、晒した指は火傷やけどしたように熱かったけれど、やっとのことで舌を動かすことができた。

「顔が……今回のことと関係あるかもしれないと……思うんです」

「事件と? だが─ 」

師匠が、ちらりと隣を見やった。

ライネスがいることを、案じているのだろう。あまり他人に触れ 回るような内容でもなかった。そのことを察したのか、彼女もこと りと首を傾げ、口を開いた。

「ふむ。私が問題なら、少し席を外すが」

「.....いいんです。きっと、ライネスさんは知っている必要があると思います」

ちら、と師匠を見る。

戸惑った表情は変わらなかったが、否やということはなさそうだった。

そっと、露わになった自分の頰に触れた。

「これは、もともとの拙の顔ではないんです」

「何―っ?」

ライネスが表情を歪めた。

そういえば、彼女にも何度かフードのことを指摘されていたことを思い出した。

― 『そのフードを外せばもっと可か愛わいいのに』

からかいつつも、そう言ってくれたことを覚えている。

気に入ってくれていたのなら、とても残念だ。とてもとても本当に残念だけれど、結局のところ自分は誰の期待にもそぐわないのだ。誰の期待に添うことも、結局のところはできなかったのだ。

「……アッドのことはご存じですよね」

「ってお前こら! いきなり出すな! 心の準備ができないだろ!」

固フ定ッ具クを外され、右手に取り出されたアッドが、浮き彫りになった目口を忙せわしく動かす。自分よりもずっと表情豊かだ。 思えば故郷では、自分が安心して見られた他人の表情は、テレビの中の人々とこの匣だけだった。

「この匣アッドには、とある宝が秘められてます」

最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド、と真名までは口にしなかった。

かつてアーサー王が振るった秘宝は、時計塔においても特別な意味を持つ。だから振るったとき以外はその名前を秘するようにと、 最初に師匠から厳命されていたからだ。

だが、そうせずとも、ライネスは真摯に話を聞いていた。

宝とは何かとか、言いにくいことを訊こうともしない。つまると

ころは立派な魔術師なのだろう。許された話を許された範囲で尋ねるというやり方に慣れている。今の自分にはそのことがありがたかった。

うなずいて、話を続ける。

「拙の家系は……この匣の中身を使えるヒトをつくっていました」 そう、同じなのはそこだ。

何かのために生まれてきたのが、最初から決まっていたからだ。 美しくなるために生まれた黄金姫と白銀姫のように、自分はそうい うカタチになるのが決まっていた。そして、誰よりも成功してし まった。

「かつて、この匣の中身を使いこなした本当の持ち主を模して...... ずっとずっとたくさんのヒトをつくってきたんです......」

たとえばそれは、究極の美をつくりあげようとした魔術師の家のように。

かつての持ち主とそっくりの──顔だけではなく、四肢や筋肉のつくり、果ては内臓や血管までも模倣しきった人間をつくりだせれば、匣に秘された宝具を使うことができるようになると、自分の家系は信じていたのだ。無論、かの英雄は現代では失われた多くの神秘的因子を持っていたというのだから、完全な模倣などかなうはずもない。だがヒトの部分だけでも模倣しきれれば、何らかの光明があるはずだと、自分の先祖は信じたのだ。

何百年、ひょっとすると千年を越えるかもしれぬ失敗に耐え続けたのは、はたしてどのような狂気であったろうか。呪いじみた絶対遵守の果てに、代々の当主たちは何を見てきたのだろうか。

「それが、本当にうまくいったのは十年前です」

十年前。

理由は分からない。

少なくとも、生まれた当時の自分はそれなりの資質を持っていただけの、いつものような失敗作だったはずだ。霊に対して敏感すぎる体質という欠陥—家族にまつわる人間のほとんどは祝福だと喜ん

でいた──はありつつも、少なくとも自分が自分であるという当たり前のことを疑う余地などなかった。疑う必要があるなど微み塵じんも考えていなかった。

しかし、十年前。

幼かった自分の顔は、その日を境に大きく変化していったのだ。

確かに面影はあったけれど、似てはいたけれど、自分のそれではないまったく別人の顔へと少しずつ変じていった。顔だけではない。肉体そのものが変貌していく音を自分は確かに聞いた。成長痛とはまったく別の痛みで、骨や肉がギシギシと軋みを上げて異なるカタチへ組み上がっていくのを聞いていた。

鈍い痛みに悶もだえながら、寝床で枕を抱えた夜がどれほど続いたろう。

徐々に変わっていく自分の顔を、この上なく崇高なものだと歓喜し、落涙までする家族たちに囲まれて、どんな表情をしたらいいのか分からなくなったのはいつだったろう。

「……アッドときちんと話せるようになったのも、その頃です」

なんでも、適合率の問題だという。

かつての秘宝の主と、自分との適合率が規定値以上に高まったため、封印礼装として半ば眠っていたアッドの疑似人格がより明確に呼び起こされたのだとか。いずれにせよ、自分にとって数少ない話し相手がこの匣になったことは間違いなかった。

「.....なるほどね」

小さく、ライネスがうなずいた。

ここまでは、師匠なら知っている話だ。前提ともいえる。自分と 師匠が故郷で初めて出会ったときに話したこと。願ったこと。

──『拙の顔のことは……嫌ったままでいてください』

今思えば、なんて残酷なことを頼んだのだろう。

自分が好きでいられないから、あなたも嫌いでいてくださいなんて、そんな虫のいい話はあるまい。自分の家族と違って、初めてこの顔を怖がってくれたから嬉うれしかったのだなどと、そんな言い訳が通用する道理もない。

それでも、話は途中だった。

死にたくなるような自己嫌悪を堪こらえて、肝心のことを口にする。

「……鏡、なかったですよね。黄金姫の部屋に」

ライネスと一緒に調べたとき、女性の部屋ならば当然あるべき品の欠如に、どうしても答えが見あたらなかったのだ。あの際自分は何も口を出さなかった。鏡がないなんて、自分からしてみたら、あまりに当然すぎることだったから。

「……その……あの人の顔がつくられたものだったなら……あれは……そういうことじゃないかって」

かあ、と頰が熱くなるのを感じた。

まるで見当違いの発言だったかもしれない。推理なんて言えるはずもない、本当に思いつきだけの言葉。だいたい鏡がなかったからなんだというのだ。そんなことが事件を解決する助けになるとは、自分にだって信じられない。

だけど、師匠もライネスも笑いはしなかった。

だから、フードを戻しながら、自分は必死に口にした。

「拙は……怖かったです……」

震える声は、止められなかった。

フードを戻した指先は、今度は氷のように冷たかった。

「......鏡の中の顔が......自分が変わっていくのが......怖かったです......」

どうしてだろう。

この人たちの前では、ひどく素直に告白してしまっている。故郷ではどうしても言えなかったことを、こんなにもたやすく。尖った石を喉から吐き出すような痛みはあるけれど、その程度はあそこで味わった恐怖に比べれば、何ほどのこともない。

「この顔が.....嫌いなわけじゃないんです」

正直に、話す。

確かに、かつての自分の面影も残っている。自分に資質はあったわけだし、先祖たちの努力を考えればもともと似てはいたのだろう。実際、あれから十年を経た今、どこまでが自分の顔で、どこからが似せられてしまった顔なのかは判断がつかない。

何もなくても、うりふたつの顔になったのかもしれない。

あるいは、成長すればまるで違う顔になっていたのかもしれない。

「だけど、鏡を見るのは……今でも怖いです……。遠い昔に死んだはずの……英雄の亡霊に……乗っ取られてしまうみたいで……」

「……ああ、分かった。もういい」

声とともに、柔らかな指先が頰に触れた。

泣いていたことに、それで気づいた。人差し指の先が拭った涙 を、師匠は困った顔でハンカチを取り出して拭き取る。

それから所在なげに葉巻へ手をやった。

「変わってしまう……か。確かにそれが怖かったのかもな」

滲んだ視界の上、葉巻の煙が覆ったせいで、師匠の顔はよく見えなかった。

雨粒が、地面を打つ。

ライネスは黙っていてくれた。

珍しく、アッドも口を出さなかった。これまで故郷の人間以外で

は師匠にしか話さなかった秘事を打ち明けたのに、からかうこともしない。これでも気を利かせてくれているのだろう。情けないが、数少ない自分の友達には違いないのだ。

異音が発した。

大樹にもたれかかったままの師匠が、葉巻をつまんだ手を樹皮に ぶつけ、目を剝いたのだった。

「まさか、そんな.....」

「何だね、兄よ」

突然目を見開いた師匠に、ライネスが首を傾げた。

「……本当か? 本当にそんな簡単なことでいいのか?」

葉巻を唇に戻し、何度も呟く。

義妹の声など、まるで耳に入ってないようだった。さきほどの自分と反転して、今度は師匠の方が思考に没頭している。

「……それなら計算は合う。なにしろ惑星なんだから、使うのは百トニラ十イ度ンだけでいい。だけど、もうひとつは……いやそれもとっくに答えは出ている。彼女たちは相補性の美なんだから最大限の効用をもたらすとしたら……。そうか、ペローかバジーレかは問題じゃない。もっと簡単で表層的な……」

ただうわごとのように言葉を繰り返した。

ひどく難しげに、眉間の皺を寄せている。この人のこういう表情が、自分は嫌いじゃなかった。ライネスのように他人の苦悩や不幸を愉しむわけではないけれど、師匠が不意に見せる横顔を、なぜだか愛いとおしく思っている自分がどこかにいるのだった。

彼の頭の中で、一体どのような光景が広がっているのか。

見たい、とふと思った。

この人の見た風景を共有したい。

こんなに頭の悪い自分だけど、師匠の風景を垣間見ることができ

ればどんなにか救われるだろうとは考えるのだ。悩みが消えたり欠陥が修正されたりはしないのだろうけれど、それでも夜空の星を見上げるように憧れる。

ひょっとしたら、師匠が天才に憧れているように。

「逆だ……!」

と、やがて師匠が呟いた。

「太陽を別の何かに見立てるんじゃない。太陽に見立てるんだ。これだけの規模で太陽の象徴が揃っているんだから、そっちの難度はずっと下がる。いや、だがそれが正解だとすると……」

もう一度師匠が奥歯を嚙みしめ、唸うなりをあげたのだ。

それまでの没頭による呟きとは、異なる種類の声であった。

「おい兄よ。独り合点はいいが、もう少しまわりにも気を遣いたま え。一体全体、太陽の何がどう逆だっていうんだね」

堪えかねたライネスが、やや厳しい口調で問う。

しかし、師匠は暗雲を仰ぎ、片手で顔を押さえ、

「……だったら、最悪の可能性がありえるじゃないか」

と、呟いたのだ。

「なぜ、もう少し早く気づかなかった……! どんな道化だ私は。 ほんの後少しで、どうにでもなったろう」

ギリ、と奥歯の軋む音さえ聞こえるようだった。

そのままぐるりと振り返った師匠は、ライネスではなく、自分へと視線を打ち付けた。

「グレイ」

「は、はい」

呼びかけに、強こわばった声でうなずく。自分の思考がバレたのだろうかと、意味もなく心臓が脈打った。頰が紅潮していたことは

フードのせいで見つからなかったと思う。

しかし、そんなことは一切斟しん酌しゃくせず、師匠はこう持ちかけたのである。

「ひとつ、頼みがある」

─少しだけ、時間は遡る。

フラットがバイロン卿と合流する直前に、月の塔で、とある女魔 術師が小さくうなずいたのだ。

「─なるほど。こう動くか」

蒼あお崎ざき橙とう子こは、静かに囁いた。

手前の机では、紅茶が淡い湯気をたてている。

イゼルマにあてがわれた研究用の部屋であった。四角く切り取られた窓から、今にも夕空を押し包まんとする暗雲が見えた。天気の変わりやすい湖水地方ではなくもないが、やはり通常とはほど遠い変貌ぶりではあった。

Г......

彼女の眼まなこは窓とは別の場所と角度から、外界を俯ふ瞰かん していた。

使い魔である。魔術の門派によってはファミリアともアガシオンとも呼び、東洋では式神と称されることもある。橙子の場合使っているのはやはり人形で、第四次聖杯戦争では針金で使い魔をつくった魔術師がいたと聞いたことから、興に乗ってゼンマイと歯車と糸を使ってつくってみたものだった。

もっとも、興に乗ってはみたものの、必要最小限のものだけでつくる使い魔は向いていないということも再認識した。凝り性である橙子にとって、余分な機能おもさをつけられない単一機能の使い魔はつくっていて"楽しくない"のだ。

羽ばたく翼は真しん鍮ちゅう線せん、埋め込まれた瞳は紅玉ル

ビー。

その使い魔は、今この塔からいささか離れた塔のあたりを飛翔している。

「さて、いささか面倒だが頼まれてしまったしな」

小さくため息をついて、橙子が立ち上がった。

ちら、とその視線が足下に落ちた。

部屋の隅に、彼女の持ち物としてはいささか無骨で大きすぎる── 奇妙な鞄かばんが置かれていたのであった。



マイオとイスローは、月の塔に引きこもっていた。

バイロン卿に言われた通り、戦闘には参加せずに共用の臨時工房へと避難していたのだ。イゼルマ本来の工房が塔の最上階にあるのと反対に、この臨時工房は地下につくられている。互いの魔力や大マ源ナからの供給が混じらぬようにという魔術上の配慮とともに、互いの関係性に厳然とした上下をつけるという意味合いの込められた場所だった。

無論、時計塔もそうであるように、地下の方が魔力を汲くみ上げるには有利な点もあるのだが、イゼルマの構築している術式は星々の運行から吸い上げる性質の方が強かった。

ふたりとも、少し離れた場所で椅子に座っていた。

石壁に取り囲まれた工房には、哲学者の卵や蒸留器といった基本 的な魔術の品々のほか、薬や研げんや乳鉢といった薬師の道具、紡 つ錘むや手織り機といった古典的な職人道具が並んでいる。

無論、薬師マイオと織り手イスローのためのものだ。黄金姫、白銀姫を完成させるため、協力を申し出てきた魔術師たちの歴史とも言えただろう。……昨夜最高の完成を見せて、今はその片割れしか残っていない至上の美の。

「……どうする……つもりだ?」

不意に、イスロー・セブナンが口を開いた。

複雑に細かく編み込まれた髪が揺れる。

彼にとって、人間や社会はさしたる興味の対象とならなかった。 実のところ、凄絶な苦痛とともに修得してきた魔術にも、さほどの 感慨は持っていなかった。 ただ、美しいものを見たかっただけだ。おそらくは彼の一族共通の性質なのだろうとも思っている。何世代にも渡って血族がイゼルマに手を貸してきたのも、これが要因だったろう。イスロー個人にとっては、自分のつくるドレスに見合う相手が彼女たちしかいなかっただけのこと。

いや、彼女たちの美しさに引きずられて、自分の織り手としての 能力が著しく向上していることも、イスローは実感していた。それ は単なるファッションデザイナーとしての意味合いではない。魔術 師として育てられた彼のつくる衣装は、ある種の魔術礼装としての 機能を併せ持つ。

黄金姫、白銀姫のための魔術礼装。

それは一般的に考えるような──魔力を発露させ、超常現象を起こすだけのものではない。ただ彼女たちの美をより引き出して、奇くしくもライネスが言っていたような精髄を体現させるためのものだった。

― 「美しいものを見れば、美しくなる」

何世代もかけて黄金姫、白銀姫の魔術的・肉体的な改造が進められていくと同様に、セブナン家の織り手もその技術を進歩させていった。イスロー・セブナンはそうした人々の果てに存在しているのだった。

対して、

「ぼ、僕は」

薬師であるマイオは、もう少し異なる感慨を持っていた。

不健康そうな顔色で、マイオが自分の唇のあたりをつねる。吃き つ音おんがちにつっかえながらも、自分の内側の思いを言葉にしよ うと、もどかしく喉を震わせる。

「僕は、ディア、じゃなくて、黄金姫の、」

不意に、イスローが目を細めた。

陰鬱に曇ったその瞳を伏せて、青年は嗄しわがれた声で言ったの だ。

「……ディアドラと……お前は……よく遊んでたな……」

マイオの顔が暗くなった。

その通りだ。彼女が黄金姫の幼い候補でしかなかったときから、またエステラが白銀姫の幼い候補でしかなかったときから、マイオは何くれとなく遊び相手となっていた。魔術師の子弟として交流のある相手が少なかったのもあるが、より実務的には幼少から彼女の体質を知り抜く必要があったからだ。薬師とは患者自身よりもずっと深く、その身体を知らねばならない。マイオの家系―クライネルスは、イゼルマとの長い交流によって、この時期から薬師と患者が触れあうことの重要性を把握していた。

マイオにとって、彼女たちは生まれる前から自分の技術を捧げるべき相手だった。

「な、なんで、いまさら、そんなことを」

「……カリーナたちも……よく一緒だったな……」

「遊びを知ってるのは、カリーナたち、だったから」

ぼそぼそとマイオが言う。

もともとケルト系だったカリーナたちの姉妹は、地方独特の遊び をいくつも覚えていた。ディアドラとエステラを交え、マイオもそ の遊びによく付き合わされたものだった。

「ディアドラは、石蹴りが好きだったよ。ぼ、僕より、何倍も遠 く、蹴飛ばしてた」

「.....ああ.....」

と、椅子に座り込んだままイスローが認める。

「俺も……あれはイヤじゃなかった……」

「つ?」

意外な告白に、マイオが振り返った。

「君は滅多に、さ、参加しなかったろう」

「……エステラやレジーナはともかく……ディアドラと遊ぼうとすると……マイオが睨んだろう……」

「っんぐ」

マイオが口ごもる。

過去のことで旧友を騙せるはずもない。いくら魔術師だとして も、幼少時の好悪からして一般人と異なるわけではないのだ。小さ な想おもいも小さな嫉妬もそのままに彼らは覚えていて、そのまま に彼らは育っていった。たとえ、そこに魔術師という方向性ベクト ルが加わったとしても。

「ぼ、僕は」

そこで、言葉が切れた。抱えてる想おもいは今にも溢あふれてしまいそうなほどなのに、どうしても喉から先へは出てはこなかった。ずっと昔からそうなのだった。

「お前のことは、イヤじゃ、ない」

「ああ.....」

不健康そうな顔色で、イスローはうなずいた。

その時間を嚙みしめるかのごとき間をおいて、再び口を開いた。

「マイオ……。今襲ってきてる魔術師が……黄金姫を殺した犯人 と……思うか……?」

「わからない」

弱々しく、マイオがかぶりを振る。正直に言えば、何も考えたくなかった。このまま石床にうずくまって泥のように眠ってしまいたかった。そして目が覚めぬままでいられたらどれだけ幸せなことだ

ろう。魔術師によっては、自己催眠で精神を解体清掃フィールド・ストリッピングし、ストレスを識域ごと消し飛ばす者もいるというが、マイオが望んでいるのはもっと徹底的な自己の破壊だった。すべての人格を無意味な断片にしたあげく、二度と再構築しなければいい。いいや、そもそも自分など生まれなければ良かった。そうすれば、あれほどに慕った幼なじみの死など見ずにすんだものを。

どれだけの、時間が経ったろうか。

扉が開いた。

マイオとイスローが、息を止めた。

そこから現れたのは彼らがよく知る──しかし、この一瞬ごとにも 美しくなっているかのような、天上の化身とそのメイドであった。

「エ、エステラ。レジーナ」

マイオがその名を呼んだ。

彼らが幼い頃より親しんでいたはずの白銀姫は、彼らが知らない顔をしていた。いやそんな風に調整してしまったのも、マイオとイスローなのだ。亡くなった黄金姫と同じように、美のためにすべてを捧げたその結果。

「よかった。ふたりともここにいましたのね」

その声音さえ、いかなる楽器より麗しく、ふたりの耳に響いた。

幼い頃の面影が残っていることを、この場合無惨と呼ぶべきなのかどうか。あまりに隔絶した美はそれ以外の意味を本人から奪い去ってしまう。黄金姫がそうであったように、エステラ・バリュエレータ・イゼルマという名よりも、もはや白銀姫という呼称の方が似つかわしかった。

「エステラは、何を」

意固地に、マイオは名で呼んだ。

「姫様は……」

とメイドのレジーナが言いかけたのを、白銀姫が制止した。

それから、自らの口で改めて申し出たのだ。

「力を貸していただけますか」

「.....つ」

マイオとイスロー。ふたりともが顔を見合わせた。

続けて、彼女はこう口にしたのである。

「私は、ロード・バリュエレータこそ姉を殺した犯人だと思いま す」

ر د—____

Г......

マイオは窒息せんばかりに喉を詰まらせ、イスローはただ黙りこくっていた。

やがて、沈黙したままの織り手イスローの代わりに、薬師マイオ が尋ねた。

「どう、して?」

「もともとイゼルマはバリュエレータの分家です。そこが成功しすぎた場合、必ずしも本家の利益になるとは限りません」

部下の多大なる成功が、主人の身を危うくする。世界のどこでもありふれた出来事だ。実際、黄金姫の亡命が成功していた場合、バイロン卿の失脚はもちろんのことだが、分家の管理責任を問われるのはロード・バリュエレータにほかならなかった。

だから、あの老女が真犯人だと、白銀姫は言う。

つじつまは合う。バリュエレータに君臨する秘術をもってすれば、自室にこもる黄金姫を切断するぐらいはいともたやすかろうし、何らかの手がかりを得たカリーナを殺して、自律型魔術礼装たるトリムマウに罪をなすりつけるぐらいはやるかもしれない。

.....そして。

マイオは、しばらく硬直してから、顔を上げた。 「どうする、つもりなんです?」

ある種の決意をこめて、そう問うたのであった。

雨雲に追われる夕陽は、いよいよ没しつつあった。

こぼれおちる雨粒も重なって、ただでさえ暗い森の内側は魔術師 の瞳でなければ見通せぬ真の闇へと変じつつあり、そんな中で褐色 の肌の青年はゆっくりと戦況を見回した。

雨をかぶりつつ、彼はひどく呆あきれたようにため息をついた。

「とっくにイゼルマの双貌塔まで攻め寄っている筈はずの時間だが……想定外の事態になってるようだね」

「……申し訳ありません」

フードをかぶった襲撃者たちが、その青年に跪く。

謝罪を受け入れることもなく、彼はゆっくりと前に歩み出た。

「アトラム・ガリアスタ」

と、口にした。

そうしなければならないこと自体が屈辱であるかのように、整った眉をひどく陰鬱にひそめていた。彼の計画通りならば、この名乗りはイゼルマの本拠地である双貌塔のいずれかでなければならなかったからだ。

「僕の名だ。──バイロン卿、なかなか面白い若者を飼っていらっしゃる。やや品性に欠けるのはいただけないが」

「客人の……弟子らしくてね」

バイロン卿も突然の援軍を受け止め切れてないのか、半ば困惑した顔でかぶりを振った。

「なんとまあ! いや、羨ましいばかりだ。あまりに人望溢れて、 知らない相手まで助けに来てくれると。さすが欧州に名だたる古豪 は違う。僕の故郷では身内でも血で血を洗う争いが当然だったものですが」

アトラムがため息をつく。

わざとらしく悲嘆に暮れた顔で、こんな風に申し出たのだ。

「で、いかがかな? こちらの部下も先に尋ねられたかと思いますが、例の呪体、私どもにお譲りいただけるかどうか」

「……そんなことを仰おっしゃられても、分かりかねますね」

バイロン卿も、応じるはずがなかった。

だったら、そもそも迎撃に出る必要がない。月の塔か陽の塔に居座って、降伏の意思を示せばすむことだ。ぎりとふたりの間で緊張した空気が張りつめ、すぐに青年の方から別のカタチへと変換された。

森の濡ぬれた地面を踏み、両手を広げたのだ。

「では、戦争だ」

芝居がかった感じで、告げる。

「戦争ウォー、戦争ウォー、戦争ウォー……ああ、野蛮な響きだね。名にしおうイゼルマがそんな選択をするとはなんと嘆かわしいことか」

いかにも遺憾とばかりに、かぶりを振った。

もっとも、その唇に浮かんだ下卑た笑みばかりは隠しようもない。口ではどう言ったところで、つまるところはその野蛮な殺し合いを娯楽のひとつとして嗜んでいると、はっきりと告白している笑みであった。

魔術師であれば、ほとんどの者が命を賭けた争いを覚悟している。魔術の力量が戦に直接還元されることはないにせよ、闘争心や本能を駆り立て、個々の生命の限界に挑戦することこそが魔術の発展を促すと分かっているからだ。

しかし、同時に、争い自体を好ましく思う魔術師は意外なほど少

ない。あくまでそれは手段なのだ。先祖から伝えられてきた秘術や 魔術刻印を無為に危険に晒す必要もないことも、彼らは知ってい る。

アトラム・ガリアスタは、どちらでもなかった。

純粋にスマートな処理──方的な勝利こそが、彼の嗜し好こうだった。

「ですが、そちらがお望みなら仕方ない。このアトラム・ガリアスタ、若輩ながらバイロン卿の相手を仰せつかりましょう」

「―待った」

と、別の方向から声がかかったのだ。

じろ、とアトラムが目を凝らす。

スヴィンが、口を開いたのである。

「バイロン卿。ひとつ、お願いがあります」

「お願い?」

「これを撃退したら、うちの先生から……いえ、ライネス様から取り上げた月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムを返してくださいませんか」

「.....それは」

バイロン卿が口ごもる。

即座に返答できることではなく、その隙を縫って、アトラムが手を動かした。

「やめてくれないかな。ただでさえ時間をロスしているんだ。そちらの些事に付き合う気はないよ」

スーツの内側から、小さな品を取り出したのだ。

手の平に載っていたのは、小さな壺つぼのような物体だった。

「原始電池……と言ってご存じかな」

世界最古の電池は、中東の郊外
ホイヤットラプヤ遺跡で発見された。

おそらく電池の仕組みを知ってのことではなく、金メッキをするための器具として、いくつかの偶然から開発されたものだろうと目されている。しかし、同じ仕組みは魔術の手でも連綿と伝わっており、科学とはまったく別の道のりを経て発展していたのである。

そうした一族のひとつが没落する際、ガリアスタが金で歴史ごと 買い上げたのだ。

もともと鉱石や代償の魔術を研鑽していたことも、原始電池という形式に都合が良かったのだろう。はたして、彼らは電力へ自らの魔力を乗せることに成功した。古代より多くの地域で神威とも神鳴とも崇あがめられてきた『力』を制御することで、ガリアスタの一族は繁栄を享受してきたのである。もちろん、天候に働きかけた術式もこうした技術を応用したものだ。

「猛れガッシュアウト」

その一言とともに、電撃が巨大な手となった。

少年へと襲いかかった速度は、まさしく雷速。空気抵抗を嚙み破り、瞬きよりも速く少年の五体へと振り落とされる。

幻狼の咆哮が、それに応じた。

どちらも魔力のこもった術式だった。稲妻と音波──形は違えど、神秘として発せられた以上大原則には逆らえぬ。つまるところ、より強い神秘が相手を圧する。ぶつかりあった稲妻と咆哮は、両者の中間で不可視の火花を散らし、雨粒を弾き飛ばす坩堝となって混じり合い、ついに決裂した。

今回の結果は、五分だったか。

威力だけならばアトラムの雷が勝り、しかし粉塵が雨風に洗い流 された後、幻狼と化したスヴィンは不敵に唸りを上げたのだ。 「大したものだよ」

と、その牙の間から、声がこぼれた。

「魔術としては二流。だけど、魔術師の戦闘としては確かに一流 だ」

「ほう。二流とはよく吼えたな小僧」

アトラムの口元が残酷に歪む。

殺意を混じらせた声音に一歩も退ひかず、幻狼の少年はさらに言う。

「自分でも分かってるんじゃないのか? 先生なら一発で見抜く ぞ。あんたの魔術は確かによく練られてる。人を傷つけるための、誰かと戦うための魔術としては十分以上の完成品といっていい。――だけど、それは魔術師としての本質じゃないはずだ」

スヴィンが、軽く鼻を鳴らした。

「だって、それじゃあ.....魔術師じゃなくて、魔術使いだ」

「.............」

その言葉が、どれほどの罵倒としてアトラムの尊厳を傷つけたか。

目を剝いたアトラムは、憤ふん怒ぬをたぎらせていた。先に数倍する量の魔力を精製し、魔術刻印も駆動させつつ原始電池の術式に叩き込む。ガリアスタの一族が買い上げた術式は、それらの魔力を最も効率的に雷へと変換した。

あたかも、竜であった。

大きく顎あぎとを開いた魔物を、その場の誰もが幻視した。

今度こそ逃げ場などつくらせず、雷の竜がスヴィンを吞み込む時

スヴィンの身体が、消えた。

人間の動態視力を大きく上回る速度で背後に跳躍したのだと、誰

に分かろう。周囲の魔術師たちが大きく呻く。木々の幹をピンボールみたいに跳ねとんで、スヴィンの爪は流星のごとく、アトラムの頭上から振り落とされた。

*

襲撃者たちと、ちょうど反対側の方角だった。

雨風が、うねる草原を海のように見せていた。ごく細い街道はその波に晒されて、今にも消えてしまいそうだ。魔術師以外が立ち入ることもないこの街道は、それこそ魔術のように、何度となく消失と出現を繰り返してきたのかもしれない。

今、消えかかった街道にはぽっかりと大きな影が浮き上がってい た。

一台の馬車が、待機していたのだ。

開いた扉の手前で、どうやら従者らしき逞たくましい男が老女に 傘を差し掛けている。

ちょうど乗り込む寸前だったその相手に、

「一お待ちなさい」

と、鈴を震わせる麗しい声音がかかった。

美しいという言葉が意味をなくすほどに、その女は超然としていた。雨風の吹きすさぶ草原など、どう考えても見目麗しい光景ではないのに、この女性が佇むだけで一幅の絵となり、永遠に脳裏へ刻まれるだろう。一生における至上の美が定められてしまうことは、観測者にとって幸福かどうか。

はたして、馬車に乗り込もうとしていた老女も振り返った。

ロード・バリュエレータ。

本来の名は、イノライ・バリュエレータ・アトロホルム。

「ほう。白銀姫」

と、老女は満面の笑みを浮かべた。

街道の後ろから現れたのは、白銀姫とそのメイドであるレジーナだったからだ。

「どのようなご用件かな? それに、妙な物言いをされたように感じたが、歳のせいで耳が衰えたかね?」

「お待ちなさい、と言ったのです」

白銀姫は、ただ静かに繰り返した。

ぴゅう、とイノライが口笛を吹く。

「オレに命令形とは驚いた。表面上の礼儀はどうでもいいと思って るが、無駄に世間に摩擦を起こすのまで好んだ覚えはないぞ」

「あなたが……黄金姫を殺したのでしょう」

言下に、白銀姫は話の核心をついた。

おう余よも婉えん曲きょくも必要ないと、真っ直ぐに最短距離で問いかける。メイドのレジーナはそうした主をじっと見つめていた。黙って見ていることだけが、自分が主にできる支えだと言うかのようでもあった。

「ほ」

と、イノライの目が見開かれる。

「なるほど、そう来たか。面白い。確かにオレも容疑者のひとりだな。……あーあー、そうか。そうすると、黄金姫の死体検分に立ち会ったのも怪しくなってくるな。一応厚意のつもりだったんだが、あれは証拠隠滅に乗り出したかったからじゃないかと、そういう風に思っているわけだ」

「一ミあッなクたも、最初から協力していたのですね」

「いやいや」

と、男が頭を搔いた。

ライネスの前でスパイを自称していた男──ミック・グラジリエは、臆面もなくイノライの隣で従者面をしていたのである。確か呪詛科ジグマリエに所属していたはずだ。

「ちょっと外へのつなぎをとらせてはもらったけれど、犯人とか共 犯者扱いは困るな。そんな大おお袈げ裟さなことはしてねえよ」

「白々しくありませんか。この襲撃者たちを招いたのも、あなた方 では?」

「正確じゃないな」

唇の端を歪めて、イノライは注釈を加える。

老女の笑顔はいつもと変わらず、しかしそれゆえにこそ言いしれ ぬ暗いものを覗かせていた。

「ガリアスタの一族なら、オレがお披露目で滞在してるのを目ざとく見つけて声をかけてきただけだよ。――バリュエレータはこの件に介入しないよう呼びかけられはしたし、それなりの供応は受けたが、オレから働きかけたことなど何もないさ。そこのミックにしても、ガリアスタとの連絡を仲介してくれただけのことだ」

「自分が社交会に出ればそのようにガリアスタが動くと、最初から 見切っていたのではないのですか」

「おいおい。どれだけオレは有能で、あらゆる悪事に裏から糸を引いてるんだ。そんなのは陰謀論の世界だけにしてくれ。ああまあ、 魔術師の秘密結社なんてもともと陰謀論の住すみ処かか。これは失 礼」

くつくつと笑って、イノライは肩を震わせた。

傘では庇かばいきれなかった雨でショールが揺れて、老女の浮い た鎖骨も見え隠れした。

「……そもそも、仮にオレが犯人だとしてどうするつもりかね?」 と、続けて言う。

「時計塔にでも裁判を申し込むか? 到底まともに機能するとは思えんぞ。一般世界で司法が機能しているとは思えんが、魔術師の世

界はなおさらだ。だいたい、あのロード・エルメロイII世の言うことが本当なら、黄金姫は亡命までたくらんでいたんだろう。創造科バリュエの長として処分するには十分な行動だ。いくら頑張ったところで、せいぜい派閥抗争の材料がいくらか変動するだけのことだろうよ」

「ならば、私もここで殺していきなさい」

静かに、白銀姫が告げた。

隣で聞いていたミックが大きく目を剝き、メイドのレジーナはただ沈黙していた。

Г......

イノライはしばしこめかみに触れてから、口を開いた。

「……なるほど。それが君の奥の手というわけかな」

「ええ。あなたなら私を殺す程度は造作もないでしょう。ただし、その結果として言い逃れはできなくなります。ガリアスタの襲撃を招き、子飼いのイゼルマの黄金姫・白銀姫の双方を手に掛けたとあっては、ロード・バリュエレータの名声は地に堕おちるでしょう」

言って、いくらか離れた丘を白銀姫が振り返る。

はたして、そちらにふたりの人影が佇んでいることを、魔術師たちの『強化』された感覚は捉えた。

「分かるかと思いますが、マイオとイスローも見ています。あのふたりはイゼルマと関係が深いといえど、メルアステアが取り仕切る中立主義派。失礼ながら、ロード・バリュエレータといえどもみ消すようなことはできないかと」

バリュエレータが属しているのは、民主主義派だ。

つまるところは新世代ニューエイジも積極的に登用して、時計塔を革新していくべきだという一派。いかなる大物でも、これらの派閥を飛び越えて影響をもたらすことは容易ではない。……無論、三大貴族たる権勢を振るえば不可能ではないが、それは相応のリスクを抱えることにもなる。

「身体を張ったもんだ。最近のお姫様は一筋縄ではいかないな。こ んなときでなければ、オレ好みだと言ってもいいぐらいなんだが」

呆れたように、イノライが片目をつむる。

「それがお嫌なら、あの襲撃者たちを止めていただけませんか」

「おいおい。話を聞いてなかったのか? オレはあくまでガリアスタの連中に介入しないよう忠告されただけだぞ。まして、もともとが僻へき地ちから時計塔にやってきたヤツらだ。君主ロードや三大貴族の権勢に従うとも思えんな」

冷たい言いぐさというわけではなかった。淡々としてるわけでもなく、単にそういうものだろうと放り投げているだけの言葉。現代科学の恩恵を楽しむのと同様、この老女は極めて現実主義的であった。

白銀姫の肩が震えた。

怒りの感情だとすれば、しかしそれさえも美しかった。

イゼルマがつくりあげてきた『最も美しいヒト』の果てが彼女なのだとしたら、きっとその感情も心性も、美への感動を呼び覚ますようにつくられているのだろう。

「だったら……私は……」

何かの決意を、彼女が口にしようとしたときだった。

「......待......てっ」

と、叫び声があがったのだ。

白銀姫がやってきたのとは別の方向から、黒いスーツを纏った男が息を切らせ、雨を掻き分けて現れたのである。

「い、いや、できたらどちらも待ってほしいんだが」

「そこでへたれるのはどうか。我が兄よ」

ついで、心底呆れたような声が横合いから聞こえた。

澄ました顔で帽子をかぶりなおしたのは、ライネス・エルメロ

イ・アーチゾルテ。

「ロード・エルメロイII世……」

メイドのレジーナが囁いた。

ずぶ濡れになりつつ、ひいひいと息を弾ませて自分の両膝を押さえているのは、かの若き君主ロードに他ほかならないのであった。

魔術師にしてみれば、常識的な話をしよう。

一定以上の魔術師ならば、まず自身の身体への『強化』はこなせるが、これは筋力や敏びん捷しょう力りょくを著しく高めるものの、持久力を向上させるとは限らない。なぜかというと、ある種の魔術を使いながら身体を動かす以上、精神力と体力を同時に削っているようなもので、むしろ持久力についてはマイナスになることが多いのだ。

もちろん、これも技術や才能によりけりで、鼻歌交じりに『強化』をこなせるような逸材ならば持久力も上乗せされたという例も十分に存在する。

つまるところ、ここで息を切らせていること自体、君主ロード失格な凡庸ぶりのなせる業ではあった。

「......間に......合った......!」

息を切らせつつ、ロード・エルメロイII世がふたりを見上げる。 それから、片方にこう切り出した。

「逃げるつもりだったでしょう。……ロード・バリュエレータ」

「おいおい。人聞きが悪いな」

振り返った老女が、綺き麗れいに揃った歯を剝いて笑った。

「確かにイゼルマはバリュエレータの分家だが、それは無条件に庇護する相手という意味じゃない。攻め寄ってきたガリアスタにしても、これだけ派手にやってるからには、それなりの大義があるんだろう。だったら、一通り終わってから問いつめる方が有用だ」

「ええ、その通りです。あなたならそう考える」

神妙に、エルメロイII世はうなずいた。

それから、彼はイゼルマの白銀姫へと視線を向けた。

「同様に、白銀姫はそれを止めようとする。ここでロード・バリュエレータに去られたら、彼らの狼ろう藉ぜきを止める手段がなくなりますから」

Г......

沈黙した白銀姫へ、さらに彼は訊いた。

「それに、あなたはロード・バリュエレータこそが犯人だと問い詰めてらっしゃったんじゃないですか?」

「......聞いてらっしゃったんですか」

「いいえ。残念ながら、ここまで走ってくるので精一杯でしたから」

手近な丘から『強化』した視覚で馬車を見つけ、ここまで走ってきたのはいいが、それが青年の限界だったのだ。同時に聴覚まで『強化』して、こっそり話を立ち聞きするような才覚はないし、そもそも息の荒さからも分かるように、必死の思いで到着したばかりだ。

「ただ、この事件の本質に思い至っただけです」

と、口にする。

そう。この構図に気づいたのは、本当についさっきのことだ。

白銀姫が犯人だと思っている──というよりも、ロード・バリュエレータが犯人であるのが、白銀姫にとって最も都合がよいという構図。この事件がけして犯人捜しではなく、時計塔が有している派閥抗争の一側面なのだという、それだけの話。

「それに、この事件は私が預かると言ったはずです」

「おいおい」

口を挟んだのは、ミックであった。

肌黒の身体が雨に濡れることもまるで意に介してないようだっ

た。

「この期に及んでまだ探偵ごっこをやる気か? いくらなんでもそいつは無理筋ってもんじゃないのか」

老女へ傘を差し掛けたまま、ごつい顎をしゃくる。

しかし、

「……わざわざ蒸し返すからには、何らかの意義があるのだろうね。君主ロード」

と、イノライが促した。

「ええ。白銀姫同様、私もあなたに逃げられては困りますから」

「そう言われてもな。今言ったように、オレがこの地に留とどまる 理由はないぞ」

鼻を鳴らした老女を、白銀姫がヴェールの下から睨みつける。

はたして二者の中間で、エルメロイII世はきつく眉間の皺を寄せていたが、やがてこう切り出したのである。

「だったら、取引をしましょう」

「取引?」

鸚おう鵡む返がえしに言ったイノライへ、エルメロイII世は静かに訊き返す。

「要は、ロード・バリュエレータも白銀姫も、とりあえず襲撃者たちさえ止められればいいのでしょう?」

「ずいぶん簡単に言うな。仮にもイゼルマへ襲撃をかけるからには 向こうも決死の思いがあるだろう。そんじょそこらの材料で止まる とは到底思えんぞ。いやそれ以前に話を聞くとすら考えがたい」

老女の言葉は当然だ。

奇しくも離れた森でアトラム・ガリアスタが宣言したように、これはもはや戦争なのだ。一度総力戦に打って出た以上は始めるより も終わらせる方が難しい。たとえ魔術師だろうとも、人間である以 上は心理の力学には逆らいがたいのが当然だった。

「ひとつ、アイディアがあります」

疑問符を呈したイノライに、ロード・エルメロイII世はとある提案を持ちかけたのだ。

それは老女だけでなく、傍で聞いていた白銀姫とミック、さらに メイドのレジーナも唸らせるだけの、重みを備えていた。

やがて、持ちかけられたイノライが小さくうなずいた。

「なるほど。……だが、それを誰がやる? まさか君かな。ロード・エルメロイII世」

「―それなら、私がやるよ」

と、傍観していた少女が口を挟んだのだ。

イノライと白銀姫が振り返る。

そう。この場にはもうひとりいた。エルメロイ本来の後継。ただの三級講師を君主ロードの座に据えた──当時はわずか七、八歳ばかりの少女が。

「兄の提案さえ受け容いれていただけるならば、私がこの襲撃者たちを止めてみせよう。いささか力を貸してもらうけどね」

ライネス・エルメロイ・アーチゾルテが言い切ったのだ。

エルメロイII世を除く全員が顔を見合わせたところに、はたして別の声があがった。

「な、なんだ、お前ら!」

吃音がちに怒鳴ったのは、ふたり組の片割れ──マイオだった。

後ろでは、用心深くイスローも見守っている。どうやら、白銀姫がイノライに殺されたときの証言者として待機していたものが、エルメロイII世がやってきたことでの状況変化に勘づいて、慌てて丘から降りてきたらしい。これでも幼なじみである白銀姫やそのメイドを守ろうとしているものか、マイオはへっぴり腰ながら何らかの

魔術礼装を懐に隠し持っているようだった。

対して、

「ちょうど良かった」

と、エルメロイII世が唇の端をつりあげたのだ。

「君たちにもやってほしいことがある」

「相当人の悪い笑い方をしているぞ、兄よ」

ライネスの突っ込みに、こほんと青年が咳せき払ばらいする。

「実のところとは言わないが、我が兄も相当苦労してきたからな。 放っておくと、ますます根がひね曲がるぞ」

「ますますというところに、悪意を感じるのは私だけかねレディ」

「ふふふ。私はもともと悪意に満ちているのでね。いまさらそんな ことでは痛つう痒ようを感じないよ」

愉しげに、ライネスが笑みを浮かばせる。

雨の中、視線を右往左往させるマイオとイスローをよそに、はた してイノライが口を開いた。

「……ところで、君の内弟子はどうしたのかな?」

その場にグレイがいないことを、老女は指摘したのであった。

*

アトラムの唇だけがにんまりと歪んだのを、スヴィンの瞳は認識 した。

同時に、その鼻が知覚した。

(一三角で、どぎつい黄色の)

認識は、そのまま相手の魔術をつまびらかにする。

中空で、じゅっと雨粒が蒸発する。アトラムの頭上には、不可視の電撃の網が張られていたのだ。魔術使いと呼ばれたときに見せた激げっ昂こうすら、未熟な自分を追い込むための罠わなだったと、戦慄とともにスヴィンは知った。……もしも、個人の魔術師として純粋な力量を問われたならば、大したことはないと答えるだろう。原始電池の威力こそそれなりだが、エルメロイ教室のOBなら誰もがもっと術式を洗練させているはずだ。しかし、魔術のみに依存しない戦闘スキルにおいて、この男は自分の遙か上をいっていたのである。

r——э! 」

咄とっ嗟さに幻体の後ろ足を伸ばし、近くの枝に引っかける。

かすかに掠かすめた爪だけで、空中での姿勢を変えた。全身が電撃の網に搦からめ捕られるのを避けて、アトラムを切り裂くための一撃に魔力を回す。薄っぺらな電撃で防御しようと言うのならばそれごと引き裂けと、吼え猛たける。

ただ全力で、幻体の爪を振るった。

そのときだった。

凄すさまじい衝撃が、横合いから全身を打った。

幻体の半ばをもぎ取られつつ、スヴィンがかろうじて着地し、体勢を立て直す。

アトラムによるものではない。その証拠に、原始電池による電撃 網もまた散り散りにされ、驚きょう愕がくとともに褐色の肌の青年 が振り返っていたのである。

(......今の、は?!)

スヴィンが鼻を鳴らす。

風雨によって薄らいではいたものの、森のただ中にくすんだ緋ひ 色いろが浮かんでいた。

その人影が佇む一角だけは、切り取られたように静かだった。

「.....おいおい」

と、人影はこぼした。

「ちょっとお前ら、大げさな魔術を使いすぎだろう?」

どこか困ったように、女は微笑していた。

肩口に揺れた髪の色もまた、彼の鼻が知覚した通りのくすんだ緋色であることにスヴィンは気がついた。ただ、絶対にそれを口にしてはいけない気がした。

少年は知らぬことだが、今の彼女は眼鏡を外している。ひどく さっぱりしたという面持ちで、こちらを興味深げに見つめていたの である。

「……ま、さか」

彼は、その名を知っていた。

アトラムも、彼女の存在は一応知識として持たされていた。

だが、ふたりともがその出現に戦慄した。よもや、このタイミングで介入してくるとは思っていなかったからだ。

「悪いね。エルメロイ教室」

蒼崎橙子は、濡れた地面を歩みつつ、とある方角へと寄り添った。

アトラムの隣であった。そこで振り返って、時計塔の最高位──冠位グランドたる魔術師は、少年たちを相手にゆるりと微笑したのだ。

「ちょっと依頼されたものでね。私は、君たちの敵に回ることになった」

橙子の足がついと動いた。

その踵かかと.が、濡れた地面にとある文字を刻んでいたことに、 最初に気づいたのはフラットだった。

「ル・シアンくん!」

背後で、フラットの手が回る。

さきほど、魔術師の雷を反転させた介入術式。

しかし、今度はその術式が効力を発揮するより早く、大きくフラットの身体が吹き飛ばされたのだ。

「後、そっちの金髪坊主。さっきからこっちの隙を狙うのはいいが、ちょっとわざとらしすぎるぞ」

橙子の言葉に、水たまりの泥をもろにかぶったフラットが茫ぼう 然ぜんと顔を持ち上げる。

「.....な、んで?」

「気づかないわけがあるか。さっきからガリアスタの連中に連発してただろう? つまり、君は何らかの方法で魔力の流れを読んでいる。能力としてはわりとよく見るパターンだが精度は驚異的だ。術式に直接介入して反転させるなんて、まっとうな時計塔の講師なら誰も教えないだろう。相手の術式のブーメラン効果までもらって、自滅するのが落ちだからな」

ずいぶんと感心したらしく、橙子は饒じょう舌ぜつに語った。

まっとうな時計塔の講師なら、というところがポイントだったら しい。

「が、まあ、私の魔術は魔力を通した段階で、すでに終わっている のでね」

するりと、橙子の指が虚空にとある模様を描いた。

ルーン魔術。





アルギズが刻まれている。前者 はスヴィンの幻体とアトラムの電撃網を打ちょう擲ちゃくし、後者 はたった今介入しようとしたフラットを吹き飛ばした文字であっ た。

この術式の特徴として、ルーン文字を刻むのには手間がかかるが、一度刻んでしまえば魔力を通すだけの一工程シングルアクションで成立する。魔力生成から術式を構築するまでのタイムラグが限りなくゼロに近いのだ。必然、効果も限定的になるが、フラットの介入する隙もないという次第だった。

.....いや。

もちろん、一工程シングルアクションの魔術を、フラットが初めて見たわけではないのだ。それ自体は時計塔ならいくらだって見る機会がある。ルーン魔術にしたところで、蒼崎橙子本人が技術を時計塔に売り払ったという理由から、ごく基礎的な術式に限ってならフラットも行使できるぐらいにはありふれている。

問題は、この女が編んだ術式の美しさだった。

黄金姫・白銀姫をひもとくまでもなく、魔術師は術式の仕上がりを美しさによって判断する。ある種のプログラマーがコードを美しい美しくないと判断するように、女と魔術基盤のつながりかたはあまりにも理想的すぎた。

魔術に携わる者ならば、誰もが夢見るだろう。

けして魔力量が群を抜いているわけではない。時計塔の高位魔術師がそうしているように、恐るべき礼装を纏っているわけでもない。しかし、この女がゆるゆると循環させている魔力は、メビウスの輪のごとき完成された佇まいを保っていた。他人の魔力に対して敏感なフラットだからこそ、その自然な凄まじさを、誰よりも悟ってしまったのである。

ひとつの──ひょっとすると、それ以上の魔術を再生した天才の、 これが境地であると。

そこまで思考してしまえば、フラットの決断は早かった。

「うん、これってばまったく全然敵かなわないぞ! さあ逃げよう ル・シアンくん!」

「は? ふざける.....」

ぐるりと振り向いたスヴィンの目が、大きく剝かれた。

「逃げようル・シアンくん!」

「逃げようル・シアンくん!」

そう叫んでいるのは、フラットではなかった。

フラットそっくりではあったが、明らかに表情も姿勢も固定されたままの──真っ黒に染まった切り絵みたいな人形だった。

「逃げようル・シアンくん!」「逃げようル・シアンくん!」「逃 げようル・シアンくん!」「逃げようル・シアンくん!」「逃げよ うル・シアンくん!」「逃げようル・シアンくん!」「逃げよう ル・シアンくん!」「逃げようル・シアンくん!」「逃げようル・ シアンくん!」

ひたすらリピートしている様は、壊れたオルゴールのようだ。

肩をすくめて、橙子が口を開く。

「さっさと本体は逃げた後か。一回撫でただけで引き上げるとはどんな逃げ足の速さだ。……ふむ、影を転写して、自分のニセモノにしたてあげたらしいな。元ネタはどこの魔術になる? ドイツの田舎かどこかか?」

しげしげと人形を見つめ、やがてすいと美しい眉をひそめた。

「いや、そもそも既存の魔術基盤を利用してないなこれは。即興の魔術式を基盤代わりにして成立させてる。……なんだそれは。ひとつ魔術を使うたびにCPUの設計図からつくりなおすようなものだぞ。無駄なことを見当はずれな魔術で器用にやってのける類のバカか。まあ、私も人のことは言えないが」

ほとほと呆れたように、橙子はため息をつく。

魔術とは、魔力を魔術基盤に通すことによって起きる、擬似的な 超常現象である。

だが、理論上だけで言うのならば、その魔術基盤自体は即席でつくりあげてもかまわないのだ。ただしこの場合、即興でつくられる魔術基盤は、極めて多様なパラメータに左右されることとなる。土地の霊力や星の運行はもちろんのこと、一吹きの風、一握の砂、そこに居合わせた人々の雑多な思念、そのすべてを計算にいれつつ術式を構築せねばならないのである。

そして、これほどのパラメータに左右される以上、当然のことではあるが、一度成立させた術式も翌日には──場合によってはたった数秒後でさえ──意味をなさない。信仰や集合無意識によって固定されていない魔術基盤は、かように不安定なものなのだった。

「必要性はともかくとして、術式の扱いだけならその年で色位ブランド並みか。エルメロイも面白いのを飼っている」

微笑して、橙子はそっと指を動かした。

虚空に刻まれた文字は、Sに似ていた。実際そのアルファベットの源となったルーンの名はソウェル。『太陽』を意味するその文字は、たちまちフラットの残していった影人形を朝陽に打たれた霜のごとく掻き消していった。

同じルーン文字でも、書き方や環境などの違いで、大きく効果や 威力を変える。

橙子自身、かつて同じ文字を公園に敷き詰め、ひとつの土地から 夜という属性そのものを奪い去ったこともあった。当時に比べれ ば、今の自分の魔術はずいぶん雑になったものだと思う。突き詰め たところ、魔術とは執念であり、自らをそのための歯車に置き換え ることが前提である。時計塔に来ていささか磨き直したとはいえ、 何人かの旧友が生きていれば「堕落したな」とさぞ嘆息することだ ろう。

それでも、今は十分だ。

いくつかの思いを秘めたまま、彼女は少年へと尋ねる。

「さて、どうする?」

「……決まってる」

と、スヴィンは前のめりに応じた。

半実体化した幻体の後ろ足で、威勢良く濡れた土を削る。牙は大きく剝き出され、敵の喉元を狙うべく涎よだれを垂らした。

「友人の忠告には従わないのか?」

「あいつの言葉に従って逃げるぐらいなら、死んだ方がマシだ」

幻体の状態は会話に影響をもたらさないのか、牙を剝き出したま まスヴィンが言う。

「.....そういうバカもたまにいるな」

微苦笑して、橙子は肩をすくめた。

むしろ、好ましそうな視線をあてて、不意に横合いを見やった。

「先にどうぞ」

と、アトラムへ促したのだ。

言われた青年は、一瞬顔をしかめてから、女へと尋ね返した。

「.....いいのかな?」

「今回は、あんたを敵に回す必要がないんでね」

橙子の返答にほっと息をつくより早く、アトラムは振り向いて目を見張った。

さっき消されたはずのフラットの影人形が一どうやらスペアを用意していたのか、新たな場所に立ち上がって、こんなことをのたまったのだ。

『ええと橙子さんですよね? お金が欲しいなら、その褐色の人を ぶんなぐって、そっくりの人形つくって家を乗っ取った方が効率的 ですよ! みんなで幸せになれますよ!』

「っぐ.....!」

事実上名指しされたアトラムが、歯ぎしりする。

対して、橙子の方はふむと一瞬真面目に考える顔つきになってアトラムの横顔を見やってから、ふるりとかぶりを振った。

「あいにくだが、これは美意識にそぐわない。そんなつまらない人 形をつくる気にはなれないな」

Г......

いささか難しい顔になりつつも安あん堵どのため息をこぼし、アトラムが子飼いの襲撃者たちを苛いら立だたしげに蹴り飛ばした。 気付けとばかりに軽い電撃をあてて、無理矢理に覚醒させ、もとも と対たい峙じしていたバイロン卿へと振り返った。

「では、こちらは交渉続行といきましょうか。バイロン卿」

「……何を、だね」

壮年の紳士は、用心深く自らの杖を引き寄せる。

突如参戦してきたフラットやアトラムはまだしも、蒼崎橙子の能力については嫌と言うほど知っていたからだ。まして、たった今目の前で見せられた実力もあっては、迂闊な行動など取れるはずもない。

にんまりと笑ったアトラムが、悠々歩を進めようとして─

「一待て」

と、声がかかったのだ。

「僕は、あんたを通すとは言ってない」

スヴィンであった。

瞳は爛らん々らんと闘志に満ちて、その身体をなおさら大きく見せていた。幻体を駆動させる魔力は、少年の強きょう靱じんな魔術回路によって練り上げられ、びりびりと森の空気を震わせるかのようであった。

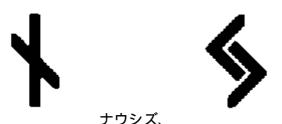
「頼もしい騎士ナイトだな。護る相手はもう少し考えた方がいいと 思うが」

と、橙子が呟く。

「……まあ、どの道これをなんとかしてからだ」

その言葉より早く、スヴィンの鼻は驚くべき事実を認識してい た。

少年の周囲、おおよそ半径十メートルほどが無数のルーン文字で埋め尽くされていたのだ。無論、この場に来てからこれほどの量のルーン文字をつくれるはずもない。起点となるべきポイントに、



イェーラ、

1

ウルズというルーン文字が刻まれていること も、スヴィンは認識していた。

(まさ、か.....!)

その文字列が、おそらく作成を意味することも。

ルーン文字にルーン文字を創らせるという境地に、蒼崎橙子は 至っていた。

身の毛がよだつほどの恐れとともに、少年は咄嗟に跳ぼうとした。獣性魔術によって人間の限界を大きく超えた肉体ならば、たとえ一工程シングルアクションであろうとも、たいていの術式の起動よりも早く飛び離れることも可能なはずだった。

「つー!」

その足が、摑まれたのだ。

気絶したはずの襲撃者が自分の足を摑んでいたのだと、すぐに認



識した。また、襲撃者の身体の上に いうルーンが描かれていたことも。

マンナズと

(マンナズ.....!)

名前だけは知っていた。

人間、ヒトガタを表すルーン。この場合はきっと人を操るための

「悪い。使えるものは使う主義でね」

橙子の声を、遠くスヴィンは聞いた。

雨中だというのに、いつのまにか女の唇には煙草たばこが挟まれ、淡い煙を吐き出していた。

「……ああ、不ま味ずいなやっぱり」

言葉よりも早く。

少年の周囲のルーンが、一斉に起爆した。

避かい逅こうの際に数十倍する衝撃によって、スヴィンの意識も また、幻体もろとも闇に吹き飛ばされたのであった。

*

(うわーうわーうわー!)

声に出そうなのを、必死にフラットは抑えていた。

森の中の悪路を走りつつ、かつ遠隔術式を懸命に維持しながらである。アトラス院の分割思考を思わせる離れ業だが、もちろんそんな能力はフラットにもなく、純粋に器用なだけの話である。橙子が看破したように、魔術師としての本質的な力量にはほとんど関係ない。しかし、こういう大道芸じみた魔術では同年代の誰にもひけをとらないのが、フラット・エスカルドスという少年の特徴ではあった。

......余談だが、そういう方向にひたすら才能を伸ばしてしまった ロード・エルメロイII世にも責任の一端はあるだろう。

走りながらも、新たに稼働した影人形を通じて、離れた橙子へと 話しかける。

『ええと橙子さんですよね? お金が欲しいなら、その褐色の人を ぶんなぐって、そっくりの人形つくって家を乗っ取った方が効率的 ですよ! みんなで幸せになれますよ!』

対して、橙子の返答も影人形を通じて伝わった。

『あいにくだが、これは美意識にそぐわない。そんなつまらない人 形をつくる気にはなれないな』

『ですよねー!』

影人形と本体で、同時に納得する。

美意識と断じられては会話のつなぎようもない。俺だってあの人の人形つくってくれなんて言われたら困るもんなあと思いつつ、しかし今のフラットは素直に肯定していられない事情もあった。

「ル・シアンくん、どうしよう.....」

至極真面目な声で、呟いた。

この少年らしからぬ弱音の混じった囁きに、はたして応えるものがあった。

『.....いやいや。そこは他人の心配をするところじゃないだろう』

「―ふえっ?!」

それは、普通に空気を震わせる声とは違っていた。

いいや、確かに振動ではあるのだが、まともに声帯を使った声音ではなかった。

『なにしろ、君も逃げ切ったわけじゃない』

猫であった。

フラットのすぐ後ろを、一匹の平べったい猫が追っているのだ。 その異様な速度もさることながら、ぎろりとこちらを見やった目に 一瞳はなかった。

すべてが漆黒に塗りつぶされ、厚みさえも感じさせない、平面の 猫。

「どわあっ!」

大声をあげたフラットが、速度をあげる。

無論、それも魔術師ならではの『強化』を施された走法であり、 灌かん木ぼくや茂みも軽々と躱かわしていくいっそ呆れるほどの身 のこなしだったのだが、薄っぺらい猫はぴたりとも離れることなく 少年を追跡してきた。

「ちょ、ちょ、ちょっと! ああもうじゃあこれで!」

何らかの呪文を唱え、フラットが振り向きざまに術式を投げつける。

威力こそ平凡たるものの、軌道と効果は千変万化。あるいは炎。 あるいは嵐。あるいは無数の針と化す。ただのひとつも同じ魔術はなく―いや、橙子が看破した通りであれば、場所が変われば同じ魔 術など使えぬのか―たてつづけの魔術が猫を爆撃した。

しかし、そのことごとくが猫を傷つけられず、森の樹木や地面にのみ爪痕を残したのである。

薄っぺらい猫はけして笑ったりしなかった。

ただ、その顔から口を消すことで笑みを表現した。

「だ、駄目かなこれってばお陀だ仏ぶつかな?!」

顔中から冷や汗を噴き出しつつ、フラットが足を動かすが、一向に差は広がらぬ。むしろ徐々に距離は詰まってくる。

「ああもう!」

今度こそと投げた術式は、これまでで最大の爆発を引き起こし、 猫だけでなくフラットの身体をも吹き飛ばしたのだ。

衝撃波に乗って、ぶわ、と空中の身体が加速した。

「とわわわわっ!」

逆らわず、フラットは軽量化の礼装を起動する。

顔や急所だけをかばい、泥だらけになりつつも無傷で着地。ごろごろと転げた身体は一気に数十メートル近くを稼いでいた。

だが、

「……あっちゃあ、これでもダメ?」

茶目っ気たっぷりの顔で振り返れば、猫はさきほどとまったく同 じ距離で鎮座していた。一切の反応を浮かべることなく、小さな怪 物としてこの暗い森に君臨していた。

いいや。

猫以外からの反応は、あった。

「……大丈夫、ですか?」

と、尋ねる声が目の前の樹木から生じたのだ。

その陰から現れた少女に、フラットが目を剝いた。

「グレイちゃん?!」

*

「グレイちゃん?!」

目を剝いたフラットを、自分はひどく不思議な心持ちで見下ろしていた。

師匠に言われて、フラットがあっちの方と指していた森へ追いかけてきたのである。

途中からは、大きな魔力の動きも感じられて、こうして落ち合う までは苦労しなかった。

だけど、このいつも太平楽でのんびりとした少年が、髪の毛まで 泥だらけに逃げ回っている状況は、自分のスイッチを切り替えるの に十分だった。

フラットを追いつめた影を、見やる。

「猫.....?」

いいや、到底そんなものとは思えなかった。

なるほど、猫という『枠』は借りているのだろう。神秘を成すに も現実とほどちかいカタチは必要だ。魔術といえどまったく無関係 なカタチで現実に干渉するのは相当に難しいと、講義していたのは 師匠だったろうか。

「イッヒヒヒ! おいおいなんだあれ! 本当に現代の魔術師の 作品かよ!」

堪えられないといった感じで、アッドが笑う。

ちょうど、今はそのアッドが必要な時であった。

「アッド!」

固フ定ッ具クを外し、フードの右肩から回転させつつ解放。すでに半ば変形しているアッドの入った『檻おり』が、さらに展開する。愚者の火ウィル・オ・ウィスプのごとき朧おぼろな燐りん光こうが、たちまち新たな形状に変化していく。

それは、誰もが知る収穫の形状。魂を刈り取るカタチ。

死神の鎌グリム・リーパー。

「あああああああっ!」

地面を蹴った。通常の魔術師の『強化』を大きく上回る跳躍力。 泥を撥はね飛ばし、狭苦しい森の中をものともせず鎌の刃が一いっ 閃せんする。

確かに、猫の身体を断ち切った。

しかし。

霊体すら切り裂くはずの死神の鎌グリム・リーパーを受けても、 薄っぺらい猫は微動だにしなかった。ふるりと雨粒でも弾くように 身を震わせたきりで、その爪を拙へ向けて切り返したのである。

後ろ宙返り気味に跳び退すさったものの、フードからはみでた前髪を数本持って行かれた。純粋な戦闘速度だけでも、この薄っぺらい猫は自分に匹敵するか、それ以上の性能スペックを持っているという証左だった。

(拙よりも.....)

その事実が、ひどく胸をついた。

半日ほど前、やはり森の中であの自動人形オートマタと戦ったときの屈辱が胸に蘇よみがえる。馬鹿馬鹿しいと思うのだけど、こうして刃を交え、自分が劣っていると見せつけられれば不思議なぐらいに何かが燃え立った。

「.....アッド」

「イヒヒヒヒヒ! おいおいお前! 妙にやる気になってないか!」

鎌から浮かび上がった眼球が、ぎょろりとこちらを見つめた。

「……師匠に、言われたから」

「それだけ聞くと涙ぐましいな!」

けたたましい笑い声とともに、自分と死神の鎌グリム・リーパーが周辺の魔力を収穫し出す。この形態での魔力集積には限度があるが、それでも魔術師の土地である。ガリアスタの天候魔術を受けた状態でも、むしろだからこそ制御しきれずに渦巻いていた魔力が、自分たちの内側へと掻き集められていく。

それらの魔力を自分の魔術回路から神経、筋肉へと張り巡らせる。

ひとつ間違えば体中の血管を破裂させかねない作業だが、幼い頃から乗り慣れた自転車のように、躊躇することなどありえない。つまるところ、自分を神秘のための歯車に置き換えることに慣れている。魔術師とは違っていても、自分もまたそういう世界の住人にほかならない。

イメージは火花。

寄り集まった火花は朧な炎となり、ぐるぐると胸の内側で回転して吼え猛る。洋の東西を問わず、彷徨う魂が鬼火やジャックランタンなどの炎に形容される理由は、まだこれといった定説がないと師匠が話していたことがあった。

自分は、燃え尽きるからではないかと思った。

自分の霊体を燃やしながら存在して、いずれは必ず燃え尽きるからではないかと。

呼吸を、落ち着ける。

神秘のためのシステムとなり果てた自分に、薄っぺらい猫がつっかけた。

その爪の鋭さは知っている。鉄パイプはおろか、爪よりも分厚い 鋼板すらたやすく断ち切るだろう。二次元そのものまで薄くなった 爪は、いかなる三次元の硬度もものともしない。アッドの神秘とし ての強度が相手を上回ってなければ、受けた鎌ごと自分も両断され ていたはずだ。

今度は、身体が無意識に動いた。

猫が爪を打ち振った方向に逆らわず回転。鎌の刃を外縁とした独こ楽まにでもなったかのように、樹木の間を縦回転する。

七回、猫を斬った。

ダメージはない。驚くことはなかった。水を切ったほどの手応え もなく、猫は健在。

だが、何度もやれというなら、何十回も繰り返そう。何十回で足りないというなら何百度でも。その程度に自分など価値がない。精神と身体の限界まですり減らすのは、前提とすら考えないほどの当然。……正直に言えば、すり減らしてしまうのが、ほんの少しだけ快かった。

しかし、

「グレイちゃん、あっち!」

突然、声がかかったのだ。

その意図を、自分よりもアッドの方が精密に捉えた。

「一グレイ!」

その叫びにひきずられるように、自分はもう一度跳んでいた。

方向や距離は、アッドと同期した身体が把握している。跳躍の頂点で、雨粒の降りしきる夜空へ死神の鎌グリム・リーパーが疾はしった。

何かが、断ち切られた。

自分の目にすら見えない―おそらくは不可視か不認識の魔術をかけられていたのだろうそれは、地に墜ちてようやく形を成した。

鳥を模した使い魔だった。身体と翼は真鍮線で形成されており、 瞳は紅玉ルビー。さらに内側では極小のフィルムのリールじみた何 かが回転しており、瞳の宝石を通して何らかの光を投射していたの だ。

その光がとぎれたとき、薄っぺらい猫も消滅したのを、自分は察 知していた。

「……映像だったんだ」

と、フラットが呟いた。

それでは切れない。

いくら霊体をも切り裂く鎌であろうとも、大気に映っただけの影は切れない理屈だ。いいや断ち切ったところで、幻灯機械が動作する限り何度でも蘇る。冠位グランドの名にふさわしい、現代離れした魔術礼装であった。

どっ、と力が抜ける。ギリギリまで神経を張りつめさせていたの を感じる。魔力を循環させていた筋繊維が、今にも悲鳴をあげそう だった。 「でも、グレイちゃん。どうして?」

「師匠から……あなたたちを迎えに行くよう言われたんです」 と、自分は答えた。

「それに、万が一、冠位グランドの魔術師と……」

「……ああ、その匣の中身は厄介だな」

r——э!」

今度は肉声だと、否いやが応でも分かった。

ぎこちなく振り返った先で、くすんだ緋色の髪は、雨に濡れても 麗しかった。

淡く、煙草の香りがした。雨に掻き消されていたせいで、その香りにもこの距離まで気づかなかったのか。女魔術師は面倒くさそうに髪の毛を掻いて、こちらを冷ややかに見つめていた。

「冠位グランドの……魔術師……」

......ああ、分かる。

だから、師匠はあんなにも苦しげな顔で自分に頼んだのだ。襲撃してきたガリアスタの集団を懸念してのことではない。そもそも、その程度であればフラットもスヴィンも切り抜けてみせるだろうと、師匠は案じてもいなかった。

だが、見落としていたある可能性に気づいた途端、煩はん悶もんした。

つまり、この女魔術師──蒼崎橙子が戦線に加わる可能性を。

「……どうして、です?」

慎重に死神の鎌グリム・リーパーを構えながら、自分は問うた。

「どうして、あなたがガリアスタに味方するんです?」

「おいおい。そんなのいちいち説明しないといけないのか? あの 君主ロードがお前を寄よ越こしたんだろう? だったら、最低限の 事情は察してると思ってたんだが」

Г......

堂々とした彼女の姿に、師匠から聞いたとある話を、自分は思い 出していた。

時計塔において、特別な術者たちには色を冠した称号が与えられる。とりわけ原色である三色はその時代最高の証あかしであり、冠位グランドに至った蒼崎橙子には、当然純粋なる青ブルーが与えられるだろうと誰もが見ていたという話。

しかし、彼女に与えられたのは原色になりきれない赤の合成色だったと。

(最高では.....ないから.....?)

なんとなく、違う気がした。

彼女ほどの魔術師を自分は知らない。派閥に属さないはぐれものだからかとも考えたが、やはり違うように思えた。その髪の色と同様、彼女の魂が赤い色をしているのではないだろうか。けして純粋にはなりきらない、だからこそ映える色を。

細く、息を吞み込む。

向き合ったまま、口を開く。

「師匠は……あなたが自分たちの妨害をするかもしれないと、そう 言ってました」

微妙なニュアンスだった。

ガリアスタの味方ではなく、こちらの妨害をすると。

「ああ、なるほど」

と、橙子も納得した。

「まあ依頼されたんだよ。お前らの敵に回ってほしいってな」

さばさばと、女魔術師が言う。

その答えを胸に刻みながら、自分は続けて訊いた。

「.....スヴィン......は?」

「ん? ああ、あの狼おおかみ坊主か」

気がついたように、橙子がうなずく。

「なんだか懐かしくなってしまって、とどめをさす気分じゃなくて ね。そのまま放置しておいた。まあ、あのガリアスタの当主がどう かしてしまってるかもしれないが、そこまでは私の責任範囲じゃな いだろう」

「.....フェ

唇を、嚙む。

仲間意識なんかじゃない。そもそも自分はエルメロイ教室に属していても魔術師じゃないし、さきほどの猫のことを考えずとも、この女魔術師が途と轍てつもない相手であることぐらいは知れる。対峙しているだけで指は震え、心臓が嫌な鼓動を訴え出す。それでも退こうとは思えなかった。

いつも、そんなときだけは退かない人の面影が、頭から離れなかった。

死神の鎌グリム・リーパーを握る手に、力がこもった。

「ああ、そいつは面白い」

橙子が、こちらの鎌を指さす。

「見るのは初めてだが、それは千年以上の神秘に属するだろう。 ひょっとすると人の手になるものでさえないな? 現代の魔術師の かなうところじゃない」

神秘はより強大な神秘に屈する。

もちろん相性や巧拙の類での逆転は大いにあるのだが、これは原

則として成立する。そして多くの場合、神秘の強大さとは古さに起 因するのだ。アッド──死神の鎌グリム・リーパーの核となった宝具 を、うっすらと橙子は見抜いているのであった。

「.....だったら、退いてくれませんか?」

と、真剣に頼んだ。

「残念だが、一応依頼なんでね。こっちの事情ではいそうですかと は言えないさ」

橙子の指が、さりげなく文字を刻んだ。

ルーン文字。その意味は分からない。分かるほど、自分は魔術師 としての勉強を真面目に積んでいない。

だけど、怖おぞ気けが走った。

自分が鎌を振るうのはほんの一呼吸。それでも橙子からの魔力が 意味を成す方が早い。一工程シングルアクションの圧倒的な速度 は、外部から物理的にどうこうできるようなものではない。

(一なら!)

ままよ、と跳んだ。

ルーンから発せられた氷の茨いばらごと、魔術は叩ききる。

どうやら自分の動きを束縛するつもりだったらしいが、神秘の階かい梯ていとしては自分とアッドの方が上。すでに臨界に達していた魔力を放射するだけで、太陽に照らされた霜のようにことごとくが消散する。

「やはりすごいな。現代の共通フサルクルーンではまるで対抗できないか。単純に力勝負をするならこれが一番効果的だ。魔術の相性を測る前により強い神秘で弱い神秘を圧倒する――ああ。以前、私も使ったことがある手だよ」

つらつらと言いながら、さらに橙子がルーンを刻む。

あるいは、炎を巻き上げ。

あるいは、不可視の衝撃を発して。

死神の鎌グリム・リーパーは、たちまちその魔力も神秘現象も断ち切っていくが、一向に橙子の顔に焦りが浮かぶ様子はない。興味深い実験結果を見守っている科学者のように、濡れた頰に淡い微笑が浮かんでいるきりだ。

「──で、次はどんなゲテモノ魔術を見せてくれるのかな? 天才くん」

視線も向けず、橙子の足がすっと動いた。

鮮やかなまでの、ノールックからのハイキックだった。背後から 忍び寄ろうとしていたフラットが、その一撃で背後の樹木までごろ ごろと吹き飛ばされ、後頭部を打ち付けて、水たまりに倒れ伏した のである。

ぱたんと気絶した少年を見やって、呆れたように橙子が漏らした。

「……いや、魔術戦前の軽い牽制のつもりだったんだが……まさかそのまま当たって気絶するとは……。おい、どれだけ能力が偏ってるんだこいつは?」

正直、同意見である。

もっとも、このあたりは自分も時計塔の授業で経験済みだった。

『強化』は単純な筋力だけではなく反射神経やバランス感覚にも効果を及ぼす。しかし、本人の経験や判断能力まで増強されるわけではないのだ。結果としてフラットの場合、身体能力は大きく向上しても格闘能力はさっぱりだったのである。具体的には、護身術の授業では毎回赤点を連発しており、師匠にとっちめられる場合もおおよそ体力に訴えられるぐらいに。

どちらにせよ、自分たちが手札をごっそり減らしたのには違いが なかった。

(もう、時間稼ぎも―)

見切られて不利になるのは、間違いなくこちら。向こうにいくつ 奥の手があるかもしれないが、こちらは後ひとつかふたつきり。そ れも、現状ではまともに出すことのかなわぬ切り札だ。ならば、唯一彼女を上回るはずの身体能力で押すしかない。

「―っちい!」

自分の足が、ぐるりと回転した。

一気に橙子を対象へと捉え、遠心力を活用しながら斜めに切り落とす。すでにアッドは周囲の魔力を必要なだけ刈り取っている。さきほどの猫のときよりも数段上──現段階の臨界まで魔力を循環させた。

手加減など一切考えぬ鎌の一撃は、しかし寸前で止まったのだ。

「――っ?!」

ルーンではない。これまでの状況から言って、ルーンであれば防御用だろうとも切り伏せられているはずだ。なのに、この異様な手応えは......

「どうも、君らも含めて、今回集まった魔術師たちは勘違いしてる な」

しみじみと、橙子は呟く。

雨音の中で、その声は低く地面を這はった。

「魔術師が最強たらんと欲するなら、自らに手を加える必要などない。ああ、それこそロード・エルメロイII世はよく知ってるんじゃないか。なにしろ、彼が前の戦争で生き残れた最大の理由だ」

こんなにも近いのに、彼女の声はひどく遠かった。

いつのまにか、橙子の右手には鞄が握られていた。

旅行用としてもいささか大きすぎる、奇妙な鞄の隙間から覗いたのは、ただ漆黒の闇であった。自分の『強化』された視覚でさえ見通せぬ、もはや個体と化した闇が、鞄の中に詰まっている。

その中に、ふたつ、ある。

「最強たるものを喚よび出すか、つくりあげればいいんだ」

鞄の中には、光る、

一ふたつの、目。

自分は凍りついていた。

鎌が止まった理由を、ようやっとのことで悟ったのだ。あれは橙子がどうこうしたんじゃない。自分が恐れたのである。この鞄の内に住まうバケモノを、自分の中の自分が悟っていた。ああ、そうだ。この鞄の形状は想起させないか。

鞄と言うには大きすぎる立方体。

たとえばそれはアッドにも似た──ある種の神話に出てくる、マモノを封印した匣と同質なのではないか。

「一蒼崎橙子。あなたは」

声は、喉の外に出てこない。

かくして隙間から伸びた何かは、触手であったろうか。死神の鎌 グリム・リーパーに絡みついたそれは、アッドですら容易に断ちが たいほどの圧力と柔軟さで、刃も柄つかも、自分の手すらも吞み込 んでいく。

純粋に生理的な恐怖が、自分の喉の奥からつきあがった。

*

不意に、森の空間から、人の身体が吹き飛ばされた。

濡れた地面に叩きつけられ、ブリティッシュスタイルのスーツを 汚したのはバイロン卿であった。

「おやおやミス・アオザキ」

と、吹き飛ばした側の青年が、髪を搔き上げる。

「アトラムか。そちらも終わったところかな?」

「ふふん。まあ、決着はついたと言って良いかと」

埃ほこりを払うように軽く手を叩いて、アトラムはバイロン卿を 見下ろす。実際、バイロン卿が優れた魔術師であるとはいえ、純粋 な戦闘能力でアトラムに敵う道理はなかった。熾し烈れつな戦いに 慣れたこの褐色の青年にしてみれば、黴かび臭い権力抗争に明け暮 れていた魔術師など、物の数ではない。

背後から、アトラムに付き従うガリアスタの部下たちも現れる。

スヴィンも、そんな襲撃者たちのひとりに捕らえられていた。部下のひとりに首を摑まれ、ボロ布のようにひきずられている。痩身であってもきちんと『強化』さえできれば、この程度の芸当はたやすい。少なくとも魔力の扱いにおいて、この部下たちもいっぱしの魔術師以上の実力を備えているのだった。

「いかがですバイロン卿? 手間がかかったが、そろそろ観念のし どころでしょう」

「……何を、観念しろと」

バイロン卿が傷口を押さえて、青年を見上げる。

「ふう。諦めが悪いのは時計塔のお歴々と同じかな。──まったく。 どいつもこいつも、頭にも黴が生えているんじゃないか?」

何にせよ、アトラムの側はもはや煮るも焼くも自由、好きなタイミングで尋問するだけ、と認識しているようだった。プライドの高い英国紳士の相手に少々辟へき易えきしたのか、改めて橙子へと話しかける。

「まあいいさ。それよりそちらだミス・アオザキ。さすがは冠位グランド。麗しい少女にも容赦がないとは。で、廃人か何かにしたのかい?」

「おいおい、そんなもった──人聞きの悪い事を言わないように。相手は愛らしい外見の少女だぞ? ちょっと霊感をジャックしただけ」

と、橙子が唇を尖とがらせた。

彼女の目の前で、鎌を握ったまま、自分は凍りついている。

実際のところ、彼女が持ち上げた鞄はぴたりと閉じられていた。 橙子は鞄を開けてなどいない。ただ、ほんの少し、その中身を匂わせただけなのだ。

「この娘こは、ちょっと霊的感受性が高すぎるらしい。霊媒によくいるパターンだな。群を抜いて優れているからこそ、ある種の場面では致命的な欠陥を露呈する。どうも、あの教室の生徒には共通するパターンなんじゃないかこれは」

「.....スヴィ.....ン.....フラット.....」

自分の喉から、名前がこぼれた。

身体は動かない。

単に震えたり萎縮したりしているのではなく、精神こころの芯から麻ま痺ひしてしまっている。迂闊に動いて鞄の中身を認識するようなことがあれば、今度こそ自壊してしまうと分かっていて、本能が防衛行動に出ているのだった。

(.....)

無力だ。

どうしようもなく、自分は無力だ。

- ― 『お前が滅ぼすべきは』
- ― 『お前は誇るべき子だ』
- ― 『だって、お前は誰よりも英雄に』

脳裏に、声がこだまする。

故郷の声。正しい人々。自分の変化を歓喜した、清らかなる両親

や縁者たち。

(.....ああ)

ああ、そうか。

委ねてしまえばいい。

どうせ、自分はこの槍のためにつくられたのだから。この槍やりが求めるままに力を振るえばいい。考える必要など最初からなかった。逃げる意味なんて最初から存在しなかったのだから、あるがままに受け容れればいい。

変わってしまえばいい。

今の自分なんかではなく、はるか昔の英雄に。

「Gray暗くて……Rave浮かれて……Crave望んで……Deprave堕落 させて……」

唇が、歌を口ずさむ。

途端、すぐそばの橙子のみならず、傍観していたはずのアトラム とバイロン卿までが猛然と振り向いたのだ。

ごっそり、と周囲の大マ源ナが喰われたのである。

「そうか」

橙子が、小さくうなずく。

「それが、お前の隠していた秘密か?」

「Grave刻んで.....me私に.....」

囁きは、俯うつむいたままの唇から発せられていた。自分の意識 は死に絶えている。とっくの昔に絶滅してしまっている。だから、 これは自分の声ではない。もっと別の──自分の奥に潜んでいた、も うひとりの自分。

自分の故郷がつくりあげた、もうひとつの怪物だ。

ぐら、と何かが震えた。

「む。それはうまくないぞ? こいつが興味を示しかねない」

大きな鞄を持ったまま、橙子が苦笑を滲ませる。彼女自身にとってすら、その中の対象が制御可能な代物ではないのだと告白するかのように、鞄は徐々に震えだしていた。

じい、と音がする。

鞄が、ひとりでにその口を開いたのだ。今度こそ妄想ではなく、 現実に起こった風景であった。

「ミス・アオザキ」

かすかな戦慄がこもったアトラムの言葉に反応してか、それとも 独り言か、橙子は低く呟いた。

「一場合によってはこの一帯は消し飛ぶか」

それは、鞄の中身によってか。

あるいは。

「Grave墓を掘ろう.....for youあなたに.....」

魔力が巡り出す。

自分の体内とアッドの間とで、ある種の契約に則った循環が開始 される。環境が構築される。肉も骨も魔力によって生まれ変わり、 かつてとある英霊が持っていた幻想種の因子すら仮想構築される。

ちら、と橙子の目が横合いを向いた。

「おい、余計なことをするなよ」

「これが放置できることか!」

叫んだアトラムの手に、小さな壺が載っていた。魔力と電力とが配合され、その指先で小規模に圧縮された稲妻となり──ああ、そうした敵性をも自分の身体と槍は判断して、魔力の脈動を響かせる。

唇が、動く。

禍まが々まがしい呪いのように、その言葉を紡ぐ。

「聖槍、抜─」

刹那。

別の、声がしたのだ。

「.....その人を見よEcce homo」

やはり、身体は動かなかった。

しかし、その場の全員が、彼女を視みた。

その術式は、三人によるものだった。

三位一体の要に、とある魔眼の少女がいる。

「ライネス。魔眼を、絞り込め」

師の声とともに、少女の意識は術式を収束させる。彼女の魔眼がすぐ熱を持つ理由を、時計塔では脳と魔術回路の未成熟さゆえと断じられていた。つまるところ、脳と魔術回路の処理が魔眼に追いついておらず、過剰反応を起こしているのだと。

だが、今は感謝すべきなのだろう。

その過剰反応ゆえに、彼女の魔術の精密さは指折りだったのだから。

織り手のイスローが触れるたび、それのドレスが再構築される。

薬師のマイオが念じるたび、それの内側から各種作用物質の血中 濃度や神経伝達物質がいじられ、生まれ変わっていく。

そして、最もそれが適合した瞬間、少女は術式を起動し、高く呼ばわった。



「……その人を見よEcce homo」

――時が止まった。

座標が意味を失った。

あらゆる時空連続体が、その整然たる緊密さを奪われたかに見えた。

居並ぶ魔術師たちの意識だけではなく、森にすまう小動物や昆虫、いいや生物ならざる土塊や水滴にまで影響をもたらす精髄。進化が環境に対する最適な適応を意味するならば、それは世界を絶滅させかねないほどに、形状と数字として終点であった。

■しいのだと、そんな言語など頭にはのぼらなかった。

人の許された不完全な言語など、その実在の前にはただ虚むなしいだけだと、分かってしまっていた。かつて封印指定されたとある魔術師は、一切の誤ご謬びゅうなく、生物無生物の区別すらなく、世界そのものに言い聞かせる統一言語マスター・オブ・バベルを修得していたと言うが、彼女の■は同様に根源へと連なる域に達していた。

亡くなったはずの黄金姫が、森のただ中に佇んでいたのであった。

Г	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	L		
Γ				•					•				•					•				•			J		

絶句、などではなかった。

たった今まで戦闘に駆り立てられていた──極限の命のやりとりに 魂までも研ぎ澄ませていた魔術師たちが、ひとり残らずその凄まじ さに打たれて立ち尽くしたのだ。

それだけではない。

「アッド……が……」

と、自分は手元を見つめる。

死神の鎌グリム・リーパーは、真の姿である『槍』を露わにする どころか、鳥かごに似た檻の中の、小さな匣へと逆戻りしていたの である。

「こちらも引っ込めさせられたか」

やれやれと、橙子が片目をつむる。

彼女の手にしていた鞄もまた、口を閉じていた。

「なんだ、今のは……」

さらに、アトラムが放とうとしていた雷はおろか、夜空を埋め尽くしていた暗雲までもが一帯にわたって流れ去っていた。数十人がかりで仕掛けていた天候魔術さえも、あたかも薄紙が破れたかのごとく、たやすく雲散霧消したのだった。

あるべきものを、あるべき場所へ。

絶対の■が現れたとき、完成度に劣り、不自然なる魔術はすべて

無に帰した。かつて海を割り、エジプトから何千人という人々を脱出させた聖者の奇蹟にすら匹敵しうる出来事であった。

同時に、つい昨日起きた出来事の再現でもあった。

わずか数秒ほどで、さきほどの奇蹟は終わっていた。

そこに佇んでいるのは殺された黄金姫にあらず、白銀姫その人であったのだ。

「……なるほど、投影か」

と、橙子が呟いた。

本来は魔術の儀式などに際し、どうしても用意できなかったオリジナルの鏡像を、ほんの数分ほど魔力で物質化させる――それだけの魔術だ。高度で大量の魔力を食われるわりに意味の薄い術式として、魔術師たちにもあまり顧みられないものだった。

しかし、今だけは。

隣から現れた師匠が小さくうなずき、口を開いた。

「ご明察です。白銀姫の顔かんばせに、お披露目での黄金姫を投影 しました。──私の弟子、ライネスが」

「ふん。術式を構築したのが君で、儀式のお膳立てがメルアステア 派のふたりでは、威張るわけにもいかないがね」

ライネスが、目を押さえたまま唇を歪める。

背後にはマイオとイスローも居て、いずれも大魔術を成功させた 直後ゆえの、憔しょう悴すいした顔をしていた。通常であれば、イ ゼルマがありとあらゆる魔道の果てにつくりあげた黄金姫を投影す ることなど、いかなる魔術師であろうと不可能だ。

しかし、双子であり、同じ術式を生まれる以前から受けてきた白 銀姫を介するのであれば、そうした術式もたまさか可能になったと いうこと。無論、ライネスの魔眼と極めて精密性の高い魔術、さら には長く黄金姫と白銀姫を内と外から装ってきたマイオとイスロー の助力がなければ、到底かなわない仕儀だったろう。

奥歯を軋らせ、アトラムが挑みかかるように口を開く。

「それがどうしたのかね。つかのまあっと言わせた程度で、僕らを 止めたとでも?」

「強がりはやめとけ」

苦笑した橙子が、ひらひらと手を振る。

「魔術は現実世界を変革できるという確信と、相応の集中から成り立っている。今は瞼まぶたを閉じるだけであの顔がちらつくぞ。まあ二、三時間がところは、私も開位コーズレベルの魔術しか使える気がしないね」

至極正直に、自分の状態を橙子が告白した。聞きようによっては 致命的とすら思える内容なのに、この女が口にすると何の力みもな く、ただすとんと納得できた。

そして、自分は……ただ、身体が重かった。

「……師匠」

ぐら、と前のめりに倒れかかったところで、抱き寄せられるのを 感じた。

葉巻臭いコートの肌触りが、ひどく安心した。

「すまなかった。......時間を稼いでほしいと言ったが、やはり無理があったな。本当にすまない」

耳元で、師匠の謝罪が聞こえた。

「私も覚悟をしてきた。君の行動に応えよう」

片手で拙の身体を支えたまま、女へと視線を向けたのだ。

「ミス蒼崎」

と、話しかける。

「ふむ。確かに毒気は抜かれたが、どうするつもりだね」

「毒気を抜かれたなら、交渉の余地はあるでしょう」

きっぱりと言って、こう続けた。

「……それに、今ので分かったんじゃないですか」

「(など,.....7

しばし、橙子が押し黙る。

「もしかしてと思っていたが、そういうことか? 君の今のパフォーマンスは私に対する回答を兼ねていたわけかね」

「おそらく、あなたが想像された通りかと」

師匠がうなずいた。

意味は分からない。師匠が分かったかと問いかけた内容も、橙子がそういうことかと受けた理由も、自分には皆目見当もつかなかった。自分と同じ言葉を使いながら、このふたりは互いにのみ通じる特別な言語で話しているかのようだった。

それでも、双方に何らかの得心が行ったことだけは理解できた。

「同時に、これは私の憶測ですが、あなたが依頼主から約束された 報酬は──」

「──ああ。君が言いたい通りなら、意味を喪失するな。というか、 私が騙された格好になる。いや、この場合相手が嘘をついたわけ じゃないのだから、私が早合点しただけか」

やれやれと橙子が肩をすくめる。

なにがしか思うところがあったのか、妙に女の口振りは弾んでいた。まるで、鑑賞していた映画か何かに清すが々すがしく騙されたとでもいうような、そんな表情であった。

さらに、師匠が視線を移す。

「アトラム・ガリアスタで、間違いないかな」

「何かな、君主ロード」

褐色の肌の青年は、いかにも億おっ劫くうそうに返す。君主ロードという言葉面から窺うかがえるような敬意は微塵もない。

気にした風もなく、師匠が問うた。

「私の弟子を返してもらえないか?」

「は? 何様のつもりだい? こいつらは僕を殺そうとしたんだよ。いくら君主ロードだからって、そんな相手を無理に許させるような権限があるとでも?」

スヴィンは襲撃者たちに確保され、気絶したままのフラットも同じアトラムの部下に囲まれていた。彼らの大部分はいまだ黄金姫の投影に放心したままだったが、だからといって力ずくで取り返せるほど甘くもないだろう。

「あなたが求めているものを、私は知っている」

「.....別に隠しているわけではないからね。まして、君なら当然に 分かるだろう?」

強がるみたいに、青年が歯を剝き出す。

橙子とは印象が違ったが、こちらも師匠に対して、どこかしら奇妙な感情を露わにしていた。師匠と会うのは初めてのはずなのに、細い細い一点で通じ合ってるかのような──対抗し合ってるかのような、不思議な距離感だった。

一呼吸おいて、師匠が口を開く。

「先月、イゼルマとあなたがオークションで争い合ったのは、とある英霊の聖遺物だ」

「つー!」

その言葉に、思わず自分が息を止めた。

思い出したのだ。この双貌塔へ自分を誘った直後、ライネスは師 匠へこんなことを言っていた。

- ──『ほら、第五次聖杯戦争の協会枠について、まだ諦めてないん だろう?』
- ― 『一応、もう一枠あるようだが、これがなんともきな臭い。抜ばっ擢てきされた魔術師が、新参者に金を積まれて譲り渡しそうだとか』

新参者というのが、まさにアトラム・ガリアスタのことだとしたら。

ならば、聖遺物を求めるのは当然だ。聖杯戦争とは魔術師たちが 英霊を喚びだして戦わせる極東の大儀式だというが、目的の英霊を 召喚するためにはその英霊ゆかりの聖遺物が必須なのだ。たとえ ば、聖剣にゆかりの英霊であれば、その聖剣の鞘さやが聖遺物とな る……といったように。

「だから……なんだね?」

苛立たしげに、アトラムが舌打ちする。

対して、師匠はゆっくりと答えたのである。

「私の推測通りなら、バイロン卿を脅しても無駄だよ。彼も現在の 聖遺物のありかは知らないはずだ」

「何—?」

アトラムが、辛つらそうに樹木へもたれかかったバイロン卿をちらりと見やる。

バイロン卿は答えなかった。否定もしなかった。

代わりに、師匠は言葉を続けた。

「私なら、その聖遺物のありかを教えられる」

「ははあ。だから、弟子には手を出さず、君のくだらない推理とやらをありがたく拝聴せよとでも? 言っておくが、今の僕の戦力なら君や弟子たちを縊くびり殺すことなど造作もない。今この場で無理矢理聞かせてもらってもいいんだぞ」

「それだけの価値は約束しよう」

敵意を隠しもしない口調に、師匠はまっすぐうなずく。

「──それに、もしも私の推測が外れていた場合、あなたが狙っていた以上の宝ほう物もつも譲り渡そう」

「**は**?」

一瞬きょとんと瞬きしてから、アトラムはくくく、といかにもおかしそうに笑い出したのだ。

「何を言ってるんだね君主ロード。エルメロイの懐は十分に理解できているつもりだ。あれ以上のものを君たちが用意できるはずないだろう。──いや、まさか」

まさか、と語尾が淀よどんだ。

師匠の言った意味とその先の可能性を、ようやっと彼も理解したのだ。いいや、彼だけじゃない。その意味は自分にだってあまりにも重すぎた。想像しただけで心臓が潰れるのではないかと思われるほど、絶望的でさえあった。

「師匠!」

しかし、自分の声など聞こえもしなかったように、師匠は義妹へ と視線を向けた。

「.....ライネス。いいな?」

「好きにしろ。少なくとも、今のあれはエルメロイじゃなくて君個 人のものだ 」

今の投影で精も根も尽き果てたのか、顔色も真っ青にして、少女がため息をついた。

そして、師匠はこう続けたのだ。

「エルメロイの、君主ロードとして誓う」

さらに一拍をおいて、堂々と宣言したのである。

「私の持つ聖遺物を、今の約束に賭けよう」

師匠の持つ聖遺物。

「まさか、それは第四次聖杯戦争の……」

アトラムが、大きく目を見張った。

その視界の中で、師匠はことさらゆっくりシガーケースを取り出した。マッチの炎を擦り付けるようにして炙あぶり、口元へと運ぶ。一連の魔術儀式のような行為の後、彼は決然と告げた。

「実戦証明済みコンバットプルーブン。私が第四次聖杯戦争で生き 残った理由──かの大英雄を喚びだした聖遺物を賭けようと、そう 言ってるんだ」

誰もが押し黙った。

永遠かと思われた沈黙は、しかし自分のそれにだけ喉が干上がらんばかりの恐怖を滲ませていた。師匠と過ごしたほんの数ヶ月でも、第四次聖杯戦争の戦いと記憶こそが彼の人格を形成していることだけは分かった。それらの記憶と戦いの中心に、師匠が喚びだした英霊との時間があることも知っていた。

紫煙の香りの中、褐色の青年の顔から、綻びるような笑みが浮かんだ。

「一いやはや。金にならない弟子がそんなに大切とはね」

呟きには心からの嘆息と、奇妙な好意.....のようなものが含まれていた。彼が師匠のどこに好ましいものを感じたのかは分からない。

アトラム・ガリアスタは楽しげに長い髪を梳すいて、

「だが、私も他人の信念に口を挟むほど野暮じゃない。なにより、 交渉により良い対価を払おうとする覚悟を無下にはできない。最大 の厚情をもってその願いを受けようじゃないか、ロード・エルメロ イII世」 仲の良い友人に詐欺めいた商談を持ちかけるように、尊大に微ほ ほ笑えんだのであった。

★ 第三章 ★



―美しいとは、どういうことか。

双貌塔へと向かう前、似たことをライネスは師匠に訊いていた。

単純に、人間が快さを認識するカタチだとしたら、あのときの黄金姫は異なるモノだったように思う。あれは自分たちの認識を遠く超えたモノで、快とか不快とかに置き換えるのは到底不可能だったからだ。至極単純に、自分たちの器からありとあらゆる感情が溢れ出しているだけで、それをとどめることも味わうこともかなわなかった。あの橙子さえもが手出しできないという風に苦笑していたほどに、再現された黄金姫のカタチは超越の域にあった。

ひょっとしたら、それは地獄に似ている。

天国ではない。少なくとも教会の神父たちが話す通りであれば、 それはもっと穏やかで人々を包み込むもののはずだ。理解不能で衝撃的で衝動的で破壊的でいっそ殺人的な在り方となれば、やはり似ているのは地獄だろう。魔術師なんて最初から神様に背を向けて、地獄行きを志しているような人々だけど、しかし現世に地獄を構築するとなれば話は変わってくる。そんなモノをつくりだせるとなれば、見方は変わってくる。死んだ後に知るはずの概念を、生きたまま知ってしまえるならば、ほとんどの宗教も思想も意味を失ってしまう。

どのように生きるかとは、どのように死ぬかと同義だ。天国も地獄もその果てにあれかしと夢想したゴールに過ぎない。人の身では受け容れきれない快楽と苦痛を、人の身でなくなった後に味わえるのだからそれまで精一杯あがけばいいのだと、声高に訴えるための設定だ。この概念を読み書きできぬ人々にも広めるため、さまざまな宗教で芸術が発展し、天国も地獄も色鮮やかに描かれることとなった。何千何万という人々の手によって細やかに描写され、同時にそれらの描写がすべて真実にはほど遠いのだと注釈を加えられる矛盾。いくら美しいものを描けど、美しさそのものには到達しない芸術と、その矛盾はさぞ相性が良かっただろう。

ほんの少し開かれた窓から、無知なる信者は想像するのみ。最も幸せなる天国を、絶望的に苛烈なる地獄を、我らはただただ思い描けばよい。脳という檻の中でのみ自由な夢を見られる機能は、人間に最初に与えられた罪であり罰であるのだから。

なのに。

ああ、後になっても、これだけは疑問に思うのだ。

まかり間違えて真実こんげんに至ってしまったなら──はたして地 獄そのものになりはてた黄金姫は、いかなる想いを抱いていたのだ ろう、と。

*

「―大した魔法だな」

自分たちが月の塔のロビーへ到着すると、ロード・バリュエレータ―イノライは長椅子に座ったまま、ウィスキーグラスを持ち上げてみせた。どうやら一杯やっていたらしい。師匠の交渉が成功するかどうか分からない以上、どちらに転んでもかまわないよう、この月の塔で待機していたということだった。

洒しゃ脱だつなシャンデリアが、玲れい瓏ろうとした光を魔術師 たちへと投げかけている。

その下で、師匠は薄く眉間に皺を寄せた。

「魔術師が魔法なんておいそれと口にするものではないでしょう」

「いやいや、今のお前がやったのはまさしく魔法だよ。魔術なんて 現実改変手段じゃなくて、ある種の不可能を可能にしたという意味 でね」

くるくると皺だらけの人差し指を回して、老女は残った琥こ珀は く色いろの液体を飲み干す。 机に乾いた音をたてて、背後のソファに座った褐色の青年へと目を細めた。

「ガリアスタの坊主も、まさかこんな方法で丸め込まれるとは思ってなかっただろう?」

「そこは否定しませんよ。目先の利益に飛びついてしまった。ま あ、あんな馬鹿げたギャンブルをする君主ロードが時計塔にいると は聞いていなかったので面を食らった、というのもありますが」

褐色の青年──アトラムが嫌味混じりに返す。

実際、その気持ちは自分も同じだった。まさか、師匠があの聖遺物を賭け事に持ち出すなんて想像もしなかったのだ。動揺は二時間ほどが経過してもおさまらず、あれやこれやと師匠とライネスが指示する準備を手伝いつつも、足下がふわふわと落ち着かなかった。

「私としては、あれほどの眼福があれば、ひとまず満足ではあるが ね」

眼鏡を外したままの橙子が、淡く微笑する。

師匠は、ゆるりと視線を横合いに動かした。

「白銀姫様も投影された身体は問題ありませんか?」

「はい……。厳密に言えば、私の身体はただのきっかけですから」 小さく、白銀姫がうなずく。

投影は、エーテル体によって仮初めの実体をつくりあげる魔術だ。白銀姫の身体の上に、ごく薄いヴェールのようなものを重ねたといってもよい。白銀姫が黄金姫に近しいほど魔術の成功率は高まるが、白銀姫自体に何らかの影響を及ぼすわけではない。そういう意味では、科学的にも触媒カタリストの定義に適かなっていただろう。

メイドのレジーナがそんな白銀姫に寄り添い、マイオとイスロー は不審そうに師匠を見つめていた。

ガリアスタの襲撃を止めるという一点で、師匠と彼らの目的は一致したが、一旦それが終わった以上、関係性も元に戻るのが道理

だった。

つまり、黄金姫およびそのメイドの連続殺人事件における、探偵 と容疑者。

「……ひとまず、君の発言までは認めよう」

とバイロン卿も口を開いた。

こちらも不服はあれど、迂闊に否定すれば再びアトラムたちを敵に回すことになる……という理由から、ひとまず師匠の行動を受け容れていた。

ロビーには、事件に関わった人物が勢揃いしていた。

イノライと、ミック・グラジリエ。

アトラム・ガリアスタ。

白銀姫。

レジーナ。

マイオとイスロー。

バイロン卿。

蒼崎燈子。

そして、師匠とライネスと自分の、合計十二人だ。フラットとスヴィンは一時間ほどしたところで意識を取り戻し、師匠の言葉に従って、今は席を外していた。

さらに、ガリアスタの襲撃者たちから選ばれた数人も、遠巻きに 見守っている。塔の外には残された人員も待機しており、内部で波 乱があれば躊躇なく突入してくるだろう。

「……で、ロード・エルメロイII世。全員集まれば、ご自慢の推理を聞かせてくれると豪語していたね?」

「推理とは言ってませんよ。推測です。なにしろ理ことわりはない」

細々と、師匠が相変わらずどうでもよさそうな注釈をつける。

もっとも、本人にとっては重要なことなのだろう。しばしば口にしている魔術師の関わった事件での鉄則──誰フがーやダっニたッかト、どハうウやダっニたッかトに意味はなく、信じられるのは何ホ故ワそイうダしニたッかトのみ、というのとセットなのかもしれない。

(.....でも)

と、思う。

もしも解決できなければ、師匠が失うものは甚大どころではない。エルメロイの権力など師匠にしてみればどうでもよいものだろうが、今回提示した聖遺物だけは別だった。いいや、そもそも襲撃してきたガリアスタを考えれば、ここで必要とされているのは単純な事件解決などではありえないのだ。

いつものように苦々しい表情で天井を見上げ、師匠は視線を双貌 塔の主へと向けた。

「先にバイロン卿、お願いしていたことを」

「.....ああ」

と、バイロン卿が渋々うなずき、指を鳴らした。

それが合図だったらしく、従者の持ってきた箱から、封印の魔法 円がほんの一ヶ所ナイフで削られる。すると、内側からにゅるりと 出てきた水銀がメイドの形を取ったのである。

「トリム」

ライネスの顔がほっとゆるんだのを、自分も認識していた。彼女にしてみれば、この数年離れたことのなかった相棒なのだろう。

たとえば、それは──自分にとってのアッドと同じように。

「だが、余計な行動をとればすぐさま戻してもらうぞ」

「ああ。精々見張っているがいいよ。集中力もおおよそは回復した ころだろう?」 トリムマウの頭からつま先までチェックしつつ、ライネスが切り 返す。

「―それで準備も終わりかな?」

椅子に座ったアトラムは、悠々と腕を組み合わせていた。

複雑に利害と情念の絡み合ったこの場で、唯一自分は傍観者であり、略奪者であり、失うものなど何も持たないという余裕が、笑みにも表れていた。

「いえ、もうふたり」

と、師匠は入り口を振り向いた。

五う月る蠅さい足音とともに、ロビーの扉が開いたのだ。

「到着っ!」

「すいません。失礼します」

「---フラット、スヴィン」

ふたり組の片方。癖っ毛の少年が抱いていたモノに、自分は一瞬息を止めた。

大事そうに抱き上げられ、毛布をかけられているのはメイドのカリーナの死体だったからだ。

「.....姉さん.....」

レジーナの声が、ロビーに切なく響いた。

そのままスヴィンは死体を床に横たえ、そばに師匠がしゃがみ込む。

ルーペやらペンライトやら、いくつかの器具を取り出して検分を始めた。その姿は魔術師などというよりも、警察の鑑識の方がよほど似合いそうだった。そういえば、シャーロック・ホームズは探偵としての名声同様、当時の最先端科学捜査で知られていたのだったか、とよけいな思考も頭をよぎった。

魔術師としてはあまりにも無様な姿に、周囲はひそひそと囁きを

交わしていたが、今更師匠がかまうわけもなく眠りについたかのごとき死者の顔に触れている。集中のあまりに垂れる汗を自分が何度か拭いたのだが、そのことにさえ気づかぬようだった。

しばらくして、

「やはり」

と、小さく呟いた。喘ぜい鳴めいにも似た声だった。

「鼓膜が剝離されている。意図的に聴覚を奪った跡だ。徹底的にやるなら、まあそうなるだろうな。本人も言ってたように、魔術によって補助できる環境なら、ほぼ問題にならないのだろうし」

師匠の述懐は、カリーナを殺した犯人の所行と、周囲には聞こえただろう。

しかし、自分はとある事実を思い出していた。ライネスの部屋に やってきたときの、黄金姫の告白。遺伝的な問題で聴覚を失ってる のだという話。

眉を寄せ、織り手のイスローが尋ねる。

「……それは……どういう意味……なんだい……?」

「ああ」

ゆっくりと立ち上がる。

もう一度胃のあたりを軽くなでてから、師匠は深く息を吸った。

「では、結論からいこう」

カリーナの死体を前に、堂々と口にしたのである。

「彼女が、黄金姫だよ」

しん、と沈黙が落ちた。

魔術でもかけられたかのような――切の音が世界から突然失われたにも等しい沈黙であった。

たまに、師匠は教室の講義でもこういうことをやる。

地に足が着いてるどころか、足の裏に根っこでも生えてるような 性質なのに、ごく希まれに飛躍しすぎた結論を口にして、生徒たち 全員が呆あっ気けにとられる展開。そんな状況でもフラットが能天 気にはしゃぎ、たいていスヴィンが押しとどめようとした結果さら なる悲劇と混乱を招くことになるのだが、今回はいささか様子が 違っていた。

ぱくぱくと口を開いて、自称スパイ──ミック・グラジリエが師匠 へ問いかけた。

「.....おいおい、何を言ってるんだ?」

「言葉の通りだよ。私は参加していないが、今回のイゼルマの社交 会でお披露目された黄金姫は彼女だ」

おかしくなったのではないか、とは誰も言わなかった。

そんな風に評するにも、師匠の言葉は度を超えていた。

確かに、彼女は黄金姫にずっと付き添っていたメイドである。しかし、黄金姫そのものであるなどと、一体どのような思考から導き出されるのだろうか。

代表して、アトラムが尋ねる。

「……さっきの、ビックリ箱みたいな投影かい? だが、あれはもともと黄金姫と酷似している白銀姫があってのことじゃないのかな」

その通りだ。

白銀姫というふたつとない触媒をもとに、ライネス、マイオ、イスローの魔術師が総掛かりで、ようやっとほんの数秒だけ成立した

幻が、あの黄金姫だ。同じことを、これだけつくりの違うメイドを もとにやっても成功しないし、お披露目の時間は長くないとはい え、数秒そこらというわけではなかった。

小さく、師匠は首を縦に振った。

「もちろん、方法は違います。というよりも、そこがずっと分からなかった。そもそも、黄金姫を完成させるのにだってあまりに時期がよくなかったからです。......フラット」

「はいはーい。書きあがってまーす」

手をあげたフラットが、とある図面を持ち上げる。

それを見たライネスが、ふっとトリムマウの腕に息を吹きかけた。魔力の込められた吐息によって水銀メイドの腕が掻き消え、薄ぼんやりとした霧が周囲を覆う。やがて、きらきらと周囲の光を取り込んだ靄もやは、描かれた図面を空中に再現したのである。

ホロスコープ。

太陽と月が合わないとか、延々と悩んでいた天体図。ひとつひとつの惑星と軌道が空中に次々と現れ、そこからいくつもの平面図に置き換えられる。必ずしも地動説――惑星本来の軌道と一致していないのは、これが科学ではなく、あくまで魔術としての観測に必要な資料だからだ。

「ここのお歴々なら、現在の時期のホロスコープなど頭に入ってる でしょうが」

と前置きしてから、師匠が続ける。

「陽の塔と月の塔。黄金姫と白銀姫。イゼルマの術式は徹底的に太陽と月の術式から成り立っている。しかし、イゼルマがガリアスタと競い合った呪体を使って、黄金姫を完成させたのならば、どうしても時期が合わなかった。呪体を手に入れたのはせいぜいーヶ月前で、太陽と月の折り合いがよい時期は数ヶ月以上前に過ぎ去っているからです」

師匠の指が、空中のホロスコープの太陽と月を指さす。

最初の図面ではふたつの星が同じ位置にあり、もうひとつの図面

では向かい合っていた。

「最上は真昼の日食。太陽と月が同じ座に位置するコンジャクション。次善で太陽と月が向かい合うオポジションに、造形を司る土星を百トニラ十イ度ンの位置に配することですが、どちらも季節柄一致しない」

「お前.....」

バイロン卿の顔色はもはや憤怒を通り越して、青黒く染まってい た。

今、師匠がやっていることはイゼルマの術式を丁寧に解体しているのと同じだ。しかし、迂闊に抗弁すれば、自分から秘奥を暴露することとなる。ガリアスタの暴挙を止めるためとはいえ、師匠の発言を認めた以上これは甘受するしかない苦行だった。

「ですが、そもそも別のものを太陽に見立てるのなら、問題なかった」

「ほう。別のもの、というのは?」

興味津々なのか、身を乗り出してアトラムは質問する。

師匠は至極丁寧に言葉を添えた。

「ええ。魔術においては、しばしばほかの惑星が太陽に見立てられます。とりわけ金星は太陽によく見立てられる。全天で最も明るい惑星であるためでしょう。この理由から、極東では金神と言われて恐れられ、聖書では天より堕ちたルシファーだとも言われた。曙の明星。宵の明星。さらに金星はヴィーナスの星でもあり、ルーツを辿ればメソポタミアのイシュタルにも関連する。今回のように美の精髄たる魔術に応用するなら、最良の見立てだったとも言えるでしょう」

「ロード・エルメロイII世」

麗うららかな声が、師匠の名を呼んだ。

白銀姫であった。ひんやりとした月の塔のロビーで、彼女はヴェールの内側から静かに尋ねた。

「呪体と見立てのお話がどう関連するかは分かりませんが、では私たちが見たディアドラ姉様──黄金姫の死体はなんだったのですか。 今もお姉様の部屋でそのままとなっているはずですが」

腐敗や劣化を防止するための最低限の魔術はかけられているが、 現場保存として黄金姫の死体はほぼそのままになっている。

問われた師匠は、平然と答えたのだった。

「もちろん、あれは本物の黄金姫ですよ。ただしお披露目に出てき た黄金姫じゃない」

r.....? 1

自分も、首を傾げてしまった。

ますます意味が分からなくなる。師匠の言っていることは皆目その全貌を露わにしない。ひとつずつ手がかりを渡されても、自分の頭ではそのパズルを組み立てられない。

だが、自分のように巡りが悪い者だけでもありえなかった。

「なるほどなるほど」

と、愉しげにイノライが唇を歪めたのだ。

新たに注ついだウィスキーグラスを、ゆるりと口元に傾ける。

師匠と同じく──師匠とは大きく異なる真正の君主ロードは、おおよその事情を了解したとばかりに、酒臭い笑みを浮かべていた。

「道理でやたらに切り刻まれていたわけだ。まあ逆の立場ならオレ でもそうするな」

「おそらくは、そういうことかと」

丁寧にうなずき、師匠はこう続けたのだ。

「本物の黄金姫は社交会よりずっと前に死んでいたんですよ。あの 死体は保存していたものを、お披露目の後で部屋にばらまいただけ のものだ」

「な、何を言ってるんだ!」

バイロン卿が叫び、至極冷ややかに師匠は答えた。

「今更、隠し立てされることもないでしょうバイロン卿。だいたいガリアスタが介入した段階で隠し通せるものでもない。科学的な鑑識でなくても、時計塔の専門の魔術師が見れば、少なくとも死亡時刻の折り合いがつかないぐらいのことは明らかにされます」

「……っ、お前が、この場で証明できるわけじゃあるまい」

絶句したバイロン卿が、なお食い下がる。

「だったら、これ以上くだらない妄想で、我らの名誉を毀損される のは御免被る」

「でしたら、証言をお願いしましょうか」

言って、師匠はぐるりと振り向いた。

居並ぶ魔術師たちのひとり。その中でも最も目立つ──煙草をくわえた、くすんだ赤毛の女性を指さしたのだ。

「おやおや。私に? どういうことかな?」

面白そうに、橙子が一歩前へでる。

大理石の床が硬い音を立てて、師匠は足下の死体を丁寧に触れた。

「彼女を見ていただきたい」

「ふむ。今の君の話なら、お披露目に出ていた黄金姫が彼女だということかな?」

確かめるように、橙子が訊く。

師匠は小さくうなずいて答えた。

「ええ。あのお披露目の黄金姫こそ彼女です。あなたが整形手術を 施したメイドのカリーナですよ。蒼崎橙子」 しん、と沈黙が落ちた。

言葉の意味をはかりそこねていたのかもしれない。

整形。黄金姫にせよ白銀姫にせよ、いくつもの世代にわたり、心身を切り刻むような施術を受けることでこれほどの美を獲得したのだと、頭では分かっている。だが、それが整形という言葉に置き換えられたとき、形容しがたい衝撃を自分たちは覚えていたのだ。

「これはこれは」

と、橙子がいかにも愉しそうに微笑した。

「私が整形手術して黄金姫にした? 光栄かつ残念だがまったく記憶にないぞ。確かにわりと忘れっぽい方なんだが、アルツハイマーでも疑わないといけないかな」

人差し指の先で、自分のこめかみをノックする。

師匠は半歩下がって、カリーナの死体の手前を空けた。

「まずは、見ていただければ」

「では遠慮なく」

橙子がしゃがみこみ、死体の頰の線や耳の裏を探りはじめたのである。

「……ああ。確かに最低限だが施術の跡があるな。魔術による整形なら、術式によるが手術跡も間接的なものだけですむ。治療用の魔術を用意しておけば糸で縫う必要もない。普通に生活する分にはまず見つかるまいさ」

師匠のような器具は必要としなかった。それこそ望遠鏡などの光 学部品を研磨し、わずかーミクロンの誤差さえ見抜くという職人じ みた動きで、細い指が死体の何ヶ所かをなぞったきりであった。

しばしの間をおいて、彼女は断言したのだ。

「あー、いろいろごめん。これ、間違いなく私の仕事だ」

その発言に、一同がどよめいた。

ますます難しい顔になって、橙子が口を開く。

「だが、なぜ私はそんな大事なことを忘れていた?」

「忘れていたんじゃないでしょう」

言下に、師匠が告げる。

「単に、覚えていなかったんですよ」

「.....ほう?」

橙子の眉根が寄った。意味が分からないというのではなく、思い 当たりに至った、というような。

ついで、師匠はもうひとりの人物へ振り向いた。

「マイオさん」

と、今度は薬師の方に呼びかけたのだ。

「は、は、はい」

「最初にライネスたちとお会いした場で、酔い薬を使っていたそうですね」

黄金姫・白銀姫のお披露目だった。

あのとき、貴族主義と民主主義の魔術師同士で険悪な雰囲気になっていたため、泥酔した体ていのマイオが間に入り込んで、無理矢理解散させたのだった。実のところ、その泥酔ぶりは酔い薬を使ったものであり、続けて酔よい醒ざましの薬を服用することで、たちまちマイオが平静を取り戻したところまで自分たちは確認していた。

「……え、ええ」

認めたマイオに、続けて師匠は言葉の刃を振り落とした。

「.....だったら、あなたには記憶させないための薬がつくれるんじゃないですか?」

深酒のあげく記憶がないという経験は、魔術師でなくても覚えがあるだろう。人間は何かを認識した際、ついさっき体験したことを保存するための短期記憶から、おおよそ半日から一ヶ月ほど保存するための中期記憶へと移行させていくのだが、アルコール類はこのための伝達物質の働きを鈍らせ、脳に定着するのを阻害する。記憶のシステムはけして科学だけのものではなく、魔術においても重大な意味を持つからと、師匠が現ノ代ー魔リ術ッ科ジの講座で語っていた内容だった。

師匠が今言ったのは、それを人為的に引き起こす術式だったのである。

あるいは短期記憶から中期記憶だけでなく、中期記憶から長期記 憶への移行を阻害する薬物も、彼なら作り得たかもしれない。記憶 させたくない分野を、何かのキーワードなどで限定することも。

興味深げに、橙子が顔を持ち上げた。

「ふむ。私が気づかずにその記憶阻害の薬を飲んだと?」

「いいえ。あなたがそれほど迂闊とは思っていません。しかし、そうした薬の服用がもともと依頼の条件に含まれていたならば、場合によっては引き受けるんじゃないですか」

「なるほど。それなら依頼の面白さによるな」

師匠の問いかけを、女魔術師は肯定した。

面白さによる、と。

時計塔の真の最高位たる冠位グランドが惹ひかれるほどであれば、と。

そして、師匠はさらに言葉を紡ぐ。

「なぜ、整形を依頼したか?」

人差し指をあげた。

「なぜ、蒼崎橙子の記憶を阻害したか?」

中指もあげる。

あがった二本の指をつまみ、ひどい理不尽に堪えているかのよう に眉間の皺を寄せて、話す。

「別に込み入った話じゃない。黄金姫が死んだなどという情報を外に出せるはずがないからだ。それぐらいなら、どれだけ報酬を積んでも彼女の再生を望むだろう。──たとえば、偽物をつくるという方法でも」

バイロン卿は、もはや抗弁しなかった。

アトラムやミックといった熟練の魔術師たちも、ただ師匠の話に 聞き入っていた。

スーツの懐のシガーケースから、師匠が途中で仕舞っていた葉巻 を取り出す。マッチの火でゆっくり炙ると、葉巻はぼんやりと赤く 灯ともった。

「そして、どのような術式を使ったかも、ほぼ明示されています」

咥くわえた葉巻が、紫煙とともにじりじりと燃えていく。炭化していくその先端を見ながら、師匠はぽつりと呟いた。

「おそらくは、これでしょう」

「っは!」

突然、橙子が笑い出した。

師匠の言葉がさもおかしくてたまらないと言うかのように、この 女性が自分の腹部まで押さえて愉快そうに声をあげたのである。

「はは、ははは! はははははははは! そうか灰かぶりか! なるほどな、そんな単純な話だったのか」

「ええ、分かってみれば単純なことでした」

師匠がうなずく。

自分には、まるで分からない。

ただ、灰かぶりとは確かシンデレラのことだったはずだ。前に師 匠が呟いていたペローとかバジーレはその作者の名前ではなかった ろうか。いくつも異話があるシンデレラだが、とりわけ有名なのが グリム兄弟と、シャルル・ペロー、そしてイタリアのバジーレによ るものだった。

いや。

(.....灰?)

その言葉を、どこかで聞いたことはなかったか。

「バイロン・バリュエレータ・イゼルマ、アトラム・ガリアスタ」

と、師匠が水を向けた。

いまだ橙子の笑いの意味が分からず、怪け訝げんそうなふたり に、こう話しかけたのである。

「さきほども話しましたが、もう一度訊きましょう。あなたがたが オークションで争った呪体について、もう少し詳しく話してもかま いませんね?」

「好きにすればよかろう」

「……必要なら」

バイロン卿は泰然と、アトラムは吐き捨てるように答えた。

その返事を受け取ってから、師匠は口にした。

「争われた呪体は、菩ぼ提だい樹じゅの葉」

欧州の菩提樹は神聖な象徴として知られ、聖母マリア信仰や多くの聖人に結びついている。町の中心となる教会や裁判所にもよく植えられ、それ自体が薬効を持つことから、魔術師や錬金術師の間ではひそかに使われてきた植物でもあった。

「ただし、こちらはとある英霊にまつわる、竜の血を受けた菩提樹 の葉です」 全員が、硬直する。

誰もが、その伝説を思い浮かべたからだ。たとえ魔術師ならずと も北欧における大英雄の勲いさおしを知らぬものなど皆無だろう。 宝剣バルムンクをもって悪竜ファヴニールを打ち倒し、いかなる武 具も爪そう牙がも傷つけられぬ不死の身体となった騎士。

その名はジークフリート。

麗しき『ニーベルンゲンの歌』に登場する、英雄の中の英雄。彼が竜の血を浴びたとき、その背中には一枚の菩提樹の葉が張りついて、彼の不死性を損ねるたったひとつの急所をつくったという。たった今師匠が口にした呪体とは、まさにその伝説の秘宝であった。

「.....待った」

と、アトラムがやにわに立ち上がった。

かすかだが、声音のよどみが露わとなっている。師匠の話の流れから、やっと隠されていた事実に気がついたらしかった。

「何か? やはり呪体の話は問題が?」

「違う。さっき灰かぶりと言わなかったか。まさか、それは」

「……ああ。仮にも竜りゅう血けつを受けたなら、菩提樹の葉も普通の手段では朽ちぬようになっていたでしょう。それをわざわざ普通じゃない手段で燃やして、使い捨ての灰にしてしまった魔術師がいます」

今度の沈黙は、まったく性質が異なっていた。

たとえば、貴重な宝物を打ち砕く蛮行を思えば近いだろうか。けしてその価値を知らぬわけではない―むしろ、専門家の中でもなお特別な権威が、自ら世界の宝とも言うべき品を率先して燃やし尽くす絵図だった。

ほとんど窒息しそうな顔で、アトラムが橙子を見つめた。

彼だけではない。

からん、と硬質の音が部屋にこだました。

茫然と目を剝いたまま、バイロン卿が杖を取り落とした音であった。

「ま、さか……ミス・アオザキ。いくらあなたでもそんな……」

アトラムが窒息ならば、こちらは懇願するような顔つきだった。 目の前で、一生を捧げた芸術を打ち砕かれた者ならば、こんな表情 をするかもしれない。

「いや、私ならやるな」

対して、平然と橙子が言ったのだ。

「そうか。竜りゅう血けつを受けた菩提樹の葉で、灰かぶりシンデレラの術式か。最高の相性じゃないか。ジークフリートの逸話は、ひとりの人間が不死になったというよりも、不死の英雄として生まれ変わらせたという側面が強い。灰かぶりシンデレラに至ってはなおさらだ。もとより化粧も着飾ることも魔術に違いない。そこから整形手術へ一歩進める段において、英雄への生まれ変わりを担った菩提樹の葉なんて、完璧すぎる呪体だ。どうして私は覚えてないのかと頭を切り刻みたくなってくるぞ」

そこまで言って、また笑いがこみあげてきたらしく、口元を押さ えて肩を揺らす。

居並ぶ魔術師たちは―ライネスやあのフラットさえもが茫然としていた。魔術師としてはいささか規格外な在り方の彼らでさえ、橙子の行動は破天荒に過ぎたのだ。本式の魔術師に比べれば門外漢と言ってよい自分でも、衝撃は免れがたかった。たとえば、生まれながらに持たされている匣のように、自分たちは過去に縛りつけられ、過去に盲従するのが当然だと教えられてきたのだから。

師匠は、いつもと変わらず葉巻の煙をくゆらせていた。

答えを予想していたからか。

あるいは、もっと別の理由だろうか。

「どう……して……」

はたして、バイロン卿も大きな音をたてて唾を飲み込み、橙子へ と振り返った。

「どうしてだ! ミス・アオザキ! あなたが報酬として要求したから取り寄せた品だ! それをどうして私の依頼に! それではあまりにも!」

「ああ、そうだったのか。それは貴重なものをありがとう」

切々とした訴えに、橙子はただのんびりと肩をすくめた。

「私は忘れているけど、君主ロードの推測が正しいならその時の私の考えはよく分かるよ。面白そうな依頼を受けた。けれど雇い主の用意した資金と材料では仕上げのランクが落ちるのは明白だった。だから自分の報酬を使って、自分にとって満足のいく仕事にした。ほら。すごく合理的だろ?」

「ば──誰もそこまでの仕も事のにしろとは言っていない! はじめから、あの夜を乗り越えられるだけで十分だと.....!」

「いやあ、そこは諦めて。ほら。私、そういう性格だから」

華のような、心底からの笑顔でバイロン卿に謝罪する蒼崎橙子。

Г......

苦笑しているロード・バリュエレータを除いて、ほぼ全員が絶句 していた。

魔術師として彼女が言っていることは、けして間違えてはいない。

さらなる魔術の深淵へ手を伸ばそうとするその意志を、否定できる魔術師などいるはずもない。しかし、間違えてないというだけで、そのような蛮行に出られる者がどれだけいるだろう。少なくともこの部屋に佇んだ幾人もの魔術師たちにとってすら、彼女が理解不能の怪物に見えていることは疑う余地がなかった。

そして、この場でもうひとりだけ衝撃にとらわれぬ魔術師が、言葉を添えたのだ。

「これによって、さきほど話した見立てが成立します」

と、師匠が付け加えた。

さきほど金星を太陽に見立てると言っていた。

だが、それは単に言葉遊びのようなものではなかった。かほどに 貴重な呪体を費やし、冠位グランドの魔術師が自ら施術に乗り出す ほどの大儀式によって成り立つ見立て。

「黄金姫を美しくするための術式ならば、天体の時期は合一しなかった。しかし、別の女性を黄金姫につくりかえるための術式ならば一金星を太陽に見立てるのならば、魔術は成立する。太陽と月ならば、それぞれが向かい合うオポジション衝、さらに造形を司る土星の位置が百トニラ十イ度ンになければならない。しかし、太陽を金星に見立てる場合は話が別だ。見立てるといっても金星が惑星であることは変わらない。つまり、月と金星と土星がそれぞれ百トニラ十イ度ンの位置にあればいい」

エルメロイ||世が想定していた星の配置 太陽と月が一直線に向かい合う 月と土星が百二十度 実際に術式が使われたタイミングの星の配置

金星、

土星が三分

師匠が指と葉巻を振ると、ライネスの手が動き、空中に浮かんでいた天体図がぐるりと回転した。

先に見せていたホロスコープから、いくらか星々の位置が動いた 図だった。

そのホロスコープに、何人かの魔術師たちがああ、と声をあげた。

百トニラ十イ度ン。師匠の言った場所に、ぴたりと月と金星と土 星が収まっていたからだ。

「実際の時期は、おおよそーヶ月ほど前。イゼルマが呪体を手に入れたオークションの時期と一致します」

冷厳と、師匠が告げる。

順序は逆なのだろう。その時期だからこそ、依頼された橙子が菩提樹の葉という呪体を要請したはずだ。魔術師たちにとって、師匠の言葉を裏付ける何よりの証拠として、中空のホロスコープは輝いていた。

「おいおい。本当にあの黄金姫はそこのメイドだったってのか よ......」

呻いたミックが、まじまじとロビーの床に横たえられたカリーナを見つめる。

それから、新たな疑問を師匠にぶつけたのだ。

「じゃあ、黄金姫のお披露目のとき、カリーナがいたのはどうなる? それに、黄金姫の死体が見つかったときだって―」

「お披露目の際なら、バルコニーまでの距離があった上、黄金姫と白銀姫を紹介しただけだろう。人造生命ホムンクルスでもからくり人形でもすむ話だ。なんなら魔術抜きで、背格好の似た従者に同じ服を着せただけでも大した問題にはなるまい。お披露目の際にメイドが片方しかいないんじゃ怪しまれるから、バイロン卿も努力は惜しまなかったはずだ」

Г......

自分は、ライネスとともにこの塔へやってきたときのことを思い出していた。

あの際の馬車の御者は、到着とともにどろりと溶けた。それが人造生命ホムンクルスによるものか、もっと別の魔術によるものかは分からないが、遠目にメイドを演じるぐらいは造作もないだろう。

「そして、黄金姫の死体が見つかったときのことなら、もっと簡単だ。もともと、この術式じゃ効果的であっても長持ちはしない。何 しろ灰かぶりシンデレラだからな」

物語によれば、灰かぶりシンデレラにかかった魔術は一夜で解けた。

十二時に魔術は解けて、残るものはガラスの靴が片方だけ──細部 は作者や地方によって異なるが、おおよその流れは変わらない。

「ペローにせよバジーレにせよ、グリム兄弟にせよ、結果は同じ。 主人公にかけられた魔術はパーティの直後に解けるんだ。おそらく は、本物の黄金姫の死体をばらまき、あの部屋の魔術錠ミスティッ ク・ロックをかけた後に、蒼崎橙子の術式も解けたのだろう。あ あ、冠位グランドの魔術師による整形手術が魔力の波長にまで徹底 していたのか、そもそも部屋の鍵がカリーナ用に入れ替えられてい たのかはどちらでもいいだろう」

「魔術が……解ける……」

とある事実を、自分は思い返していた。

お披露目では、一瞬見ただけで呼吸も何もかも忘れたほどの、黄金姫の美貌。

しかし、後に訪ねてきたときには、凄まじい美しさだとは思いながら、自分もライネスも普通に応対することができた。それは二度目だから自分も彼女も慣れたのだと思っていたが、真実はまったく違っていたとしたら?

黄金姫に変じたメイド──カリーナにかけられた魔術が、すでに解けかけていたからだとしたら?

いいや、それだけじゃない。

あのときは、黄金姫にカリーナが付き添っていたはずだ。

だとすれば、あれはカリーナじゃなく、双子のメイドのレジーナが─-

(.....なんて)

なんて多くのものを、自分たちは見過ごしていたのだろう。

師匠が現れるのを待つまでもなく、もっとできることはあったはずだ。ライネスも同じことを考えていたのか、形のよい唇をきゅっと嚙んでいた。

「……少し、いいかな?」

必死にかぶりを振るバイロン卿の横合いから、ウィスキーグラスが持ち上がった。

イノライだった。

「整形だというならば、あくまでもとの黄金姫をなぞることが目的だろう。だが、オレの馬鹿弟子が整形したという偽の黄金姫は本物以上の域に達していた。あれはなぜだ? 馬鹿弟子の腕か? 使った呪体のためか?」

「蒼崎橙子と呪体の影響もあるでしょう」

と、師匠は発言の一部を認める。

「ですが、それ以上の理由が存在します。魔術における美の効用 を、あなたなら十分ご存じのはずです。美しいものを見た人間は美 しくなる、と」

その話は、ライネスからも聞いたことがあった。

美術とは一種の共感呪術であり、鑑賞することで観測者の魂や霊性が浄化される感覚こそが、美しさの正体だと。もしも究極の美なるものが存在するならば、それは観測者自身を高次元に引き上げてしまうかもしれないと。

「これが魔術における美の一端です。黄金姫と白銀姫は互いを補い 合い、高め合う美として設計されていたのでしょう。相補性の美と もいうのですけどね。──しかし、黄金姫自身は自分の顔を見られない。白銀姫も同様です。仮に鏡に映したところで、その段階で彼女らの美は損なわれてしまう」

師匠の言葉は、葉巻の煙と同様に、ゆるゆるとロビーに流れてい く。

「……だからね、この術式を使うのなら、一定段階から三人目が必要だったんですよ」

「な.....っ!」

呻いたバイロン卿が、たたらを踏んで後ずさった。

ああ、黄金姫は言っていた。

──『しかし、父のやり方は現状非効率的です。いいえ、父のやり方が効率的だった段階が終わってしまったのです』

あれが方便ではなく、真実を語っていたならば──イゼルマの魔術 自体に欠陥があり、停滞の理由だったとしたら、師匠がここまで見 抜けるのも当然だったろう。

(.....だって、それは、師匠の)

他人の術式を見抜き、その在るべき姿を指摘する手際こそは、まさしくロード・エルメロイII世を時計塔に冠たる講師となさしめた能力だった。

「......」、ふふん」

得意げに、スヴィンが鼻を鳴らす。

どうだ、これが僕の先生だ、と誇らしげに語る声が聞こえるよう だ。

「もちろん、カリーナさんを整形すると決めた際、バイロン卿にはそんな意図はなかったでしょう。彼はただ黄金姫の喪失に焦り、そ

の穴を埋めるために必死になっただけだ」

対する師匠は、不機嫌そうな表情を一切変えない。こんな言葉を吐き続けなければならないこと自体が苦痛で仕方ないらしかった。

「それでも、三人目がやってきたことで、術式は成立してしまった。もともと黄金姫と白銀姫をずっと見ていた者──メイドのカリーナが、同様の美を手に入れたことによって、それ以上の段階へと至ってしまった」

三位一体。

キリスト教において神と子と聖霊が一体であることをあらわす概念だが、同時にそれだけのものではない。平面上においては三つ以上の点をつなげることで、初めてカタチが現れるからだ。

象徴がふたつの面を持つならば、対となって安定する。

三つの面を持つならば、それぞれが影響し合い、ある種のエネル ギーを循環させる。

黄金姫と白銀姫という一対で安定していたはずの術式は、そのふたりに匹敵する―しかし、そのふたりを観てきたことによって内側に変化を帯びつつあったカリーナが参入したことで、決定的な変化を余儀なくされたのだ。

あるいは、本来の黄金姫が失われたことも、そのことに拍車をかけたのかもしれない。

安定していたはずの術式の欠落は、傾斜とともに膨大なエネルギーを生み出す。位置エネルギーと同様に、これらの傾斜は魔術にも影響をもたらした。黄金姫に化けたカリーナに、本来の黄金姫以上の絶対的な■を与えたのだ。

それは、冠位グランドである蒼崎橙子ですら圧倒するほどの―。

「一待ってください、先生」

と、スヴィンが手をあげた。

まるでここが時計塔の教室であるかのように、意気揚々と。

「今のお話でしたら、白銀姫もまた新しい黄金姫の誕生によって、 究極の美に至るのではないでしょうか」

「それは簡単だ」

と、師匠が視線を移す。

白銀姫を向いて、問うたのだ。

「......エステラさんは、目が見えないんじゃないですか」

「……どうして、です?」

白銀姫の声は、低く床を這った。

「黄金姫は耳が聞こえなかったそうです。おそらくは感覚のひとつを閉じることによって魔術に磨きをかけるという、よくあるパターンのやつでしょう。五感のいずれかが閉鎖させられるのが遺伝形質に刻まれるほど、イゼルマの術式は完成してしまっている。蒼崎橙子の整形手術でも、これにならってカリーナさんから鼓膜を奪ったぐらいに。ああ、黄金姫の部屋に鏡がなかったのも、あなたの部屋に合わせたせいでしょう。あなた方は食事や睡眠などの生活レベルで対にされていたし、鏡の有無は魔術的な意味が大きすぎる。どちらかに合わせるなら、有るよりも無い方がよほど楽だ」

葉巻を、外した。

ギリ、と歯ぎしりする音が聞こえた。行き詰まった──息詰まった 魔術の在り方など、魔術師にとっては当たり前のことだ。いくら息 苦しかろうが、ほかに生き抜ける場所などないのだから、後悔など あるわけがない。

それでも、きっとこの師匠にとっては我慢ならないのだろう。

十二人だけの君主ロードでありながら、いまだにそんな生き方を 受け容れていないのだろう。

「もちろん魔術によって日常生活に支障はないようにしてるはずです。たとえばコウモリのような音響測定を利用する魔術など、いくらでもやり方はある。……しかし、根本的に見えないことに違いはない。黄金姫と同様の美の循環に、彼女は入れなかった」

黄金姫に整形されたカリーナを、白銀姫は見ることがかなわなかった。

見ることができない以上、魔術としての循環も彼女までは届かなかった。

「ただ……この結果を、施術したミス蒼崎が予想してなかったとは 思えませんが」

「ふむ。覚えてないが、まあ想像はしてたんじゃないかな」

名指しされた橙子が、軽く目を細める。

「──ちなみに、私にエルメロイ教室の排除を依頼したのは、そこの レジーナだよ」

と、指さしたのだ。

メイドは、もはや狼ろう狽ばいはしなかった。

師匠が推理を展開していく段階で、覚悟を決めていたのだろう。 両手をエプロンの前に重ねたまま、彼女は毅き然ぜんと前を向いて いた。

「持ちかけたのは、黄金姫の美貌の正体を教えるから、だった。いやなるほど、こういうことだったか。うん。嘘はついてない。君は教えられるだろう。単に、その正体が私の手によるものだって言わなかっただけだ。ただ、それなら私も依頼主の正体を秘匿しておくほどの義理はないな」

至極当然、と橙子はうなずく。

全員の視線が、今はレジーナに集中していた。

「じゃあ、君が──」

ライネスが、口を開く。

「君が、私に黄金姫殺害をなすりつけた犯人か?」

Г......

ライネスの問いに、メイドは何ら反論しようとはしなかった。

その隣に立つ白銀姫もまた、重く口をつぐんだままだった。バイロン卿もこの事態は予想していなかったのか、さきほどの呪体の件で疲れ切ったのか、しょぼしょぼと皺のできた目を動かすきりであった。

「どうした?」

ライネスが、もう一度問う。

「黄金姫と一緒に私の部屋に訪ねてきたカリーナも、君のなりすましだったはずだ。反論するにせよ、開き直るにせよ、せめて一言ぐらい発してみてはいかがかな。ああ、なんなら主人の方でもかまわないんだが」

やはり、メイドは喋しゃべらない。

懍りんとした風情で、あのライネスになぶられても、その表情に 変化はなかった。

ふん、とアトラムが顔を歪める。

「ご聡明なロード・エルメロイII世なら、そこもすでに推察できてるのでは?」

「何もかも、私から話すべきだと」

「当然だ。事件を預かるとか大言壮語したのは君だ。だったら、根 ほり葉ほり血管から内臓まですべてをまき散らすのが探偵の義務と いうものじゃないのか?」

狙っていた呪体がすでに消えていたことがよほどの屈辱だったのか、アトラム・ガリアスタはここぞとばかりに舌鋒を鋭くする。

嫌みったらしい台詞に、師匠は眉間の皺を寄せていた。

まるで事件に光をあてることが、自らに対する罰であるかのように、ただ葉巻を吸っていた。香りのきつい煙を纏いながら、ゆっくりと口を開く。

「……本物の黄金姫が死んだのは、研究の副作用によるものでしょう。行き詰まっていたイゼルマの術式はすでに被験者の遺伝的形質も蝕むしばんでいた。そこで無理を重ねれば、どこかで死に至るのはある種の必然といっていい」

黄金姫が話していたように、イゼルマの術式はすでに破綻していた。

その結果が死だとして、今更何の不思議があるだろう。

「しかし、そこでバイロン卿は止まらなかった。少なくともあのお 披露目が終わるまでは。黄金姫だったディアドラは死んだが、新た に蒼崎橙子を招き、そして黄金姫として整形されたカリーナは想像 以上の成功を収めてしまった。この結果、白銀姫とそれに仕えるレ ジーナはとある決意を固めたのでしょう」

「つまり……白銀姫も……いずれ死ぬから……と?」

これは、織り手のイスローが訥とつ々とつと尋ねたのだ。

対して、師匠はふるりと首を横に振った。

「いいや。それよりもっと切実な問題がある。あのお披露目で、多くの魔術師たちが思ったはずだ。あれなら、ひょっとすると根源に至れるかもしれないと。そんな可能性が魔術協会の耳に入ったなら?」

「あ.....」

と、自分はつい声をあげてしまった。

似た話をつい最近聞いたことがあったからだ。

微苦笑して、橙子が口を開いた。

「……封印指定か」

と、囁いたのだ。

後にも先にも現れない、一代限りと認められた魔術師のなれの果て。

その対象は、生きながらに保存される。魔術師として最大級の栄 誉。だからこそバイロン卿が悩むはずはない。だからこそエステラ が断れるはずがない。

「厳密に言えば、黄金姫と白銀姫は魔術師ではないのだから、封印 指定とはならないかもしれません。そもそも、イゼルマの研究だか ら一代限りというわけじゃない。だけど、時計塔が根源への可能性 を示したものを放っておかないことだけは間違いない」

「──だから、逃げ出す前に、黄金姫の死体を暴露する必要があったわけだ。ふむ、そうすると、死体暴露の後には白銀姫とメイドで逃げ出すつもりだったかな」

橙子が、うなずいた。

すでに、その可能性は摘まれたのだと告知しなければならなかったのだろう。

お披露目の評判が蔓まん延えんして時計塔が検証に乗り出してしまう前に、イゼルマの研究は頓とん挫ざしてしまっていると、明らかにする必要があった。

「おそらくはね。ライネスに濡れ衣をきせたのも、理由は同じだったんでしょう。ほかの派閥の──できれば対立している貴族主義派閥でなるべく有名な魔術師を引き込めば、イゼルマやバリュエレータだけで話を終わらせられなくなる。この点でライネスならば申し分ない」

「……誰かさんのおかげで、時計塔ならそこそこの知名度はあるね」

ライネスが皮肉げに視線を送る。師匠への嫌みをたっぷりと乗せ つつも、アトラムのそれとはずいぶん性質が違うように思えた。

それから、師匠へと言葉を返す。

「つまり、黄金姫が亡命を希望したのも、まったくの嘘ではなかっ

たとぃ

「おそらく、本気で考えはしたんだろう。ただ、そこに賭けるほど ライネスを信じられなかった」

それはそうだ。

まともに話したこともない魔術師に身を預けるなど、正気の沙汰ではない。それこそライネス自身も持ちかけられたときから疑念を抱いていたではないか。魔術師の倫理や常識など期待できない以上、それは考えはしても絶対に打てない一手だったはずだ。

結果、発想自体は打ち捨てられず、この迂遠な暴露へと変じた。

ライネスと自分を、黄金姫の死体に導くための撒まき餌え。

「だいたい、バイロン卿は黄金姫の死体を見たときから、これが本物の黄金姫だということは分かっていたはずです。なにしろ、本当の黄金姫をバラバラに解剖したのはほかならぬあなただったはずですからね。ああ、解剖した理由なんてことさら強調する必要もないでしょう。魔術師なら、次につなげるために検体からあらゆるデータを取りにいくのは当然です」

Г......

重く、バイロン卿は口を閉ざしたままだった。

周囲の魔術師たちも、今更それを非難するようなそぶりはなかった。彼らもまた魔術師としての倫理と常識にたっぷり浸かった人間には違いなかった。

「その上で、バイロン卿は誰が犯人かには迷っていたでしょう。あの段階なら、さまざまな可能性がありえた。それこそバリュエレータ派の中だって足の引っ張り合いはあるはずだ。少なくとも、彼の視点では、動機はほぼ全員にありえた」

派閥抗争。

その派閥の中でさえ争い合う魔術師たち。

師匠やライネスが、昔からずっと戦っている世界。

「だけど、二回目の事件は性質が違う」

不意に、語感が変わった。

「......師匠?」

「一度目の事件は、結局のところ黄金姫の死を暴露するための狂言だ。本来、その混乱の間に白銀姫たちは逃げてなければならない。 カリーナの死なんてまるで必要がない」

「......それは、どういうことでしょう?」

「確かに、殺人事件はあったんだよ。ひとつはバイロン卿による本物の黄金姫の過失致死。そしてもうひとつ、カリーナを殺したのは 一」

そこで、言葉が止まった。

唾を飲み込む音さえ大きく響きそうな静寂。

ついに、レジーナと白銀姫がかすかに揺らぎ、

「一君だ」

と、師匠の指が動いた。

その先にいる者は、たったひとりしかいなかった。

中立主義派。伝承科ブリシサン。青白い顔色の若者。

薬師のマイオ・ブリシサン・クライネルスが、大きく目を見開い ていた。 ロビーの中央で、マイオはただ茫然とかぶりを振った。

ぺたん、と床に尻餅をついて、師匠から遠ざかろうとしつつかぶりを振る。

「そ、んな……ぼ、僕が……」

「もう少し、詳しく話そうか」

冷ややかに、師匠が尋ねた。

やはり、その声音はどこか自罰的なように思えた。

「フラット」

「はーい!」

待ってましたとばかりにぴしゃんと手を挙げて、無邪気な少年が とある衣装とバッグを持ち出したのだ。

「教授の言ってたとおり、あの泉の近くに隠してました!」

黄金姫の衣装と、トラベルバッグであった。

そのふたつで、自分にもなんとなく理解できてしまった。魔術が解けた後の着替えを、カリーナはあの泉でしていたのだ。そして、バイロン卿から逃げるための準備もその泉の近くに隠していたのだろう。

「いくつかのジークフリートの伝承でも、彼が竜の血を洗い流したり、死を迎えた場所は泉だったとされる。そういう魔術的意味もあったのだろうし……ああ、難しいことじゃない。十中八九そうだろうと思っていたが、君が犯人だと確信したのは本当にたった今だ」

犯人が誰かフーダニットに、意味がないと師匠は言った。

どうやって犯罪を行ったかハウダニットにも、やはり意味がないと師匠は言った。

魔術師のかかわる事件においては、どちらもいともたやすく隠蔽 される。トリックなど自由自在。壁ぬけだろうが密室だろうが気の 向くまま。凶器なんて呪いひとつで終了する。

しかし、どうして犯罪に至ったかホワイダニットだけは、ささや かだが例外たりうると。

「レジーナさんと白銀姫が庇うのは、君とイスローさんぐらいのものだろう」

静かに、師匠が囁いた。

その言葉に、初めて白銀姫とレジーナが揺らいだのだ。

「そして、イスローさんでない理由は、トリムマウだ。冠位グランドである蒼崎橙子やロード・バリュエレータならば、トリムマウを機能停止させることもできるかもしれない。ひょっとすると、アトラム・ガリアスタも」

「……ひょっとするとは、余計だが」

アトラムが舌打ちする。

もっとも、それ以上の発言をしないあたり、目の前で水銀メイドとホロスコープになっている魔術礼装に干渉できるかどうか、本人も自信はないのだろう。

「しかし、君たちは織り手と薬師として特化しすぎている。トリムマウを撃退するのならともかく、機能停止させるのは内部の魔術式の構成を見抜く必要がある。ああ、私の弟子のフラットはそういう魔術を得意としているが、なかなかどうして難しい。少なくとも私なんかにかなう魔術じゃない。君の場合、偶然ではあるにせよ、社交会で入念にトリムマウを調べていたのが功を奏したんだろう。そういう意味では、その社交会では私の義妹いもうとにも隙があったわけだが」

「……敵地で緊張してたんだ。大目に見てくれよ兄」

ライネスの抗弁を無視して、師匠が続ける。

「それに、トリムマウの手に血をつけたのも、やりすぎだった。そこまでやる必要はなかったんだ。どうせ、この塔でのライネスの立場なら追い詰められている。そのせいで、黄金姫の事件とカリーナの事件で犯人が違うのではないかと、考えさせるだけの余地が生まれてしまった」

「……じゃあ、本当に……」

イスローが呻き、振り返る。

幼なじみを見る目は、まるでその皮を被ったバケモノでも映しているようだった。

今度こそ、薬師は否定しなかった。

尻餅をついたままで、しかし彼は笑っていた。震えはぴたりと止まり、三日月みたいに唇を引き裂いて、静寂のままに笑っていた。

「.....だって.....」

と、マイオはやっと言葉を紡いだ。

「だって……どうして、いけないんだ?」

ひどく虚ろに、その声がロビーに響いた。

耳を疑うこともできなかった。マイオの瞳は、神の啓示を受けた 聖者以上の確信に満ちていて、ただただ純粋に訴えていたからだ。

いや、違う。

確かに、自分もその台詞に納得していたのだ。

「ぼ、僕はずっと前から、彼女を知って、いたよ。ずっと前から 知っていたはずなのに、だ、誰よりも僕こそが彼女を知っていたは ずなのに、あんな彼女は知らなかった!」

彼女とはどちらだろう。

本来の黄金姫であったディアドラか。

黄金姫に付き従っていたメイドのカリーナか。

それとも.....

「……だ、だから、死ぬ前の彼女を、す、少しでも拾い集めようと 思った」

多分、ライネスが気づいてトリムマウとともに足跡を追う前のことだ。

自分たちと同じように、マイオも黄金姫を殺害した犯人を突き止めようとしたのだろう。あるいは犯人を捜すなんて意識はなかったかもしれない。今の言葉通り、死ぬ前の彼女の残り香を少しでも集めようとしたのかもしれない。感覚を『強化』できる魔術師であれば、トリムマウのような足跡を追跡するのはさほど難しい仕事ではなかったはずだ。

そして、泉で出会ったときのカリーナは、おそらくバイロン卿の 元から脱出する準備を整えていたのだろう。

「問い詰め、て、驚いたよ。だって、カリーナが黄金姫だって、い、言うんだもの。す、すぐには、信じられなかったけど、ど、そのときの、僕の喜びが分かるかい。だって、だって! ディ、ディアドラは死んでも、黄金姫は、死んでなかった! あの美しさは、欠片だって、損なわれていなかった!」

マイオが、叫ぶ。

吃音などまるで気にせず、ただ内側の想いをひたすらに叫んでいた。灰かぶりの術式がもたらした奇蹟に魅入られた彼は、その偉大なる福音を説く伝道師であった。

「な、なのにさ。逃げるっていうんだよ。ば、バイロン卿の手から 逃れて、白銀姫もレジーナも連れてこの双貌塔から逃げる。だか ら、ま、マイオも手伝ってって」 彼女にとって、マイオは頼れる幼なじみだったはずだ。

たとえ事実がバレてしまったとしても、彼ならば助けてくれると、そう思えたからこそ打ち明けたのだろう。しかし、彼女とマイオの考えは必ずしも一致していなかった。いいや、むしろその方向性ベクトルはまったくの正反対であり―

「そんなの……そんな、な、の許せるはずがないだろう?! 彼女は死んだって、あの、美を取り戻すべきだ! こ、殺してでも、引き留めなきゃ、いけない! 白銀姫の、研究も継続するべきだ!だって、ぼ、僕たちは、もうその果てを見てしまって、い、る!果実を口にし、したんだから、さらに先を目指す、べきだ! 魔術師なら、らば、そうしなきゃ、いけない!」

......ああ、その通りだ。

彼の言ってることは、何ひとつ間違ってない。

人ひとりの命や自由など、あれほどの■の前には塵じん埃あいにも等しいのではないか。あれを再現できるのであれば、むしろ数十でも数百でも喜んで捧げるべきではないか。

だから、自分だって、あの英雄に成るべきなのだ。変わってしまう自分を受け容れて、故郷の人々に喜んでもらうべきだったのだ。いいや、今からだって遅くない。まだアッドは自分とともにある。

「一お、おい! おいしっかりしろグレイ!」

右手あたりからする匣の声は、ひどく遠かった。

どうして迷う必要があるだろう。自分が取るべきは彼の手だ。間違っていたと告白しなければならないのは、自分の方だ。床にひざまずき懺ざん悔げしなければならないのは、今このときだ。

だけど、黒いスーツの背中が、隣から割り込んだのだ。

「……間違えちゃいない」

短く口にしたのは、師匠だった。

「君の言ってることは、魔術師として何ひとつ間違ってはいない」

「……ロード・エルメロイII世」

小さく、イノライが呟いた。

皺だらけの手が、するりと懐に伸びたのを自分は見た。

かまわず、師匠は続けた。

「君が、幼なじみを生いけ贄にえにしてでも願望を達成しようとするのは、魔術師として当然のことだろう」

ロビーの暗がりに、マイオの瞳が揺れる。

救済の道を示された迷い子のごとく、笑顔に無邪気な残酷さを含ませた。

「だ、だ、だったら」

「だが―だったら、なぜ死んでくれと頼まなかった」

真っ直ぐに、師匠が舌鋒鋭く突きつけたのだ。

周囲の魔術師たちも、この男は何を言い出したのかと、一様に目 を見張った。

「な、にを―」

「幼なじみを殺すまでして引き留める前に、僕のために死んでくれとなぜ言わなかった。究極の美をもう一度この目にしたいという我が儘のために、君を好きなだけ切り刻ませてくれとどうして懇願しなかった。それが見果てぬ夢だというのなら、白銀姫もレジーナもみんな生け贄になってほしいのだと、どうして晴れ晴れと誇らなかった」

師匠の言葉に、マイオは今にも泡を吹き出しそうにぱくぱくと口を開閉する。

「---そ、そ、そんな、ふざけた」

「そんなふざけた申し出があるかって? たかがこの程度でか」 これ以上なく正気で、師匠が痛罵した。 曖昧にぼやけていた自分の意識さえもが、その切実な言葉に覚醒 させられる。

なぜだか、鉄の香りがした。

長身に纏う漆黒のスーツは、いまや堅固なる鎧よろいのようだった。頼りなくたゆたう葉巻の煙は白銀の槍のようだった。もはや忘れ去られた彼方かなたの国から、師匠が問いかけているかのように思えた。

「ただ個人の欲望だけで、神意も大義もなく万国を踏み荒らそうというのでもない。最果ての海をこの目にしたいなんて妄想ひとつで、居並ぶ軍神やマハラジャの栄誉も誇りも奪い尽くして、なお彼らに轡くつわを並べさせようというわけでもない。たかがこの程度の妄想を信じさせずに、お前は自分の夢を叶えようというのか」

師匠の声には、この場にあってなお揺るがぬ何かがあった。

本当に、この世の果てでも見てきたかのごとき声音。たとえ、それが現実ではなく、いつか誰かの見た心象の景色なのだとしても、 しっかと根づいた夢路はもはや誰も嗤わらえるものではない。

「魔術師だろうがそうでなかろうが、人にとってエゴは絶対だ。いかなる善行も悪行も、それが本当に他人を救ったか、はたまた傷つけたかなどしれたもんじゃない。だが、それが誤認だろうが誤解だろうが、自分が辿り着いた生き様だというのなら胸を張れ。自分のための戦いに挑むなら、せめて独善で他人も染めてみろ。―ああ、そもそもこんな馬鹿げた犯人捜しに陥る前に、僕がカリーナが逃げ出さないよう殺したのだと、堂々と胸を張って宣言すべきだったんだ」

そうしなかったのだから、お前は負けたのだと。

そうできなかったのだから、お前は這いつくばっているのだと。

語る意味が、自分の身にはひどく沁しみた。師匠はけして日の当たる場所の倫理こそ素晴らしいなどとは思っていない。常人には常人の、魔術師ばけものには魔術師ばけものの倫理と常識があり、その双方が彼の中で息づいていた。

あるいは当然かもしれない。魔術とは歴史であり、思想そのもの だ。幾多の魔術をたちどころに解体してのける師匠は、つまるとこ ろ誰よりも魔術師の思想体系に長じている。

だからこその、君主ロード。

魔術の才も血統も関係なく、時計塔に冠たる十二の王のひとり。

茫然と見上げたままのマイオに、師匠が言う。

「一お前のそれは、単に卑しいだけだ」

断罪は、なされた。

ギロチンの刃が落ちた音が、聞こえた気がした。

今一度の静寂に包まれた月の塔のロビーで、不味そうに葉巻を吸 う師匠がゆるりと視線を横合いに流した。

「どうして、彼を庇ったんですか?」

白銀姫の表情は、やはりヴェールで読めなかった。

それでも、今度はやっと口を開いたのだ。

「……本当は、あの夜カリーナと合流して逃げ出すはずでした。マイオがカリーナを殺さなければ」

「なのに、どうして?」

「分かってるのでしょう? あなたは理由だけは分かってらっしゃる。──レジーナ?」

「はい」

麗しい声音を継いで、レジーナが口を開いた。

「双子の私は、ある程度ですが感情と意思を伝達することができま した」

レジーナが言う。魔術師ではよくあることだ。それこそ都市伝説

でだって、双子同士のテレパシーはありふれた話だろう。

「ですが、死に至る直前のカリーナの意識は伝えたのです。……マイオを助けて、と」

「幼い頃から、マイオはディアドラ姉様しか見ていませんでした。 同様に、カリーナはマイオしか見ていませんでした」

その関係を、なんと呼べばいいのだろう。

愛だろうか。だが、マイオが見ていたのはディアドラの美しさだけだったのだろう。だからこそ、カリーナが変装していたのだと聞いたとき、黄金姫が再生するのだと無邪気に喜んだ。

それでも、カリーナは慕っていたのだろうか。

自分には分からなかった。

.....いや。

きっと、嘘だ。

分かってはいる。自分が過去の英雄になることだけを欲していた 故郷の人々のことを、どうしても憎めなかったからだ。あの故郷に いたならば、いつかはその歓喜に屈していたのではないかと思うか らだ。

「だから、私たちは、マイオを庇う事を決めました。それだけで す」

「一やっぱり、頼めば死んでくれたかもね」

せいせいしたとでもいうように、橙子が呟いた。

「ロード・バリュエレータにも、伺っておきたい」

と、師匠は囁いた。

「整形はともかく、イゼルマの異変についてはあなたも知っていた はずだ。少なくとも、お披露目に出てきた黄金姫がニセモノである ぐらいは分かっていたでしょう」

「……さて」

と、イノライが細い肩をすくめる。

ちらと周囲を見やり、誤魔化しきれないと思ったのか、ため息ひとつこぼした。

「まあ、こんなところだろうとは思ってたさ。イゼルマの家はよく やってるが、結果を出すにはまだ代を重ねる必要がある。それが突 然段飛ばしで開花しているとか噂されて、うちの馬鹿弟子までちら ほら顔を出しているのではね」

「だから、アトラム・ガリアスタに好き放題させることで、尻尾を つかもうとした」

「そんなところさ」

仕方なさそうに、老女が認める。

彼女にしてみれば、アトラムからの接触は渡りに舟だったのだろう。

イゼルマの内情を調査しなければならないと思ったのは、はたしてあのお披露目か、それとも話題になった闇オークションか、それとももっと以前のことか。ミック・グラジリエを子飼いにしてるらしいのも、同じ理由だろう。

「―私からも、もうひとつ」

今度は、蒼崎橙子が、老女を見据えて尋ねたのである。

「以前から訊いてみたいと思ってたんです。イノライ先生は、私が 封印指定にされたとき、どう思いましたか?」

「正しいと思ったよ。お前は現代において、封印指定に最もふさわしい魔術師のひとりだ。周囲に意見を訊かれたときも、大いに推挙させてもらったとも。トウコ・アオザキとその魔術回路は是非とも秘ひ儀ぎ裁さい示じ局きょくの奥深くで、永遠とこしえに保存すべきだと」

一切の躊躇なく、老女は答えた。

端で聞いていた自分が、呻きをあげるほどの躊躇のなさだった。

これが、ロード・バリュエレータ。

社交会から見せていた豊かな人間性も、鷹おう揚ような笑顔もけ して嘘ではない。

だが、それよりももっと強固な核として彼女は理想の魔術師なのだ。それが魔術の発展につながると信じられるなら、生徒を封印指定として売り渡すことを毫ごうも後悔しないほどに、理想的な魔術師。理想的な君主ロード。

これもまた、十二の君主ロードとしてふさわしい在り方なのだろう。

「多分、そうだろうと思ってました」

穏やかに、橙子が言った。

一次の瞬間だった。

何気なく、彼女は自分の胸のあたりを見下ろした。そこから生え ていた緑の切っ先を不思議そうに見やり、首を傾げた。

橙子の身体の内側から、奇怪な植物の根が生えていたのだ。

「―や、やや、や、やった!」

と、どもった声が背後の床から持ち上がった。

ほとんど老いさらばえたと言ってもよいほどに、この数分間で憔悴しきっていたマイオの指が、何かしらの香薬を挟んでいたのである。

「……ああ、薬、か」

困ったように、形のよい唇が呟いた。

橙子に飲ませた記憶阻害の薬には、別の作用も持たせていたのだろう。おそらくは、もうひとつの薬を大気に混ぜて嗅がせたりすることで、彼女の身体を苗床に一気に生長するような植物の種が。

「はははははは!」

高く、薬師は笑った。

「ぐ、冠位グランドの魔術師がなんだ! そんなもの、何の意味もない! 意味があるのは彼女だけだ! 僕とイゼルマの夢の果てだけだ! そうでしょうバイロン卿!」

「マ、マイオ……」

バイロン卿も、めまぐるしい状況の変化に追いついていなかった。

すでに絶望し、打ちひしがれていた紳士が茫然とかぶりを振る中、髑髏のごとく頰をこけさせた薬師は高らかに吼え猛った。

「も、もう一度! もう一度つ、つくればいい!」

叫び、幼なじみのふたりを振り返った。

「僕のために、も、もう一度、彼女を整形してくれ! は、白銀姫でも! レジーナでも! 好きなだけ、き、切り刻んでくれ!」

まさに、狂気の発言ではあった。

対して、ひどく爽やかに橙子は尋ね返したのである。

「でなければ、このまま私が死ぬよって?」

「ああ! そ、その根は君のし、心臓や重要な内臓にすべて、結び、ついている。も、もしも魔術を解除しようとしたら、内臓ご、

ごと持って行くぞ。い、いくら優秀な魔術刻印を、もってようが、 そのまま死に......

「それはあまり意味がないな。そもそも私は魔術刻印を刻んでないからあっさり死ぬし」

身体を貫く根に、橙子が何かの文字を刻んだ。

次の瞬間、身体を貫いていた根はぼろぼろと崩れ去った。

しかし、串刺しにされていた部位が塞がるわけでもなく、胴体に 拳大の穴を空けたまま、ぼんやりと橙子は呟いたのだ。

「そうかそうか。どうも忘れた私のやってることが手ぬるかったんだが、要するにここで全部ご破算になるから、その場その場で最大限楽しめばいいと思ってたんだな。まったく我ながら性夕質チが悪い。おかげで少しばかり興ざめな幕切れになったぞ。マイオに恨みはないんだが、こうなってしまえば私にも止められない」

と、天井を仰ぐ。

「最近では、ネタが割れててね。時計塔周辺じゃ私を殺そうとする相手はいなくなってたものだが……そうか、そのことは教えてなかったか」

ビキビキ、と奇怪な音がした。

鼓膜を震わせる、空気の振動音とは違っていた。

もっと本質的な──この次元ではありえない異形の摩擦。自分たち の魂が直接聞いているかのような擦過音。

「悪いけど、これ預かっててくれよ」

と、師匠の手元に紙の箱が放り投げられる。

煙草であった。

イノライが、表情を変えた。

「トウコ。お前一」

「はは、さすがに先生はご存じで」

橙子の笑顔とともに、誰も聞いたことのない異音は、さらに音量をあげていく。

いいや、自分だけは知っていた。

(.....あの森で、戦ったときの.....)

あのとき、橙子の大きすぎる鞄から感じた異形の気配。最果てに て輝ける槍ロンゴミニアドにすら匹敵するのではないかと思われ た、絶望的なまでに凄絶な魔力。

同質の気配が一一橙子の内側からしていたのだ。

こちらこそが、鞄の中身の本体だったか。

「昔、不意打ちでやられた反省でね。今はこちらに入れてるんだ。 ──ああ、心配しないでほしい。カウンターとして縛ってはいる。余 計な手を出さなければ、加マ害イ者才以外は襲わないはずだよ。 ロード・エルメロイII世、後で煙草は受け取りに行くから」

ビキリ、と橙子の腹部が砕けた。衣服も骨肉も関係なく、まるで 彫像の素材みたいに剝離して──その内側に開いた傷口は、ある種の 『扉』であった。

漆黒の闇。

果てどころか距離さえもない、無間地獄。

後から師匠に訊いたことだが、その怪物には名前がないそうだ。 以前より蒼崎橙子の手中にあることだけは知られながら、神秘とし ての正体を突き止めた者はいない。ひょっとしたら橙子自身も怪物 の真実は把握していないのかもしれない。

まるで、古いホラー映画の玉条だ。

一切の言葉を喋らず。

誰からも正体不明であり。

なによりも……不死身である。

いかなる魔術も届かない暗黒の底に、はたしてふたつの光が灯っ

ていた。

─あのときに見た、ふたつの目が!

r III I I I

バイロン卿の喉から声にならない悲鳴があがり、橙子の身体の何 もかもを砕きながら、凄まじい勢いで影が伸びた。

茨のごとき触手と禍々しい鉤かぎ爪づめは、主を害した薬師を搦め捕る。

「マイオ!」

「つ......ぁ......」

レジーナの叫びに、マイオの喉はかすかに震えたきりだった。

彼は、すでにその状況を諦めているようだった。搦からめ捕られた身体はあっという間に蒼崎橙子という『扉』に引きずり込まれ、何千という顎によって咀そ嚼しゃくされていく。

ああ、そうだ。反応なんてできない。

できやしない。

ある意味で、かりそめの黄金姫の■にさえ匹敵するほどに──正反対ではあっても、怪物の在り方は人の魂を打ちのめすに足りた。指先ぐらいのサイズで、ひとつずつ喰らわれていったとしても、もはや恐怖一色に感情は塗り込められている。

終わる。終わる。

事件も、何もかも終わる。

こんなにあっさりと、なしくずしに、機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナが現れたように。

(.....lllo?)

誰かが、訊いた。

それは、自分が自分に問いかけた言葉であった。

自分は、自身を乗っ取ろうとする過去の英雄に怯おびえて。

この人は、あらゆる認識を無にするほどの絶対的な■に魅入られていた。

ああ、違いなんてほんの少しだ。捧げようとしたのがたまたま他人だったか自身だったかというだけで、後はきっかけがあったかなかったか。たったそれだけのことで、自分はこちら側にいて、マイオはあちら側に連れて行かれようとしている。

「おい、グレイ」

右手から、声がした。

さきほども同じように言葉をかけられ、師匠の喝破によって目覚めさせられた。

今は、どうだ? これも気の迷いか? たまたま似た境遇の相手 に押しつけているだけの、身勝手な幻想か?

「......拙......は.....」

声が、こぼれた。

ちょうど、そのタイミングだった。サモトラケの二ケ像にも似て、この瞬間も砕けつつある橙子の瞳が、最後にこちらを見つめたのだ。

微笑されたように、思った。

好きにしたまえ、好きに生きたまえ、と背中を押されたような。

おそらく自分がこれまで見てきた中で、最も自由な人間の、その 保証。

「―ああああああああああああっ!」

身体が、動いた。

一足飛びに、五メートルを詰めた。誰が止めるよりも早くアッドを展開。ありったけの魔力を死神の鎌グリム・リーパーへと注ぎ込み、強引に茨の触手を切断する。

引きずり戻したマイオの身体は、すでに足の一部が喰われていたが、とりあえず生きていることだけは確かだった。

「マイオ!」

レジーナと白銀姫が駆け寄る。

魔術のためにその身を捧げるべきだったと言われても、彼女たちの想いはまだ消えてなかったらしい。きっと、それでも断てない関係があるのだろう。自分には分からないけれど、そんな時間の積み重ねが世界のどこかにあるのだという考えは、けして不愉快ではなかった。

「グレイ!」

「……すいません、師匠」

続いてマイオを拉致せんとする茨の触手をさらに断ち切り、自分は謝罪した。

魔力が動くのを感じた。橙子の―いいや、橙子だった『匣』の内側の怪物は、どうやら自分たちを敵対者とみなし、戦い方を変えようとしているらしかった。

「この人は、拙と同じです。いいえ、ほんの少し勇気があった拙で す」

もしも、思い切れていたら、自分は過去の英雄となりはてていた だろう。

アッドを使うのに、もっとふさわしい人間になっていただろう。 故郷の人々はきっと喜んだはずだ。今みたいに、無様に生き苦しい 自分もいなかった。 だけど、そんな気持ちをどうやって表現すればいいのか。

明らかに言葉足らずな説明に、

「.....やれやれ」

師匠がうなずいた。

もはやカタチを失い、曖あい昧まい模も糊ことした暗闇の『匣』 としか見えなくなった空間へ、目を凝らす。

「手の出しようはないか。だが、こちらに干渉できる時間と範囲も限定されているようだ。なるほど、ホラー映画なら完璧な配剤だな。吸血鬼は夜のみの無敵だからこそ愛され、ゾンビはまともに喋らぬからこそ恐怖をそそる。まったく彼女らしい出来映えだよ」

ほとほと感心したように呟いて、隣に佇む癖っ毛の少年へ問う。

「スヴィン、どれぐらいやれる?」

「七割なら大丈夫です」

「頼む」

短く、師匠が口にしたところに、ぴょんぴょんとフラットが跳ねた。

「ちょ、ちょっと教授! 俺には訊いてくれないんですか!」

「黙れ。お前は綺麗に脳のう震しん盪とう起こして気絶してただけだろうが」

「そりゃそうですけど! いやでもほら、脳震盪って軽視すると危ないんですよ! いびきとかしてたら大惨事ですよ! あ、でも臨死体験とか前世とか見られるっていいますよね教授はどう」

「スヴィン、グレイと一緒に触手の撃退を」

「はい先生!」

あっさりと無視して、スヴィンに命令を下してから、今度はフラットへ向き直った。

「フラット、あの空間を固定してる術式に介入しろ」

「わっかりました教授!」

こちらも軽けい々けいにうなずいて、フラットの指は細かく魔術 の印を刻み、床へ触れる。

その隣で、スヴィンの全身が、雄々しく人狼の幻体を纏った。

「ライネスは全員の援護を」

「はいはい。そう言うと思ってたよ。我が兄」

満足げに言って、ライネスもまた右目を押さえていた手を下ろす。ホロスコープとなっていた一部を回収し、水銀メイドはそろりと臨戦態勢に移行する。

それから、師匠は背後へと声をかけた。

「ロード・バリュエレータ、ミック・グラジリエ。──あれを押し戻します。バイロン卿と白銀姫たちを任せてかまいませんか」

「まあ、自分の派閥ではあるのでね」

と、イノライが受けた。

バイロン卿はただ茫然としたままだった。

あの瞳を直視してしまったためだろう。異形を見慣れた魔術師さえ絶望に陥れる悪夢は、自分の人生を打ち砕かれたばかりの壮漢を自失せしめるには十分だったやもしれない。いつ自らが命を落とすともしれぬこの状況さえも、まともに認識してはいないようであった。

「依頼主のご要望なら仕方ないな」

と、ミックも肩をすくめた。

もっとも、すでに周囲に色砂をまいて結界を形成しているあたり、あの怪物が現れたときからどちらもやるべきことはやっているようだ。

それから、もうひとり、この場の人物へと師匠が話しかける。

「さっさと逃げるかと思っていたが」

「無論そのつもりだとも。だけど、せっかくだから君たちのお手並 みを拝見させてもらいたい」

アトラムは、妙に上機嫌に口にした。

何が気に入ったのか、師匠を映した瞳は、どこかしら友人の仕事でも見守るような気配があった。

「見物料は要求するぞ」

「いかようなりとも」

と、褐色の青年が大仰に一礼した。

師匠にとっては、それで十分だったらしい。

もう一度、こちらへ呼びかける。

「グレイ」

「.....はい」

「よくやった」

思わず、顔をあげてしまった。

「私が預かると言った事件だ。あんな怪物に犯人をくれてやっては エルメロイの沽こ券けんにかかわる。最後まで、こちらで終わらせ るぞ」

そんなはずがない。師匠はこちらの勝手に、苦しい言い訳をつけているだけだ。

なんて馬鹿馬鹿しい──なんて愛おしく、胸の張り裂けそうな言い 訳だろう。

「そろそろ、来るぞ」

ついに、敵対者への反応を決定したか。

暗黒の『匣』の内側から、一斉に茨の触手が解放された。

だけど、そのときには、自分の内側でこみあげる衝動の行き場を 決めていた。

「一行きます」

爆発以上の速度と範囲に──自分は、真正面から飛び込んだ。こぼれおちる魔力の吸収から『強化』への転用。同時に、勘と反射神経任せで茨と茨の間に身を滑り込ませ、細かく変形させながら死神の鎌グリム・リーパーを強引に打ち振る。

まとめて、七本ほどが断裂した。

さらに回転しながら、自分は鎌を振るう。

吸収すべき魔力は、イヤと言うほど怪物が垂れ流していた。魔術 回路と神経がもろともに侵食されていくのを感じながら、自分は寸 毫も躊躇しなかった。する理由などなかった。ここを死守するの に、どうして悔いがあるだろう。

スヴィンも手近な触手を摑まえては、幻体の剛力をもって引きち ぎっていく。

「とどめを刺そうと思うな」

師匠の声が、背中を叩いた。

「迂闊に巨大な魔力で刺激すれば、本体を招きかねん。フラットの 解析が終わるまで粘れ」

つまり、最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドは使用不可。そうでなくても、味方とは言い難い君主ロードの前で、あれを使うわけにはいかないだろうが。

こちらの反撃を感じてか、茨はたちまち増殖した。

自分とスヴィンで、はたして制しきれるか否か。

緊張に唾を飲み込んだときだった。

不意に、身体が銀色に包まれたのだ。

「―え?」

「こういう場で見せびらかしたくはなかったんだがね」

実に、嫌そうな声がした。

自分の手も足も、白銀に輝いている。

全身を纏った白銀──月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムは、 美しい鎧と化していた。

「私の月霊髄液ドレスを貸してあげよう。励みたまえ」

と、ライネスが微笑んだ。



両目の痛みをこらえつつ、ライネスは月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムの操作に集中していた。

グレイの全身の魔力と同調させ、動きや術式を阻害しないよう、 入念に働きかける。

もとより、ライネスの魔力は先代のロード・エルメロイ─ケイネス・エルメロイ・アーチボルトには遠く及ばない。ありあまる魔力によって、月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムをぶんまわしつづけるような真似は到底敵かなわない。

しかし、ロード・エルメロイII世は彼女に別の才能を見いだしたのだ。

精密操作。

強大な魔力に過剰反応する魔眼も、その表出のひとつにすぎぬと。

結果として、とりわけ困難とされている「魔術の上に魔術を重ねる」という術式を、彼女は十一歳で習得したのである。トリムマウに付与した人格や、数時間前に黄金姫を再現した投影も、そうした技術によるものだ。初めて成功したとき、喜びとともにひどくやるせない表情になった義兄を、よくライネスは覚えている。

(.....まったく、いじらしいことだよ)

あれでは、自らの凡才ぶりを味わうために弟子を育てているようなものだ。

それでいて弟子を育てることを止めもしないあたり、魔術と離れては生きていられぬ葛藤が窺えて、少女にとっては大変な好物だった。

だから、目一杯に愉しみたい。

そのためにも、

(.....頼むよ、君)

と、グレイの背中を見つめたのであった。

*

スヴィン・グラシュエートは、グレイの死角を守る形で戦っていた。

正直、湧き上がる歓喜がある。

彼女を守っているというだけで、踊り出したいほどに嬉しい。背筋のあたりからびりびりと痺しびれるような甘い感覚が走り、脳細胞のすべてが幸福感で満たされていく。

この恋患いに陥って、もう三ヶ月。

ただ、本当に恋かどうかは、スヴィンにも分からなかった。

彼の習得した獣性魔術は、世界に広く伝わっているものだが、反 比例して使い手は極めて少なかった。獣の性質を取り込むという魔 術ゆえ、必然的に人間性を失うものが多く、魔術の家系として存続 しにくかったためだ。

グラシュエート家は数少ない例外だったが、それは欠点を克服し たゆえではない。

たとえ使い手が発狂しても、魔術刻印を受け継がせていったから だ。

固定化された神秘によって、強引に魔術は継承されていき、スヴィンはたまたま適性を持っていた。栄えある成功例として時計塔に送り出され、ほかの派閥へのコネクションがなかったためにエルメロイ教室の門を叩くことになった。

そこで出会ったロード・エルメロイII世は彼の才能を見抜き、失

われた獣性魔術のいくつかをスヴィンに再生させるという偉業まで達成したのだが......しかし、彼の疎外感を埋めるには至らなかったのだ。

時計塔にあってさえ、スヴィンは自分と他人が別の生物に思えてならなかった。

魔術師でなく、人間でなく、獣でさえなく。

けして塞がらない溝を、スヴィンはずっと感じていた。

それが、グレイの匂いを感じたとき、初めて埋まったのだ。

(.....多分)

多分、それは、彼女もまた馴染めない者だからだ。

生者に馴染めず、死者になる勇気もなく、亡霊に怯え続けて。

そんな自分と、彼女とで傷を舐なめ合いたかっただけかもしれない。

だから、この感情は恋ではないかもしれないと思いつつ、けして無視はできなかった。

(ああ.....!)

高く、衝動のままに吼え猛る。

その身体が、いくつにも分身していった。

戸惑うように震えた茨の触手へと、スヴィンたちはにんまり笑う。

「幻体の使いようだよ」

つまるところは、魔力で半ば物質化させた自分の分身だ。橙子相手に使わなかったのは、あっさり本体を見抜かれ、無効化される可能性が高いと考えたからだが、この触手相手であればその心配はない。

一斉に、六人のスヴィンが茨へと襲いかかった。

グレイとスヴィンの活躍を、エルメロイII世は静かに観察していた。

獅子奮迅といってもいいだろう。

雪崩のごとく出現する茨の触手は、見事に抑え込まれている。おかげで、彼もとある探し物を終わらせることができた。フラットの介入術式も、徐々にだが空間の解析を終えつつある。

だが、その隙間から、不意に一本の茨が伸びたのだ。

弟子たちの誰も気づかぬ角度で、立ち尽くした青年の眉間へと、 その茨の触手は正確に走り抜けた。

その瞬間、頭上から、蜘く蛛ものごとき姿をした自動人形オートマタが舞い降りたのだ。エルメロイII世を庇った人形はその急所を茨の触手に穿うがたれ、しかし当然に人間離れした力で、触手を捻ねじり切ったのである。

「馬鹿弟子が、バイロン卿に預けていた自動人形オートマタか」 イノライが呟く。

トリムマウで追跡していた際、グレイたちをとどめた自動人形 オートマタだった。

「ありがとうございます」

と、エルメロイII世は白銀姫を振り向いた。

おそらく、マイオを庇うと決めたとき、時間稼ぎしたのは白銀姫によるものだったのだろう。彼女ならば、橙子がバイロン卿に預けていた自動人形オートマタの操作方法ぐらいは教えられていても不思議はない。

「最後は、これでお父様と一緒に自決するつもりでした」

白銀姫は呟く。

レジーナは、マイオを介抱したまま沈黙している。おそらくふたりの気持ちは同じだったのだろう。ここで終わってもよいと思っていたからこそ、エルメロイII世が告発した際にもあれほど冷静だったに違いない。

「……なのに、どうして、あなたたちは」

美しい声が震えた。

なぜ助けたのかと、問うている。

そんな理由など、どこにもないはずなのに。

「私じゃない」

と、師匠が口にした。

目を見張った白銀姫に背を向けて、青年は続ける。

「だが、弟子が自分の身体を張ってるんだ。師匠が手助けしない理由があるか」

そう言って、ロード・エルメロイII世はさきほど見つけた品を撫でたのであった。

月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムを纏った身体は、いつも の倍近い速度で動いた。

いわば魔術による強化外骨格。自分は目撃していないが、剝ア離 ド城ラでハイネ・イスタリが使ったという〈柔らかい石〉と同じ理 屈だったろうか。

二度、三度と、突撃を繰り返す。

茨の注意を引き、フラットの干渉が成功するまでを耐え抜く。

スヴィンも、どうやら同じように動いてるらしかった。先の橙子との戦いで傷ついているだろうに、そんな様子はおくびにも出さず、次々に触手をひきちぎっている。

(.....ああ)

刃を振るいながら、思う。

すでに、自分はいろんな人と出会っている。

ロンドンに来てから、故郷にいたときの何十倍という数の人と触れあってきた。剝ア離ド城ラの事件も、今回の事件も、そうした波 紋のひとつ。

触れあった結果、折り合えても折り合えなくても、結局それは自 分の一部だ。否定しがたい過去だ。受け入れるしかない歴史だ。

茨の触手が、新たなカタチを取った。

複雑にもつれあったそれは、どうやらヒトに似ていた。

触手の剣を構えた騎士のようなヒトガタだ。敵対者であるこちらの形態に合わせた方が対抗しやすいと、『匣』の中の怪物は考えたらしい。いや、考えたといっても、やはりそれは人間には理解しがたい、異界の本能だろうが。

気にせず、自分はつっかけた。

「あああああああり」

死神の鎌グリム・リーパーと剣が激突する。

密度を高めた茨は、今度は断ち切れなかった。

ぐる、と相手の身体が回転する。

(*─*こ、れっ?!)

ほとんど条件反射的に、斜めから振り落ちる刃を受け止めた。

自分と、同じ動きだった。

たった数分の戦闘で、相手はこちらの戦い方を学習したらしい。

しかも、茨の魔人は一体と限らぬようだった。あちらこちらで似たようなカタチに、茨の触手がもつれ合い、新たな使い魔を生み出そうとしている。

茨の剣が、髪の一房を持っていった。

月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムの鎧がなければ、頸けい 動どう脈みゃくを断ち切られていたかもしれない。

「一グレイちゃん?!」

フラットの声を受けて、自分は床を転がりながら、囁いた。

「アッド、第一段階限定応用解除」

「ははははは! アレかよ! 珍しいな!」

新たに注ぎ込んだ魔力に、アッドがけたたましく笑った。

アッドは、最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドに付与された封印型魔術礼装だ。死神の鎌グリム・リーパーはその内側の魔力を流用することで、部分的にではあるが宝具に準ずるだけの性能を勝ち得ている。

だけど、その限定形態は死神の鎌グリム・リーパーだけではな

110

一瞬だけ匣へと戻り、ルービックキューブを思わせて表面が回 転・展開したカタチは、自分の右半身を覆った。

大盾。

茨の魔人が振るった剣を、ただ凌しのぐ。

受け止めるたび、盾の表面が激しく震えた。

死神の鎌グリム・リーパーは限定形態の中では二番目に高い攻撃力を誇っている。対して、大盾は純粋な防御力に限らず、もうひとつの特性を秘めていた。いささかの時間はかかるが、それに耐えるだけの時間を盾はつくりだす。

六度目の剣撃を受けたとき、ごお、と表面に無数の炎が噴き上がった。

「一反転リバース!」

自分の声とともに、その炎から魔力が放射されたのだ。

本体である最果でにて輝ける槍ロンゴミニアドとは比較にもならないが、高密度かつ純粋なる魔力の放射。その威力は、ある種の魔術によってこちらに存在している茨の魔人に、とりわけ大きな影響をもたらした。

複雑に編み込まれた茨がたちまちはずれ、そのカタチを失っていったのだ。

「解析終了っ! 教授、いつでもいけますよう!」

フラットが、にこにこと宣言する。

師匠は、葉巻に指を添えたまま、冷ややかに口を開いた。

「いいだろう」

それから、背後へと声をかける。

「アトラム・ガリアスタ。おそらく反動があるので、防御術式を」

「へえ、僕に? 頼める柄じゃないと思うけど」

「見物料はいただくと言った。これだけ手札を晒してるんだ。文句 は言わせん」

「.....なるほど。さっきもそうだが、君の交渉は悪くないね」

アトラムが顎をしゃくると、控えていた襲撃者たちが動き出した。

さすがの統率力というべきか、彼らが連続して紡ぎ出した術式に は、イノライが「ほう」とわずかながら眉を動かすほどだった。

続いて、フラットが呪文を口ずさむ。

「介入開始ゲームセレクト」

以前、授業で聞いた事があったが、相手の行動を見てからの受け身と、自分から仕掛けていく場合とで、フラットの呪文は異なるらしい。

「たんたた、たんたた、たんたたたん♪」

何かしら口ずさみながら、少年の指はピアノの鍵盤を叩くように リズムを刻んだ。

そのたび、魔力の波が何かの信号みたいに床を渡っていくのを感じた。この空間を、フラットという天才少年魔術師の意識が掌握していく。広がっていく意識領域はまるで彼の手の内側に吞み込まれていくよう。

影響は、すぐさま現れた。

残された触手の動きが見る間に鈍くなり、内側へと吸い込まれる。

匣が、縮んでゆく。

一だが。

「.....カ!」

刹那、見てしまったのだ。

触手と逆に、暗闇の匣から近づいてくる、ふたつの目を。

自分の身体よりも大きく開き、粘っこい涎をおびただしく垂れ流 す顎を。

「駄目だ」

スヴィンが唾を飲み込む音が聞こえた。

「うまく、やりすぎた」

そうだ。宝具を振るわずとも、匣の中身の興味を惹いてしまうほ ど、自分たちはうまくやりすぎた。

これに対抗できるのは、最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドしかない。

だが、あの宝具を発動する魔力や時間など、もはやなかった。

自分に、できるのは─

「──第一段階限定応用解除・死神の鎌グリム・リーパー」

盾が分解・展開を繰り返し、死神の鎌グリム・リーパーへと戻る。

退いていく触手の間をすりぬけ、匣の至近距離で、思い切り振りかぶった。

「グレイたん?!」

「ぜやあああああああっ!」

全力で、叩き込む。

膨大極まる魔力が炸さく裂れつした。

匣を守る魔力と、死神の鎌グリム・リーパーの魔力とが正面から 激突し、激流を生んだ。

あまりもの圧力に、纏っていた月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムさえも形を失って、背後へと流れていった。

「グレイ! おい! こりゃいくらなんでももたないぞ!」

幾分の申し訳なさとともに、アッドの声を無視する。

規定値以上に吸収した魔力が、こちらの神経と魔術回路をつんざいていた。引き裂かれぬまでも、その痛みは自分の脳を苛さいなんだ。赤熱した棘が体中に張り巡らされていると思えばいい。自分の身体は痛みを覚えるだけの肉袋へと変わり、自意識など百年も昔に死に絶えたよう。

でも、魔力の循環だけが止まらない。

最初に設定したプログラムに従い、ただ自動的に匣を押し潰さんとする。

「.....ああ.....あ.....」

呻きも、力に。

痛みも、力に。

死に絶えたはずの意識が、それでも囁く。

苦しいのだと。

こうしていても、痛みより苦しさの方がいまだに上だと。

いつだって、この世界は自分を拒絶していて──いいや違う。自分の方がこの世界を拒絶してるからだなんて、本当は分かってる。分かっていてもどうにもならない。叫びをあげても楽にはならない。だったら、声を押し殺して、部屋の隅にうずくまっているしかないじゃないか。

それでも。

それでも、なお。

見られている。

見守られている。

今も、この背中に視線を感じている。

たったそれだけのことで、自分はもう一歩を踏み出せる。

だけど、想いと魔力とは比例しない。

内側からの圧力は、加速度的に増していく。

ふたつだけだった光が、ぽつ、ぽつ、と新たに灯った。

内側から聞こえるのは、餓うえとも憤怒ともつかぬ絶大な咆哮。 怪物は一体ではなかったのか。それとも一体の怪物がこのような形態を取っているのか。

胸の奥から広がった絶望が、心を黒く染めかけたとき、

「一十分だ、レディ」

と、落ち着いた声がしたのだ。

振り向く余裕などなかった。しかし、強化によって限界まで研ぎ 澄まされた感覚は、背後の師匠が何か大きな物体を隣に置いている ところまで把握していた。

(─あれは、蒼崎橙子の.....持っていた─)

自分が、初めてこの怪物の気配を感じた匣状の鞄。

触手と戦っている間に、師匠はこの鞄を見つけ出していたらしい。おそらく、あの橙子が死んだとき、鞄を隠蔽していた魔術も解けたのだろう。

「今、軽く調べさせてもらったがね」

と、師匠が鞄の表面を撫でる。

「つまるところ、この鞄は魔力によって通電したときだけ、そちらとこちらをつなげる限定機能型の魔術礼装なんだろう。魔術師が魔力を供給できなくなった場合は勝手に閉じるわけだから、貴様のような暴走しやすい怪物をくくるにはなるほど都合がいい。あの女が考えそうな術式だよ」

感心と呆れを半分ずつ混ぜて、スーツの肩をすくめた。

「じゃあ、その匣の中で、鞄に通電したらどうなる? メビウスの 環わのような話だが、貴様が二重に出現するのか? それとも矛盾 パラドックスで貴様が引き裂けるのか? これは興味深い設問だ な。是非とも答えを教えていただきたい」

おそらくは『強化』された片手で、師匠は鞄を放り投げる。

放物線を描く鞄に、いつもの葉巻が結ばれているのを、自分は見た。淡い魔力が宿っているそれが、簡易式の魔術礼装であることを初めて知った。

茨の触手が、阻もうと殺到する。

師匠の言葉を理解したのか、それとも本能的なものか。

反転した死神の鎌グリム・リーパーが、たちまちその触手たちを 切断した。

それでも群がってくる触手を前に、叫ぶ。

「アッド!」

「イッヒヒヒヒヒ! 今度はアレか! アレは大好きだぜ! ご 機嫌だねえ! 」

四よ度たび、笑うアッドが変形・展開する。

内側の宝具から神秘を表したカタチは─大おお槌つちであった。

ぐるん、と身体ごと回転する。大槌の背面から瞬間的に放出される魔力は、ジェット噴射のごとく最速で最大の効果を発揮する。英霊のスキルとしてもDランクに匹敵する、限定形態・破は城じょう槌ついの特性。

「っ―ああああああ!」

思い切り、鞄をぶん殴った。

加速された鞄は、触手たちに捕まえられる余地など介在させず、 暗黒の匣の内側へ、流星のように墜ちていく。

深淵の内側に距離はあるのか。もしくは時間は。

「では」

くるりと、師匠の手の平が返された。

「自分で食い合え、くそったれの名前のない怪物ファッキング・ ネームレス・モンスター」

綺麗な音で、指が鳴った。

鞄が、開いた。

その先は分からない。

自分の『強化』された感覚でも認識しきれない域で、何かが噴き上がった。

叫び声だったのかもしれない。それまで茨を吐き出し続けていたのと逆に、虚無と化した空間が周囲の物体を喰らい始めた。

ただ、ひたすらに喰らわれていくのだけを感じた。

シャンデリアも、ソファも、螺ら旋せん階段さえも吞み込まれていく。

何もかもが。底なしに。貪欲に。強欲に。傲慢に。淫いん蕩とう に。切実に。残酷に。

すべては夢だというように。地獄の業火を宿す顎に吞み込まれて しまえば、一切合切は存在しなかったのと同じことになるのだと嘯 うそぶくように。

─自分の意識もまた、そこで途切れたのだった。



時計塔の名には、ふたつの意味がある。

ひとつは言うまでもなく、魔術世界の総本山たる一大組織として。

もうひとつは、ロンドンの内側に存在する第一科──全体基礎ミスティールおよび五つの大教室と七十からの小教室を擁する、最高学府の校舎としてだ。

多くの生徒たちが行き交う建築物は、老舗の大学ということで周囲には通っていた。とはいえ遠目の景色はもちろん、魔術と心理学両面からの結界によって、通行人に不用意に近づかれないよう注意深く設計されている。

もっとも、内部に入れば配慮の種類は変わってくる。

師匠に言わせれば、「学校としてのルールはあるが、人間社会としての法律はない」とのことで、一見は通常の名門大学とさして変わらぬように見えつつ、少し行き先を変えただけで、魔獣や元素魔術の荒れ狂う現場に出くわすなんて日常茶飯事だ。とりわけ、神秘の残骸や幻想種の死骸を求めて、現在も地下深く掘られているという大迷宮は、高位の魔術師ですら迂闊に踏み込めば帰還を危ぶまれるそうで、ロンドンに連れてこられて最初に忠告されたことを覚えている。

こうしたメイン校舎としての『時計塔』に加えて、ほか十一の学 科が独立した学園都市として倫敦近郊にちりばめられているのが、 おおよそ魔術協会の地政学的な全貌といえるだろう。

今、師匠が座っているのは、『時計塔』の方に用意された私室 だった。

現ノ代ー魔リ術ッ科ジの街─スラーに比べると、断然設備は整っており、そこらのホテルのスイートルームほどに広々としている。 執務用の机やソファひとつとっても、いかにも歴史を経たブランドの香り漂う逸品だった。洒脱な窓から斜めに入る柔らかな秋の日差しも、花か崗こう岩がんづくりで精緻な彫刻をなされた暖炉も、そうした印象をなおさら強めていた。

もっとも、それでも師匠の前に座る相手には不足だったが。

「―それで、どうなりましたの?」

尋ねた唇は、可か憐れんな花弁のよう。

真っ直ぐに師匠を見つめる瞳は琥珀色の宝石。蒼いリボンでまとめられた金髪の縦ロールは、天工の手になるものではと想起させる。

さすがに、純粋な美貌だけを問うならば、あの黄金姫や白銀姫には劣るとしても、その全身から滲み出す黄金のごとき誇り高さが十分に補っていた。美しさとはカタチからだけではなく、その人間の生き方から立ち現れるものだと、少女はありのままで証明しているのだった。

時計塔広しといえども、こんな少女はおいそれとはいまい。

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。

剝離城アドラの事件でも深く関わったかの少女が、師匠をご指名で訪問してきていたのである。指導役チューターとなってもらう約束を交わしたのだから当然だというのが彼女の言い分であり、師匠は後で考えると言っただけで約束した覚えはないとの一点張りだったが、自分の目から見てもどちらが優勢かは明らかだった。

「どうしたもこうしたもない。今ので一通りの話は終わりだよ」

うんざりといった感じで、執務席の師匠がかぶりを振る。

葉巻の煙だけが、素知らぬ風に私室の天井で揺れていた。時計塔内部の空調は、場所によって風の元素を利用した魔術だったり、ありきたりな科学を利用したシーリングファンだったりする。師匠の私室の場合はわりと本人の趣味でシーリングファンであった。

「あら、そんなことはないでしょう。だって、肝心の最後を聞かされてませんわ。意識を失ったといっても、グレイもあなたも生き 残ったんじゃありませんか」

「下半身を喰われたマイオは完全に廃人。バイロン卿には意識を取り戻して早々、何な故ぜ殺してくれなかったと喚わめかれたがね」

それも当然かもしれない。

彼の人生は、あそこで終わってしまっている。

美を追究するという何世代にもわたった目的は、永遠に失われた も同然だ。

「お披露目での詐欺や殺人などの不祥事で、イゼルマの領地は時計塔が凍結。白銀姫とレジーナ、後イスロー・セブナンについては、バイロン卿と同じく時計塔で調査されているということだが、まあ大した追加情報は出まい。マイオの殺人にしても、ブリシサン家とはかかわりのない個人の暴挙ということですまされているからな」

Г......

自分は、そのふたりを横目に見ながら、部屋の掃除をしていた。

まだ治療中だろうと師匠に止められてはいたが、動いた方が心地 よかったからだ。故郷の教会でもしょっちゅう掃除をやらされてい たので、こうした仕事は得意だった。なんといっても、ほとんど考 えずにできる。細かな窓枠の埃を払ったり、床を磨き上げたりと いったちまちました作業に快感を覚える趣味でもあった。

ルヴィアは深くソファに座ったまま、背後のモヒカン執事に淹いれさせた紅茶を楽しんでいる。

正式な入学前に、見学に来たということらしい。

ちょっと意外なのだが、なんでもノーリッジ学生寮に入寮を考えているとか。まあ漏れ聞こえる話だと、最上階のフロアを独占しようとしてるみたいなので、それはそれでずいぶん彼女らしい、突拍子もない寮生活な気はする。

ちなみに、ノーリッジという名は時計塔で有名な─いわば足長おじさんの一族ということだった。現代魔術科の二つ名がそれであるのも、師匠という君主ロードが学部長におさまる以前から、最大の融資をしていたのが理由だとか。似た理由から、時計塔周辺では支援を受けて養子になったとかで、ノーリッジという名を見かけることが多いらしい。

白磁のカップを置き、少し考えるように縦ロールをいじりつつ、 少女が口を開いた。

「エーデルフェルトにしても一応は民主主義派に属していますの

で、いろいろ噂されましたのよ? 近頃では一番物騒な事件でしたもの .

「バリュエレータ派でも、最も有力な家のひとつが突然失墜したのではね」

憂鬱そうに、万年筆を握ったまま、師匠は返す。

結果だけを言えば、貴族主義派のエルメロイとしては大きく得点を稼いだことになる。民主主義派の名門バリュエレータに痛打を浴びせ、堂々と時計塔に凱旋してきた次第だ。上機嫌に群がった貴族ロードたちは、口々に師匠を褒めそやし、エルメロイが抱えている借金についても大幅に有利な融資が固まったとも聞いた。

だが、あの事件に関わった中で、誰がそんな結果を望んでいただろう。

一体、誰がこんな結末を喜ぶのだろう。

カリカリ、と師匠が万年筆で書き綴つづる音が虚しく響き、不意 にその視線があがった。

「そういえば、ミス橙子の身体が人形で、怪物を内側に棲すまわせ ているというのは聞いたことがありますわ」

と、ルヴィアが口にしたのだ。

「ミス橙子は、最近ではネタが割れててって言ったんでしょう? 封印指定だった時代、その手で何度か逃れたそうで。あまりにも被 害が大きくなりすぎるので、執行者の部隊に一時停止命令が出たこ ともあると聞きましたわ」

いかにも彼女らしい話ではあった。

同時に、そんな情報まで押さえているあたり、さすが『世界で最も優美なハイエナ』とも称されたエーデルフェルトであろうか。

師匠が、心底からの深いため息をついた。

「普段から、人形の身体で遠隔操作してるのかね」

「それはどうでしょう。単なる遠隔操作なら記憶阻害の薬なんて意

味がないでしょうし、イゼルマで一ヶ月も過ごすうちにバレたと思いますわ」

「.....だったら、どうしてです?」

これは、つい自分が訊いてしまったのだ。

ゆるりと視線を動かし、間をおいてから、ルヴィアが口を開いた。

「こちらはずっと眉唾な噂ではありますが、かの人形師はすでに本体という概念を失っているとも聞きますわね」

「本体が、ない?」

「ええ。自分と等しい能力を持つ完璧な人形にすりかわって、オリジナルなどいなくなってるんじゃないかと」

Г......

ぞくり、と背筋が震えた。

理屈では正しいのだろう。完璧に同じ人形がいるのならば、今の 自分など必要ないかもしれない。

しかし、どうやればそんな決断を下せるのか。どれだけ本人と似通っていても、結局人形は他人のはずだ。自分が歩むはずだった人生を人形が謳おう歌かし、自分が得るはずだった成功を人形が得る。それでよしなんて思える人格は、一体どのような......

「……彼女なら、あるいはありえるか」

と、師匠が言った。

「私には想像しがたい生き方ですけれど」

と、ルヴィアが応じた。

背後のモヒカン執事が、飲み干された紅茶のカップを取り替え、 そっとスコーンの皿も添える。主たる少女の食事のペースも、当然 のたしなみとして心得ているらしい。二メートル近い体格と髪型を 除けば、執事の鑑かがみと言えるだろう。 「先生もいかがです?」

と、ルヴィアが執事が用意している別のスコーンを促した。

「甘いものを食べる気にならん。後、先生とか言い出すな」

「あら。指導役チューターの方がお好みですか? それともエルメロイ師範? アジアにならって老ラオ師シーとか?」

「.....先生でいい」

苦々しく言って、師匠は万年筆を置く。

どうやら、さきほどから書いていた文書を終えたらしい。

ルヴィアは無視していたが、つい自分は興味を惹かれて訊いてしまった。

「……師匠。そちらは手紙のようですが」

「カリーナたちの妹への手紙だよ。正確な話はできないから、せめて現場で見つかったお守りだけでも送ろうかと思ってね」

「妹が、いたんですか」

「どうやら、故郷では三つ子だったのが、あのふたりだけイゼルマ に雇用されたらしい。まあ、いるとは思っていたが」

「相変わらず、面倒見のよろしいこと」

ルヴィアが覗き込んだ手元にあったのは、いくつかに割られた形 跡のある、渦巻き紋を描かれた小石だった。

「多分、三つに割ったんだろう」

と、師匠は言った。

「ケルトの渦巻き紋は三重をもってよしとする。彼女たちがあの渦巻き紋を持っているのだから、もうひとりいるのだろうと予想はついた。実のところ、お披露目の黄金姫が整形ではないかと思いついたのは、これが理由だよ」

三人目がいるのでは、という発想。

整形された偽の黄金姫という思考には、そこからもう一段だった。

双子の黄金姫、白銀姫に─もうひとりいるのではないかと。

ルヴィアの瞼がかすかに伏せられる。

「双子……ですか。それは私にも縁深い話ですわね」

「エーデルフェルトには、代々天秤と呼ばれるふたりの当主がいると聞く」

透かしのはいった便箋を手に取りながら、師匠が口にした。

魔術刻印は通常ひとりにしか継承できない。できないというより も、分割する意味がない。それゆえ後継者はひとりに限定され、か なりの名家でもそのひとり以外には魔術を仕込んだりしないのが一 般的だ。

だが、何事にも例外はある。

エーデルフェルトは、そのひとつらしかった。

本来忌み嫌われる『後継者が二人』という事柄こそが、天秤の名の由来だという。

「もっとも、次代当主については君以外の話を聞いたことはない が」

「妹は大人しい性質ですから、故郷にひっこんでますのよ」

くす、と淡い笑みを少女は刻んだ。

少なくとも、その柔らかな笑みからすると、姉妹の仲は良いのではないだろうか。

綺麗な白い指をあげて、そっと絡ませる。口づけるみたいに重なったふたつの人差し指は、それこそ鏡映しを思わせた。

「双子による魔術とは、たとえるならば鏡合わせの自分との融合ですわ。揃うことで完璧な存在として君臨できる代わりに、常に互いの喉元に刃をあてている……。そのことを忘れたとき、鏡は割れて

しまうものです」

静かに、少女は語った。

黄金姫と白銀姫について話しているのか。

それとも、自分と妹についてのことなのだろうか。

一拍をおいて、

「ひとつだけ、疑問が残りました」

と、ルヴィアは口にした。

「あの闇オークションで、アトラム・ガリアスタすらはねつけて菩提樹の葉を競り落とさせる資金をイゼルマに提供したのは、一体どなただったんでしょう」

そう。

それだけは、どうしても分からなかった。

「時計塔も真っ先にその件を尋問したそうだが、いわくバイロン卿はオークション周辺の出来事について、まったく記憶がないそう だ」

「記憶……阳害……!」

ルヴィアが目を見張った。

加えて、魔術師の持つ資産はかなりの割合で非合法だったり、さまざまなカタチで隠されていたりするらしい。オークションでの金銭がこのような形で流れ込んでいたとすれば、正確に算定するのはよほど業界に通じた者でも難しいだろう。

「もうひとつ、私が疑問に思ってることがある」

と、師匠が付け加える。

「三人目がやってきて、黄金姫の術式が完成したのは、本当に偶然 だったのか?」

剝離城アドラでは、法政科の手引きがあった。

師匠があの城の秘密を見破り、自分やルヴィアの手によって打ち倒したのも、半ばはあの剝離城がそろそろ潰れてしまってもよいという法政科―化あだし野の菱ひし理りの狙いがあったはずだ。目的通り踊らされたのは業腹だがね、と呟いていた師匠の横顔を覚えている。

だが、今回は?

黄金姫の喪失を補おうとした結果、バイロン卿が冠位グランドの 魔術師を招しょう聘へいしたのは単なる巡り合わせだったのか?

整形されたカリーナが、結果として黄金姫以上の領域へと達したのは?

Г......

ふたりとも、黙り込んだ。

「くすくすくす」

遠い遠い誰かの笑い声が聞こえた─そんな気がした。

*

ちょうど、そんなタイミングだった。

思い切りよく、私室の扉が開かれたのだ。

「教授! ルヴィアちゃんが来てるって本当ですか?!」

顔を覗かせたのは、もちろん金髪碧眼の少年──フラットだった。

「っ、あなた―!」

ルヴィアが立ち上がりかけたあたり、一応初対面ではないらし

110

ガタンと揺れた皿を、さりげなくモヒカン執事がサポートして支え、少年はさらに朗らかに笑って手を打った。

「だって時計塔に見学に来るっていうから、きちんと挨拶しないとって! ルヴィアちゃん、エルメロイ教室をご指名なんでしょ! エルメロイ教室では俺が先輩だし、挨拶は人間の基本だって言うし!」

「そもそもルヴィアちゃんなんて呼び名を許したつもりはありません!」

抗議するルヴィアだが、ニコニコ笑うフラットを追い詰めきれず、顔を赤くしている。

意外とフラットが相手を見極めて話している……ということかもしれないが、社交性が壊滅している自分にそんな真相がはかれるはずもない。あ、今、放たれたガンドが介入されて消滅したような気もするけど、多分それもコミュニケーションの一環なのだろう。

「フラット! どうして後輩にまともな挨拶もできないんだ!」

今度怒鳴り込んできたのはスヴィンであった。

整った顔立ちには、もはや傷ひとつ残っていない。先の事件で、 自分と同じぐらいは彼も傷ついていたはずなのだが、さすがの獣性 魔術というべきか、この一週間どころか三日と経たずに完治してい たのである。

露骨に、師匠の眉が曇った。

「.....お前ら」

「いや僕は本当に後輩のことが気になって─あ、グレイたん! ああああ、グレイたんの桃色の匂い! 今日はちょっぴり憂鬱気味なブルーで四角なフレーバーまで!」

恍こう惚こつとした表情でくんくん鼻をうごめかす相手に、つい 師匠の背中へと回ってしまう。

スーツの肩口から葉巻の濃い香りがして、一瞬くらりと目め眩ま

いがした。

「グレイの周囲に近寄るなと言ってるだろう」

「.....は、はい.....」

師匠の言葉に、しょぼんとうなだれるスヴィン。

癖っ毛までどこかへなりとして、犬耳が折れ曲がったようだった。

Г Call і

「干渉開始プレイボール! あはは、ルヴィアちゃんってばそんな に喜ばなくても」

呪文までも入り交じり、フラットとルヴィアの闘争はなおさら激 化している。

仮にも君主ロードの私室は十分以上の堅けん牢ろう性せいと魔術的セキュリティを備えているし、フラットが基本受け身のスタイルなので、いまだ破壊物は出ていないが……もしもルヴィアと同じ性質の魔術師が相手だったなら、教室や講堂のひとつやふたつぐらいは破壊されているのではなかろうか。

そんな魔術戦のさなか、

「……やれやれ騒がしいことだね」

扉からゆっくりと現れたライネスが、愉しそうに唇の端をつりあげた。

師匠は、面倒くさそうに見つめ返す。

「だったら、君の方から一言いただければありがたいのだが」

「いやいや、それでは我が兄の権威が落ちるというものだろう。慎 つつましい妹としては職場での兄の威厳にも気を遣いたいのでね」

「お前は、単に私が苦しんでるのが見たいだけだろう」

「おっと、そんな真実を早々につくのは風流じゃないな」

しれっと認めて、ライネスが微笑する。

騒がしくルヴィアとフラットがやりあい─いつのまにやらスヴィンまでも加わっているのを眺めつつ、トリムマウとともに部屋を縦断して、焰ほむら色の瞳の少女はそっと師匠の腕に触れた。

「……もう少し、マシな解決策があったんじゃないかとか、思ってるのかね?」

「……今更だ」

と、師匠がそっぽを向く。

双貌塔の事件。

マイオはもちろんのこと、白銀姫もレジーナも自分たちを嵌はめようとしていたのは間違いない。バイロン卿の手中から脱出するためとはいえ、そのためにエルメロイの名とライネスを利用しようとしてたのは、疑う余地がない。

だが、その上で。

誰もが何かを失ったこの結果に、師匠が煩悶しないということもないのだろう。

魔術師バケモノの倫理を理解するということは、人間としての倫理を打ち捨てるという意味ではない。双方を抱え持っているからこそ、師匠の苦しみは普通の魔術師の倍以上にも膨れあがる。

そのことを誰よりも理解して、ライネスは口にしているのだっ た。

ほんの少し、嬉しそうに笑ったのは見過ごしておこう。

「だからル・シアン犬って呼ぶな!」

「あなたがた、先輩というなら少しはそれらしくできませんの!」

「あはは、やだなあ。今の俺とル・シアンくんってばこれ以上なく 先輩でしょう。時計塔のことなら何だって訊いて――あ、そういえ ば、アトラムさんに天候魔術の改良点教えるの忘れてた!」 いくら広いとはいえ、私室はあまりに騒々しく、揺れ動くようだ。

双貌塔の陰鬱な空気が嘘だったような──まるで、夢のように温かな風景。

「イッヒヒヒヒ! なんだ、涙目になってないかお前!」

「.....黙って」

皆に聞こえない程度に右手を強く振って、自分も一歩を踏み出す。

ライネスがほうと呟き、師匠が軽く首を傾げた。

「グレイ?」

「内弟子として、少し折せっ檻かんしてきます」

そう言って、心の赴くまま、三人の中間へ踏み込んだのであった。

*

─ひとつ、語り残した時間を繙ひもとこう。

実際の、事後はこうだった。

自分たちが気づいたときには、月の塔は半壊していた。

あの匣の怪物が喰らったのだとか考えるよりも、ただ茫然と地面に座り込んでしまっていた。自分たちが生き残れたのだと、そういう感慨さえもが遠かった。

「……ロード・バリュエレータは、バイロン卿と白銀姫たちを連れて、先に帰還したよ」

崩れた壁から夜空を見上げつつ、ライネスが話してくれたこと も、まともに意識には上らなかった。

今回の結果を受けて、すぐバリュエレータ派や周辺の派閥をとりまとめるつもりなんだろう、と少女は説明してくれた。時計塔の派閥抗争で生き残るためには、そうした地盤の調整が不可欠なのだろう。

「白銀姫とレジーナは、君に礼を言ってたよ。──マイオを助けてくれてありがとう、だとさ」

「そう……ですか」

誰かを助けられたことは、確かに嬉しい。

ただ、それでも虚しさは残った。あれほどの■が無為に消えたことも、そのために積み重ねられてきた歴史が失われたことも、胸を掻き毟むしりたくなるぐらいに虚しかった。自分はその顚てん末まつをつかのま眺めていただけではあったが、もっと輝かしい未来も、もっと華やかなる栄光も、彼らにはあってしかるべきだったのではないか。

「……くそ、何から何まで大損害だ」

少し離れた場所で、残されたアトラムは、怒りも露わに歯ぎしりしていた。

ちょうど数メートルほどの距離に佇んでいた師匠が、落ち着いた 声をかける。

「ご無事でなにより」

「はっ、当たり前だ! 防御術式の反動で、虎の子の精鋭が数人倒れたがね!」

それでも、本人は無傷で切り抜けたあたり、やはりこの魔術師も 侮れぬ力量の持ち主ではあった。

「.....ふふん。いい気味だね」

こっそり、ライネスが囁く。

唇が隠しきれずに歪んでいるのは、心底愉しんでいる証拠だろう。こちらも疲労は極限に達しているはずなのだが、肉体的な労苦よりも性癖が優先されるらしい。

そんな自分たちへ、

「一まあいいさ。ちょっとした厄落としだ。本命の戦場はこの後なんだから」

と、アトラムが振り向いた。

とりわけ、意味ありげに師匠を睨みつけ、宣言する。

「確かに狙っていた菩提樹の葉はなかった。君の推測とやらがあたっていた以上、賭けも僕の負けだ。だが、ほかの聖遺物を用意できないわけじゃない。代案はきっちりうってある。先代のロード・エルメロイにとって聖杯戦争は所詮遊びだったかもしれないが、僕には―」

「ひとつだけ注意しておこうミスター」

最後まで聞かず、師匠が口を開いた。

まっすぐアトラムを睨めつけ、短い言葉を突きつけたのである。

「聖杯戦争を、なめない方がいい」

その言葉にどれだけの想いが込められていたか。

終始師匠を下に見ていたアトラムが、一瞬とはいえ硬直したのだ。

「.....っ、は」

停止した心臓を無理矢理動かすかのように、息を吐き出す。

「これはこれは。ずいぶん思いいれているようだ。ははは、先代よりは君の方が前回の聖杯戦争での恩恵が大きかったからかな? まあ、さきほどの匣の機転はそれなりのものだと認めてやらんでもな

いが、君は第五次聖杯戦争には参加できない。協会の枠はとっくに 締め切られてるのだからね」

アトラムの声には、聞き逃しようもない嘲弄の響きがあった。

「あなたは……っ!」

「グレイ」

思わず飛び出しかけた自分を、師匠の手が制止していた。

「その通りだ。時計塔の枠では私の参加する余地はもうあるまい」

「は。自分の立場をよく心得てらっしゃるようだ」

「だが、それはあくまで時計塔の枠だ。あなたに心配されるようなことは何もない。これ以上得られるものもないだろう。早々に帰って、自分の準備をした方がいい」

「言われるまでもない。見ていたまえ。戦いというものは始める前に勝敗を決めるものだと、君やほかの魔術師たちに教えてあげよう」

大げさに背広の襟を正しながらアトラムは踵を返す。

「……ああ、そうだ」

足早に去りながら、褐色の青年は唸るように呟きをこぼした。

その声を、自分の耳は聞きとめていた。

「……竜殺しが駄目なら、竜使いを喚べばいい。クラスにはいささか不満があるがな」

*

今、あの褐色の魔術師は、新たな戦いに備えているのだろうか。

生き残った白銀姫やレジーナも、何らかの形で戦っているのだろ

うか。

時間は続いていき、人生も続いていく。どんな事件もそれ単体で終わったりはせず、明示的かどうかはともかくとして、影響を連鎖的に広げていく。水面に小石を投げ込めば、たとえ地表から波紋が見えなくなったとしても、水中のエネルギーは拡散していくのだ。

当たり前と言えば当たり前。

今回の事件が、多くの人々にどのような影響をもたらしていくのか、自分にはまるで分からない。師匠やルヴィアならもうちょっと 先まで見えているのかもしれないが、それでも全貌にはほど遠いだ ろう。

時間とは、なんと複雑な織物タペストリか。

Г......

そんな物思いにかられつつ、いくつかの授業を受けてから、自分 は師匠の時計塔の私室へと戻っていた。

ふと、途中で靴磨きの道具を忘れていることを思い出したのだ。 道具自体は時計塔にもスラーにも置いてあるのだが、たまには道具 自体の手入れもしなければならない。

幸い、こちらの私室もスラーと同様、奥と手前で切り分けられており、廊下に面している方の合い鍵は持たされていたので、自由に出入りすることができた。

(......さっきは、やりすぎたかな)

三人を仲裁しようとしたことで、自己嫌悪にも陥っていた。

ああいう風にはしゃいだ後は、どうしても反動で落ち込んでしまう。

相手に迷惑でなかったか、調子に乗って嫌われてないだろうか、 と後悔の嵐だ。フラットもスヴィンも迷惑どころか、いちいちまと もに記憶しないような性質だと頭では分かっているが、それが胸の 内の納得にまではなってこない。

暗い考えになって落ち込む前に、作業タスクを続行する。

「……えっと」

私室の靴箱を開いて、目的の品を発見した。

クリームとリムーバーはまだまだ余裕があるが、刷は毛けは寮の クリシュナさんが捨てる寸前だったのを貰もらい受けたものだか ら、そろそろ新しくしなければならないだろう。靴を磨くための布 も交換しておきたい。道具の善し悪しはそこまで靴磨きに影響しな いが、やはり気分というものはある。

「……バイト、しようかな」

ふと、寮で募っていた求人を思い出した。

師匠にはそのための経費も渡されているのだけど、せめてこれぐらいは自分のお金で買い換えてもいいんじゃないだろうかと思ったのだ。ぴかぴかになった靴を、どの程度師匠がありがたがってくれているかは分からないけど。

持参してきた紙袋にいれていたところ、部屋の内側から物音が聞 こえた。

(......師匠?)

普段なら、現ノ代ー魔リ術ッ科ジの街であるスラーへ移動しているはずの時間なのに、今日に限ってまだ師匠が残っていたのだ。

ほんの少し、内側の扉が開いていた。

言い訳しておくと、別に覗こうと思ったわけじゃない。

たまたま声をかけるよりも早く、師匠が奥の戸棚に触れて、何らかの呪文を唱えつつ鍵を回したのだ。物理的・魔術的双方の側面からなされた錠前だったのだろう。

内側から取り出された樫かしのケースを開けて、中身を師匠は手 に取った。

遠目だが、どうやら年代物の朱あかい布きれのように見えた。

(あれって一)

とある言葉が脳裏に浮かんだ。

師匠がアトラムとの賭けに持ち出した、聖遺物。

大切そうに、朱い布きれを手の平においたまま、師匠はひどく複雑な顔をしていた。

けして握りしめたりはしなかった。布に余計な皺ひとつつくことさえも、はばかっているようだった。かすかに眉と唇とが震えつつ動いているだけなのに、まるで万華鏡カレイドスコープのように、いくつもの想いが重なり合っていた。

怒っているような。

嘆いているような。

悼んでいるような。

喜んでいるような。

悲しんでいるような。

慈しんでいるような。

ふと、

「……この未熟者、と笑いに来ても良さそうなものだがね」

その呟きがこぼれるまで、どれだけの時間がかかったろうか。

「.....コ!」

思わず、自分はくるりと背を向けて、壁にもたれかかった。

口元に手をやって、声を必死に押し殺す。この時間だけは、絶対 に邪魔してはいけない気がした。ずるずる滑って床にへたりこんで もなお、唇にあてた手だけは離さなかった。

ただ、胸の鼓動がうるさかった。

とても大切なものを見た気がした。うっかり誰かの宝物を垣間見たような──いいや、きっと今垣間見たものは、あの人の心臓にも匹敵する人生そのものだ。

あれが、第四次聖杯戦争で、師匠が使った聖遺物なら。

あれが、第五次聖杯戦争に参加したいのだと、師匠が願う理由なら。

「.....ああ」

吐息が、こぼれる。

(─会わせて、あげたい)

痛いほどに、思ったのだ。

きっと、それは──ロンドンに来てから、初めて拙が抱いた『願い』だった。

〈了〉

解説と見せかけた形容しがたき何か

成田良悟

「ヘイ、リョーゴのFakeは完全にパラレルだから、ユー好きにしちゃいなYO。あ、マコゥトのエルメロイII世の事件簿はステイナイト本編と完全に同じ世界ね」

──と、陽気な調子で言い放たれた奈須きのこ氏の言葉により、三 田誠氏と私 (成田良悟) の明暗はハッキリと分かれました。

私は「なんてこった、好き勝手に世界を弄ると見越されて最初から本編と別世界認定されてしまった!」と。三田さんは「あ、あれ? 何だかいらん苦労を背負い込まされた気がする!」と。…… おや、明暗分かれた筈なのに両方とも暗い顔をしていますね。これはどういう事でしょう。

その後、同じくパラレル扱いとなるFate/GOの概要が語られるにつれ、「このぐらい無茶してもOKなんだ! じゃあ別世界でいいや! パラレル万歳! Fate/GOぐらい無茶してしまえ!」と私は悦び、三田さんは「え、このFGOの設定どこまで拾わないといけないの俺?」と更に暗い顔をしました。おお、やっと明暗が分かれましたね!

そうした前置きはさておき、私が何故このような場所で恐れ多くも『ロードエルメロイII世の事件簿』の解説めいた物を書いているのかと申しますと、私も『Fate/strange Fake』というタイトルにてFateシリーズの物語の一つを紡がせて頂いているからです。そのご縁により私がこの作品を解説する事となったのですが、実際のところは寧ろその逆、この『ロードエルメロイII世の事件簿』という一連の作品によって、私の紡ぐFakeシリーズが補足解説されているも同然なのであります。

いえ、拙作のみならず、三田誠氏がこの作品で紡ぎ上げているのは、『Fate』という壮大な世界の裏側を暴き出し、リアルタイムで定着しつつある真実の見方を指南する一人の男の講義(人生)そのものでした。

この『ロードエルメロイII世の事件簿』という物語は、シュレ

ディンガーの箱と化していた『時計塔』の蓋を躊躇うことなく開け 広げ、猫の死骸を甦らせてはニャアと元気に鳴かせる為の、ある種 の魔術儀式めいた『解説書』なのです。

奈須きのこ氏が武内氏をはじめとするタイプムーンの皆さんと創り上げた『Fate』ワールド。その空間は今も様々な人の手によって膨張を続け、あるいは特定の場所の深みが増し続けている状態です。三田氏はそうした混沌としつつある世界の中に、エルメロイII世という魔術師の生き様を通して、明確な道標を打ち立ててくれました。

私の生み出した『フラット・エスカルドス』というキャラクターも、最初はstrange Fakeの世界でしか馴染まぬだろうと思っていました。しかしながら三田氏は本作の中で、まだFakeの作中ですら描かれていない『フラットの魔術戦闘』を綴り出し(しかもタイプムーン世界屈指の魔術師を相手に!)、フラットをFate世界のエルメロイ教室の一員として導いて下さったのです。

深い感謝を覚えると同時に、三田氏の技量とエルメロイII世というキャラクターの持つ潜在的な可能性に恐れ慄きました。

エルメロイII世という人物はFate世界の隅々まで広がる枝と太い根を持ち、まさしく世界樹とでも言えるような存在になりつつあります。しかしながら、自分ではそれに気付かず『所詮は木だぞ?燃やされればそれで終わりだ』と飄々としつつも、心の内では世界樹の枝葉すら届かぬ最果ての海に至らんと願うなんとも厄介な御仁です。

冒頭で話したように、『とんでもなく面倒な事になってしまったぞ』と言いつつも、なんだかんだで時計塔と真剣に向き合う三田さんだからこそ、エルメロイII世というキャラクターを語り部として物語を紡ぐことができるのかもしれません。

Fateシリーズというのは、壮大でありながら様々な側面を持った生き物です。触れがたい幻想種のような雰囲気を持っているかと思えば、近所の塀の上にいる猫のように気軽に手を触れられる一面も持ち合わせて居ます。迂闊に手を出せば嚙みつかれる事もあるでしょうし、あるいは好き勝手にモフモフして自分の物にしようとすれば、周囲から『扱い方が違う!』と怒られる事もありましょうや。

私の『strange Fake』がそんな生き物に『今日はハロウィンだー! 派手に行こうぜヒャッハー!』と好き勝手着飾らせる無法者とするなら、『ロードエルメロイII世の事件簿』は、成長に合わせて完璧な礼服を型取り続ける一流の仕立て屋なのです。

そう……奈須きのこ氏の紡ぐ壮大にして洒脱に満ちた世界の一部に、三田氏が表と裏を繋ぎ止めるロンゴミニアドのような芯を通して下さっているからこそ、私のような人間が無茶をさせて頂けるのです。

『アニメに合わせて、第五次聖杯戦争のキャスターの元マスターとしてアトラムって新キャラ考えたんでヨロシクな!』と言う奈須きのこ氏に『キャ、キャスターのマスターは中年のおっさんだった筈では……』と呻く三田氏。そしてそんな彼に『はっはっは、世界とは日々進化するものよ!』と力強く言う奈須氏を見て、私は頭の中でなんとなくその二人の姿を別のコンビと重ねてしまうのです。

奔放なれど力強い王様、そしてそれに振り回される若いマスター の姿と。

そんな奈須きのこ氏と三田誠氏のコラボが生み出したこの物語が何処に向かうのか──読者諸兄と共に、教授の『講義』を最後まで見届ける事ができれば幸いです。

いつの日か、教授の瞳に最才果ケてアのノ海スが映る事を信じながら。

あとがき

三田 誠

- ─かくて、双貌の幕は閉じる。
 - ■に至った夢は、蜃気楼のごとく。

指の間をすりぬけるがゆえ、彼らが歩みを止めることもな く。

お待たせしました。

『ロード・エルメロイII世の事件簿』三巻を、ここにお届けします。

主人公であるロード・エルメロイII世は実に希有なキャラクターで、僕は一時お借りしている立場に過ぎないのですが、ひどく筆に馴染むのを感じています。それまで別のどんな話を書いていても、ひとくさり彼の台詞を綴るだけでするりと『事件簿』に帰ってこれるような、そういう馴染み方です。

彼の持つ鬱屈、捻れ、劣等感、それゆえごく稀に輝く後ろ向きな積極性。

そうしたものが、きっと僕の裡にもあるのでしょう。

おそらくは、ほとんどの方の胸の中にも。

だからこそ、この古く黴臭い魔術と神秘の物語は、誰かの心に響いてくれるのではないか、とそう考えています。

作中でも書きましたが、現実の歴史においても美と魔術には密接な関係があります。

美と数学と魔術、といってもいいかもしれません。とりわけ西洋において、美しさの多くは数字や比率へと変換され、正しい数字や 比率はそのまま魔術としての力強さに反映すると見なされていました。

黄金比や魔方陣はこうした筆頭ですし、数多ある魔法円のほとんどは精緻な数学あっての代物です。これらの数学と魔術は、また星々の在り方をあらわす天文学とも複雑に入り混じり、僕たちの文化に多大な影響を与えてきました。

では、その精髄がヒトガタに凝集されたなら?

つまるところ、イゼルマの魔術とはこのようなものです。

黄金姫と白銀姫、陽の塔と月の塔。長い長い時間をかけて、彼らは至高と信じた星の在り方を少しずつ人に写し取ってきました。星のように生きて、星のように食べて、星のように眠ることで、彼らはあの美を獲得してきたのです。

そして、現代に至って、ひとつの成果を得たわけですが……その 結末は物語の通りとなります。彼らの叫びが単なる妄執であったの か、はたまた必然の衝動であったのか。あなたならどう答えるで しょう?

*

本編とは直接関係ありませんが、いくつか益体もない話を。

シリーズ化が決定したときに覚悟したことがいくつかあるのですが、そのひとつが「時計塔から逃げない」でした。必ずしも舞台を時計塔におくわけではないにせよ、物語としてその方が面白いと

思ったなら、タイプムーンさんの世界観の中でも、とりわけ魅力的なこのブラックボックスにメスを入れることをけして躊躇すまいと。

また、二○○三年に発表された『Fate/stay night』も、いまやそのままの存在ではありません。アニメなどのメディアミックスや、多くの派生作品を経て、奈須きのこ氏自らの手で少しずつアップデートしています。『Fate/stay night』と近い時間を描いている『ロード・エルメロイII世の事件簿』では、そうしたアップデートの補強をしてみたいという狙いもありました。

蒼崎橙子の師匠であるイノライや、アニメになったUBWで登場したばかりのアトラムを採り入れたのはそういう理由です。

昔と今と、広がり続ける世界観の間をつなげる一助になっていたならば、幸いです。

最後になりましたが、キャラクターのひとりずつに驚くほど鮮やかなデザインを与えてくださった坂本みねぢさん、美と魔術の歴史からホロスコープまで考証いただいた三輪清宗さん、フラットの呪文や戦闘時の行動など細かいところまでご指摘いただいた成田良悟さん、そして奈須きのこさんをはじめとするTYPE-MOONの皆様に感謝を。

次は、また夏にお目見えする予定です。

二○一五年十一月

『Fate/Grand Order』を遊びながら

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」(著:和智正喜/富士見書房)

「Lord of Knights」 (Aming)

イラスト/坂本みねぢ 装丁/WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

3 「case.双貌塔イゼルマ(下)」

著者:三田誠

イラスト:坂本みねぢ

文章校正: 鴎来堂

角川文庫

2017年10月11日 発行

ver.002

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 3 「case.双貌塔イゼルマ(下)」』

2015年12月29日 初版発行

2017年6月26日 第七版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

%Japanese text only

